

ラ オ ス 紀 行

焼畑農業風景

春さきに山腹の斜面の草木などを伐採し
その跡に陸稲・雑穀・玉蜀黍等を植える

下の写真は焼き払った山腹の斜面に男は
棒で穴を開け、女は種もみをまく農作業



平成11年1月10日～17日
(1999)

石川県加賀市山代温泉神明街7の3
寺 前 信 次

まえがき	15
1月10日 バンコク	17
1月11日 ラオス	19
ラオスの概要	20
ラオスの正式名称	21
ラオスの歴史	23
ビエンチャンの歴史	24
ビエンチャン観光	25
タラート・サオ	27
TAN NAKO LAC	58
革命記念館	59
革命記念塔	60
第2次大戦当時の	60
ラオスに於ける	61
アヌサワリー (	63
タート・ダム (	64
ワット・シーム	64
ブッダ公園	66
ラオス・タイ友好	68
1月12日	70
ワット・シーサ	71
ワット・ホー・パケーオ . . . 32	1月16日 ラオス〜ウドーン・ターニー・バンコク . . . 71
エメラルド仏像の軌跡 . . . 33	1月17日 バンコク〜成田 . . . 71
ワット・ルアン . . . 34	精霊信仰 . . . 72
世界遺産の古都ルアン普拉バンへ 36	精霊と呪術 . . . 73
ルアン普拉バン及び	祈祷師 . . . 74
ルアン普拉バン王国の歴史 . . 37	霊魂 . . . 75
ルアン普拉バン観光 . . . 38	日本の民間信仰 (精霊) . . . 76
ワット・シェントーン . . . 39	辻政信参議院議員の失踪事件 . . . 77
ワット・マイ . . . 41	事件の発端 . . . 78
ワット・ウィスナラート . . . 42	事件の時代的背景 . . . 80
マノラック・ホテル . . . 43	失踪の原因と動機 . . . 81
ラオスの仏教 . . . 44	あとがき . . . 83

まえがき

平成11年、卯年の元旦を迎え「烏飛兎走」「飛兎竜文」「鹿を追う者は兎を顧みず」「兎の毛で突いたほど」「二兎を追う者は一兎をも得ず」「脱兎の如し」「株を守りて兎を待つ」など、卯年に因んだ多くの言葉を思い出したが、年老いたせいかわ「烏飛兎走」という言葉を今年ほど深刻に考えたことはない。

烏は太陽を、兎は月を表し、月日の流れがとても速く感じることを意味している。中国には三本足のカラスが住み、月に兎が住んでいるという伝説があり、そこから出た言葉が「烏飛兎走」である。

元旦の最高の楽しみは年賀状を受け取ることである。毎年その数が次第に減ってきて、近年とみにその傾向がすごいようだ。死は生の延長線上にあり、人生の終わりにさしかかるとスピードは俄に勢いを増し、早くなった歳月の流れは急峻な岩場から最後の滝壺に落ちていく感じがする。

年賀状の多くは長寿の祝福から長命を祈るものである。その中の同期生の某氏から頂いた賀状には、「戦いの上手かった歴戦の生き証人、大事に長生きして下さい」と添え書きがしてあった。中国戦線の戦友の某氏からの賀状には、靖国神社の初詣で「愛国の勇将に加護賜ることを信じ、心を込めて祈願しました」と書かれていた。後日、靖国神社の病魔克服のお守りと破魔矢が届けられた。病魔に冒されている私を心配して下さいご芳情に感謝し、それぞれ感激の元旦であった。

「通信」というのは「信」（まごころ）を通わせることで、過去を思い起こす人間ならではのものであろう。

戦乱の世紀に生を得た私は名状し難い狂瀾の戦闘に参加すること四年間、極限状態の人間心理を鋭く体験して幾度となく生死の境に追い込まれ、負傷すること三回に及び、凄惨極まる地獄絵図を見ながら名誉に生きてきたことは事実である。しかし老老の身となった今では、人生は風のように現れて風のように去っていったような感じがしている。

二年半前の胃癌手術の失敗から抗生物質を多投した結果、網膜に黒斑が生じ、重度の難聴に見舞われて会話が困難であるばかりかテレビの音声も聞き取れず、味覚がなくなって舌が痛み、臭覚も悪く、触覚まで極端に鈍り、五感が喪失して恍惚の人となった感じがしている。あの戦闘間の鋭かった感悲哀れにも消え失せてしまい、楽しい筈の世間も狭くなってしまった。

流れに浮遊していく根無し草のように夢うつつと覚醒を繰り返していた昨年六月、息子と娘の一家は我々夫婦の金婚式を東京・帝国ホテルで祝ってくれた。結婚当時は考えもしなかったことである。しかし寿命の常識から考えれば平均寿命も通り過ぎ、もう幾ばくも私の春秋は遣っていない筈である。

回顧すると「国破れて山河在り」の杜甫の詩や、芭蕉の「夏草やつわもの
どもの夢の跡」の句を想い出す。ビルマの白骨戦線から帰還した戦後早々から、
公職追放令に該当するとして総てから阻害され、愁傷とした精神虚脱状態になっ
て生きてきた私にとって、唯一の宝である子供たちに満足な思いをさせてやれなかつた
ことが、悔やまれてならない。

今年、銀婚式を迎える娘夫婦は同じ町に生活している関係から、我々老夫婦は「
負んぶに抱っこ」を続けてきた。そこで銀婚式の祝をかねての海外旅行は時宜を得た
ものと考え、「時は得難く失い易し」と決意したのであった。しかしながら中小企業を
経営する女婿は、この超不況の氷河期に夫婦揃って会社を休むことは困難だと述べ、
やむを得ず娘だけが同行することになった。

昨年、の今頃、一月七日から十一日間、人生最後の旅路と考えてビルマの戦跡巡り
と慰霊巡礼の旅に出た。しかし今回の旅は、娘は会社での立場上から一週間しか休む
ことが出来ず、私自身も「八十の三つ子」の諺の通り老耄となって赤子に還り、病
魔に襲われて「鐘鳴り漏尽く」(ショウナリロウク)の状態であった。

古い先が釜中の魚のように見えてきた私は、追い込まれながらも旅を続けていないと、
大きな忘れ物をしたまま人生が終わるような気がして来るのであった。昨年のビルマ
紀行を「人生最後の旅」と決意したが、病膏肓に入っていた私は未だ自分が燃焼しきつ
ていないことを悟り、旺盛な好奇心で見たいが病いは、前言を取り消してしまったので
ある。

人生は、我々が人生とは何かを知る前に殆ど過ぎ去っているが、人生は夢があるうち
が花である。戦中に重傷を負っても生き伸びた私の生命力は強く、病氣や老耄に打ち勝
つばかりでなく、目に見えない糸で繋がっている「運とツキ」があるのだと言う、変な
自信が旅立ちを決意させた。これは「旅気狂い」には何事も効き目がなく、「蛙に水かけ
石に灸をすえる」というう譬えの通りであった。

本当の旅は「知らぬ海や山みることのうれしければ、いづことなく旅立ちにけり」と
詠んだ正岡子規の心境だろう。目的地はどこでもよい。日常生活を離れ、心を遊ばせる
ことが旅の最大の魅力であろう。

「尻あぶって百まで」(何もできなくなり、炬燵にしがみついているだけでも良いから、
長生きしたい)という譬えは私は肯定できず、無意味なことだと思いながら選んだ旅先はラ
オスであった。

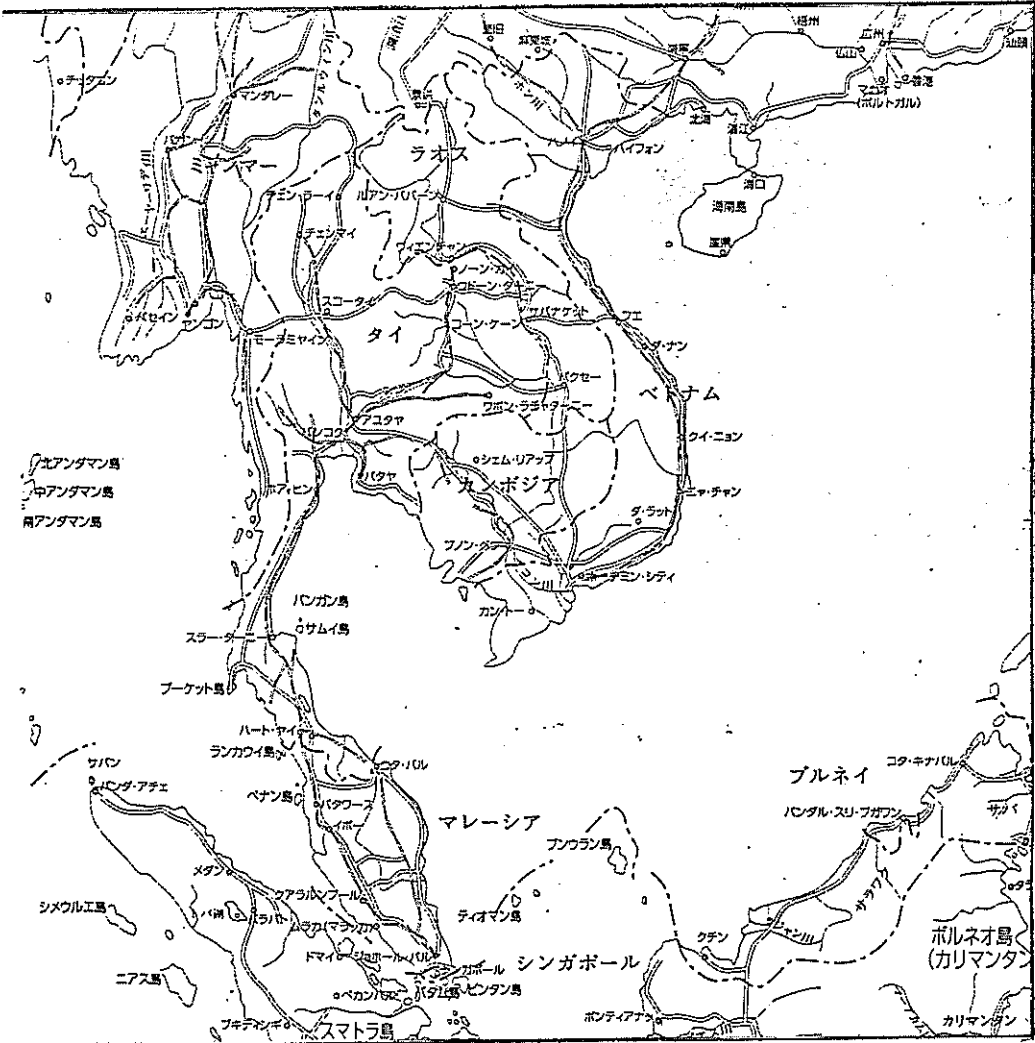
東南アジアで未だ足跡を残していない国の一つであり、自然の風情を残した内陸の未開
の国であると同時に、戦友の眠るビルマと地続きで類似する点が多いからであった。そし
てラオスの世界遺産は私を魅了して夢中にさせ、愚妻もまた憧憬の的であったからである。

ベトナムやカンボジアを訪れている私は戦人としても、ベトナム戦争当時のホーチミン・
ルートであったラオスは注目していた国であり、辻政信先輩

(大佐参謀、戦後衆議院3、参議院1、石川県出身)が消息を絶った国でもある。そのうえ近年になって漸く観光客を受け入れた未開の国は興味津々であつた。

ラオスには「米を食べる山鳩は大理石でも、石は拾って食べることはない」という諺がある。ラオス愛国戦線(パテト・ラオ)に従軍した男女は、このように変節しないで国に奉仕した例えとして伝えられている。このことは大戦中の日本人の心中と同様であつた。しかし、現在の我が国には通用しないことだが、果たしてラオスではどうだろうか?。このような多くのことが累責し、蠟燭は消える寸前ひときわ明るく燃え上がるような思いでラオス行を決意し、鹿島立ちをしたのであつた。

ラオスの位置図



1月10日 バンコクへ

屠蘇気分がさめた1月8日から北陸地方は数年ぶりの大雪に見舞われ、航空機の欠航が相次いでいる中で、1月10日小松発羽田行きの12:00の便は、降雪中に拘わらず僥倖にも定刻に飛翔し、親子三人のラオスの旅は確実性を帯びてきて安堵した。

地球を取り巻く雪雲の上は快晴で、地上の汚いものを凡て白一色で覆い、我々親子の旅立ちを祝福しているように見えていた。眼下に東尋坊や故郷の三国の海岸や、東京湾の海ホテルを眺めながら50分後には羽田に滑走し、リムジンに乗り継いで順調に成田に到着した。旅行社の名簿を見ると同気相求める旅人は男女半々の16名であった。

成田発バンコク行のTG671便も定刻の19:00に誘導路へと進んだ。夜間の明滅する空港の灯火を眺めていると、やがてエンジンの音が強まり、機体は滑走路を疾走し始めた。更に加速されるとガクンと小さな衝撃音を残して宙に浮き上がり、そのまま上昇して空港の光が急速に遠ざかった。

このままじっとしていると7時間後にはバンコクに着き、翌日には憧れのラオスの首都ビエンチャンの土を踏むのだ。1年振りにもろもろの煩雑から解放され、未知の旅路の思いに耽っていると、長細いタイ米の機内食の不味さに辟易された。しかしタイの思い出は尽きないものがある。

戦後になって戦史叢書で判明したことだが、終戦直前にビルマ派遣龍56師団の我々は、ビルマで闘っているがタイ方面軍の隷下に入っていた。敗戦後は何も知らされずに悲しい思いを抱きながら、数ヶ月を擁してビルマ・タイ国境を走る険峰の深山幽谷を踏破し、チェンマイに辿り着いた。しかし席を温める暇もなくバンコク東方のナコンナヨークに転進させられ、意気消沈しながら半年ばかり駐屯していた。タイの思い出はビルマの死闘戦場に繋がり、老いの繰り言はビルマの激戦場を愚痴るのであった。

歴史は必ず誰かに都合よく書かれている。戦闘記事は勝った方の記録が残り、負けた方の記録は抹殺される。だから「勝負は時の運」などと言ってはならないと私は思っている。負ける原因が山積していたから敗れたのであると自覚すべきだ。

私は昭和12年に軍人となり、運命の悪戯であろうか、信じられないような劇的な人生を歩むことになった。中国やビルマの殺戮とした最前線歩兵部隊の指揮を執り、死のある戦場で死を身近に感じながら死を背負って闘い、3度も負傷してが九死に一生を得た。誰よりも辛酸をなめた戦闘経験者だと自負している一人である。

我々年代の男たちの多くは戦場に駆り出されて死んでいった。豊かすぎて平和すぎる現今の日本は、生命を賭けて国を守ろうとした犠牲者も忘れ去ら

れてしまった。経済成長時代に唱えた「今日の日本の発展は戦没英霊のお陰」、
だと言った表現ができないほど昨今の経済状態は深刻で、本当に英霊に申し
訳ないことである。今回の旅は、それほど国家存亡の危機に立たされていた
時であった。

これらの凡ては敗戦が遠因である。軍人や政治家は成功しなければならない
人々であった。もし失敗すれば多くの部下が犬死にしなければならず、民
衆は塗炭の苦しみをなめなければならない。

回顧すると、最前線に近いほど真剣に闘ったと思うわれるが、前戦から遠
ざかった身の危険を感じない人達は、如何であったかと不信を抱いていたこ
とは事実であった。直接的に部下を指揮する者と、間接的に指揮する者との
責任感の差である。

戦場心理については今までの我が紀行文等にも書き尽くしてあり、重複して
書かない。但し、上の者は下の者のことについては永久に判らないが、下の
者は上の者のことは三日も見れば判明できた、と力説しておきたい。

歴代の首相や戦争当時に命令を下した最高責任者及びその子孫は、中国や
韓国の苦言を恐れて靖国神社の公式参拝を怠っている。数多の死を見てきた
戦友の一人として甚だ遺憾でならない。異国の地で闘い、東京九段の靖国の
御社に祀られることを心から信じ、散華した英霊の心を敬わない国は、世界
中でただ日本一国だけである。

右も左も平和を唱え、政治家たちは上から下まで福祉を絶叫し、人権尊重
を称えている。しかし、戦後の経済再建や平和の礎となつた犠牲者の心中を
思わずして、何が平和であろうか、何が福祉であり、何が人権尊重であらう
か。過去を追う者は過去の人といわれるが、私はそれでも良いと思っている。

「一殺多生」（一人が犠牲となって大勢を助ける）の精神で「生を見るこ
と死の如く」（運命は天にまかせる）と闘った私は、このバンコク航路に搭
乗する度にこれらのことを想い出す。今日のように衰弱して老老の人となっ
ても尚、肺腑をえぐるような痛切な叫びとなってくるのであった。

バンコクに近くなったのか、乗務員たちはサンドイッチと飲み物のサービ
スを開始した。搭乗機は空港の灯火が煌々ときらめく中を着陸態勢に入り、
翌日の十一日午前0時20分、バンコク空港に着陸した。しかし老いた我が
身は疲れ果て旅に対する意欲も衰えたのか、若さに勝るものはなしと虚しさ
を抱いてバスに乗車した。

宿泊するソル・ツインタワーズまで約30分。明朝（実は今朝のこと）の
ラオスの首都ビエンチャン行のモーニングコールは4:30、朝食は5:0
1、出発は5:45と告げられた。就寝は午前2時少々過ぎであり、睡眠時
間は約2時間足らずであった。

1月11日 ラオスの首都ビエンチュアンへ

重度の難聴のため持参してきた大型の目覚まし時計を、モウニングコールの4:30に合わせ、熟睡しようと催眠薬を服用して就寝した。胃癌手術以来、体力が衰えて寝付かれないために毎日催眠薬を服用していた。その上、養命酒まで持参して早期の睡眠を計った。しかし老体の疲労困憊と難聴が重なり、短時間の睡眠時間に催眠薬が効きすぎたのか、コールも目覚ましも何の役にも立たず、眠り続けていた。

隣室の妻と娘は扉を叩いて起こしたが全く私の応答がなく、大騒動の末に起こされた時間は5:00であったらしい。急いで寝間着を脱がして旅姿に衣替えさせ、荷物を整理し抱えられるようにして朝食のレストランに連れて行かれたという。涎まで垂らしていたというから見られた姿ではない。

しかし、これらのことは全く我が記憶にはなく、完全な恍惚の状態であったようだ。妻も娘も脳軟化症のように呆けてしまった私を、これから先も連れて行かれるかどうかと心配し、慌てたことも当然であろう。後刻、その一部始終を聴かされた私の無様な失態は笑いぐさとなったが、歴戦の勇将として沽券に拘わることであった。

「老いてふたたび児(こ)となる」という例えがあるものの、年をとった馬鹿者は若い馬鹿者よりも本当に始末が悪い。惚け茄子になっていたことを聴かされた私は、これから二度と海外旅行はしないと決断したのである。

その時に詠んだ愚妻の短歌

「老耄の夫をかばふ娘とわれとラオスの空にみ仏を訪う」

私の記憶に残っているものはメモ帳に書いてあるから明瞭である。それによると半死半生の状態ながら、朝食の機内食はホテルの食事より上等だと書いている。全く子供と同じで卑しいことだけは一人前のようだ。搭乗したプロペラ機の乗客は約50人で、人種の坩堝のような様相だとメモしている。それは我々日本人16名の他は白人にラオス、中国、タイ人であったと。

時間の経過とともに次第に脳細胞が正氣に戻ったのか、次のようにメモしている。プロペラ機は減速した。小さく見えるまな板のようなビエンチャン空港の滑走路に向かい着陸態勢をとると、悠然と流れる東南アジア最長の大河メコンは薄黄色に輝き、河畔に農民の集落が点々と見え隠れしていた。

淡い霧につつまれた空港は田舎の空港のように風情がみなぎり、機は土煙を上げながら無事に滑走して停止した。土煙を上げて着陸したのはモンゴル・ゴビ砂漠以来のことで、社会資本の貧弱さが窺えるのであった。

94年3月に旅行制限が解除され、旅行許可証の取得がなくともビザさえあれば、ラオス国内旅行は自由になった。しかし外国人を受け入れるホテルの設備や道路事情が悪く、日本人も昨年からは少しずつ訪れているようだ。

ラオスの概要

ラオスは歴史的に見ても13世紀以前は霧のように不透明地帯で文献はない。日本との交流もまた第2次世界大戦末期からで馴染みが薄く、ラオスという国を知る日本人は極めて少ない状態であった。

今回、日本に馴染みの薄いラオスの首都ビエンチャンと、旧都ルアンパбан、及びの周辺を訪ねることができた。其の概要を簡単に紹介する。

中国、ベトナム、タイなどに隣接し、フランス、アメリカの植民地時代を経験したラオスの歴史は、「侵略と外圧」に彩られている。数多いベトナム戦争に巻き込まれ、王政を廃止して社会主義国家になった。しかし王族を迫害せず、仏教はもとより古来からの精霊信仰を併存するなど、穏やかに伝統を維持するラオス人の暮らしには、不思議にもその苦悶が感じられない。それが第一の感想である。

不勉強の私などは大東亜戦争に突入し、初めてラオスという国の存在を知った状態で、

内陸部にある関係から同じ東南アジアでありながら、存在価値の認識が極めて低かった。ベトナム戦争が惹起して、ラオスがホーチミン・ルートとして使用されていることが判明し、戦争に巻き込まれてパテトラオと呼ばれた民衆戦線（左派）が結成された。そこで漸く関心を抱くようになった。

ベトナム戦争の陰の部分として戦闘が行われていたラオスは、「世界で最も不思議な国」に拘わらず、国外ではベトナム戦争に巻き込まれてベトナムに協力し、国内では内乱が進行していた。本当に不可解な国である。

ラオス国内では共産側勢力とアメリカを中心とした西側勢力が混在し、表面的には牧歌的なラオス人の生活の裏で、陰謀渦巻く奇妙な世界が存在していたのである。こうした対立した勢力が、ラオス国内の右派、中立派、左派勢力に加担していた。一方、ベトナムでは激しく東西の代理戦争として戦闘が行っていたから、奇妙であると同時に不思議な国であった。

1975年12月の革命後、王政を廃止して社会主義国家の道を行んだにもかかわらず、王族を迫害することもなかった。又、社会主義と仏教が併存していることなども（ビルマも同様）、外国人の目から見ると不思議である。

中国に見習ったのか、ラオスは1986年以来、経済解放化政策を打ち出し、自由主義体制との結びつきを強めようとしている。社会主義体制を堅持しつつ自由主義経済からの利益を得て、経済発展を成し遂げようと努力しているが、社会主義体制が経済開放政策の進展の阻害となっている。



多民族国家のラオス人はつかみにくい国民性で、かつてインドシナを植民地にしていたフランスは、ベトナム、カンボジア、ラオスの国民性を農業にたとえて「稲を植えるのはベトナム人、稲の育つのを眺めているのがカンボジア人、稲の育つ音を聞いているのがラオス人」と表現している。インドシナ三国を訪れた私の見方も同様で、ラオス人の労働意欲の低さに驚いている。

ラオスの正式名称・自然・民族

正式名称は「ラオス人民民主共和国」(Lao peoples Democratic Republic)

面積は日本の本州全土に匹敵する大きさで、人口は約500万人の小国である。国土の約80%は山岳高原地帯で北は中国、ミャンマー、西はタイ、東はベトナム、南はカンボジアに接している。(前頁地図)

山岳、高原とメコン川が自然地勢の特徴である。チベット高原から張り出したアンナン山脈が東隣のベトナムとの国境線をつくり、中国・雲南省から流れてくるメコン川は、国内を北から南へ約1500kmの距離を縦断し、北西部ではミャンマーとの、中部から南部ではタイとの国境線となっている。

東のアンナン山脈に隣接する形で、ジャール平原やボロベン高原が屋根のように繋がっている。メコン川は上流の山岳、高原地帯では谷間に狭い河谷平野をつくり、中流では山間盆地や扇状地、平野をつくり出している。

山岳、高原地帯と平野、盆地部は、山奥深くまで網目状に延びた無数の中小河川で結ばれ、雨季になると黄褐色の河流が山の斜面をメコン河谷に向かって流れる。

国土は地勢上から北部、中部、南部の3地域に区分できる。北部はボンサフンからサムヌアにかけて山塊地帯が続き、中央部に標高1000m前後のジャール平原が位置し、各地方は孤立して横の連絡は困難である。平野部としてはルアンプラバン盆地とビエンチャン平野がある。

国土の大部分が山岳、高原地帯のために国内各地の往来が困難で、地域割拠性が助長されてきた。主要民族は「ラオ族」で総人口の6割を占め、メコン流域の平野部に住み、水稻耕作に従事する。

タイ系のラオ族の故地は中国の南部といわれ、メコン川や中小河川に沿って南下してきた。山岳、高原地帯には多くの少数民族が割拠し、その数は100ともいわれ、まさに民族の坩堝である。

これらの少数民族は独自の文化と言語(多くは文字なし)をもち、自律的な小集落をつくり、焼畑によって雑穀や陸稻を耕作し、狩猟、採集などを併せた自給的な生活を営んでいる。

他に少数民族としては都市部に華僑が約10万人、ベトナム人が約3万人がいる。両者ともフランス植民地時代に移り住んできた人達で、王制から人

民共和制に変わった1975年以前の段階では商業、流通機構、金融業などを握っていた。

宗教は上座部仏教（小乗仏教）が1947年憲法で国教に定められ、ラオ族のほとんどが敬虔な仏教徒である。寺院の総数は約2000、僧侶の数は約1万5000人で、僧侶による寺子屋式教育は山間部の初等教育の一助となっている。

中国、タイ、ベトナムとは伝統的に国境付近での地方交易が盛んなため、山岳地帯という地理的条件と相俟って地域割拠性が極めて強い。したがって歴史的には地方分権国家であるが、社会主義政権成立後、ラオス政府は中央政権制度の確立に意を注いでいる。

しかし社会主義体制によって民族学の研究者たちが、ラオスの国土に長期間足を踏み入れることが困難のため、ラオス民族に関する文献は殆ど無いと言っても過言ではない。民族的には地球最後の研究の宝庫といわれており、出発前に私も図書館や書店に足を運んだものの無に等しい状態であった。

フランスの植民地時代に、こうした民族学的な研究が行われた形跡はある。しかし残念ながら革命後の社会主義体制を確立するため、西側の文献は不要なものとして排斥され、焼却されてしまった。このことは共産中国と同じ経過を辿っているから面白い。

国際的にはタイ、ミャンマー（ビルマ）とともに、「麻薬の三角地帯」を形成する国として有名である。ラオス政府は麻薬撲滅委員会を作り、山岳民族が代替作物の栽培を行うように奨励し、国連も支援している。

しかし重労働の山岳民族にとっては、代々から麻薬は鎮痛効果があるから栽培してきたもので、根絶は困難なようである。私も終戦後、ビルマからタイ国境の2000に級の山岳地帯を踏破した際、白い花を咲かせたケシの花の絨毯畑を見た。その眺めの素晴らしさは今でも脳細胞に刻まれている。

現在のラオス人は過去の長い戦争と苦惨のため、混血児の多い民族となったようである。ラオスの女は15～16歳あたりで男女関係が結ばれ、30歳になると子供、混血児が5、6人もいる人が少なくないと言われている。また婚縁については血統になんらの考慮もせず、ただ一時の感情に走って結婚する。外国人と同居、結婚、それがやがて離婚、離別は日常のこと、叔父と姪といった近親結婚も珍しくないと言う。

乱婚、混血児の多いことはラオスの歴史の変化、時代の移り変わりの一つであろう。かつてある西洋人が、混血児の多いラオス人を称して15世紀の客伍民族と嘲笑したが、ただの冗談では片づけられない。

ラオスの歴史

ラオスの古代は霧に包まれ、はっきりしていないが次のような伝説がある。

その伝説によると、天の使者クンボロムが白象に乗って降臨し、地上を七人の息子に分割統治させたが、そのうち長男のクンロの支配したのがラオスだ、というのである。

他の伝説によると、ある日、神様が熟したスイカを太陽の中で爆発させたところ、ラオスの各地にスイカの種が落ちてきた。落ちてきた一粒一粒の種が、やがて人間に生まれ変わった。その生まれ変わったのがラオス人だというのである。

ラオ族が漢民族に圧迫されて中国の雲南地方から南下し、ベトナム、ラオス、タイ、ビルマにまたがって居住するようになったのが、10世紀頃からのことである。当初は地方に土侯国を作っていた。

この土侯国は12世紀頃までタイと同様に、クメール帝国の庇護下にあったが、この頃から周辺諸国や異民族との抗争を繰り返し、次第にラオ族統一に向かったと言われている。そのラオスの歴史を語ろうとすると、それは「苦難の歴史」としか言いようがないようだ。

現在のラオスの地に南下してきたラオ族は、「ランサン年代記」によると、最初の統一国家を1353年に現在のルアンプラバンに建国した。この国を「ランサン王国」（ランサンとは百万頭の象の意）といい、その領域はメコン川中流域から東北タイまで占め、チェンマイなどを従属させた。

16世紀半ばのセーターティラート王のとき、ビルマの進攻で首都をビエンチャンに移した。1641年にオランダ商人が交易のため渡来し、ラオスは初めて西欧世界に紹介された。

18世紀初めに王位継承をめぐる内訌があり、ランサン王国はルアンプラバン、ビエンチャン、チャンバサックの3王国に分裂した。これら弱小の王国は強力な隣国ビルマ、シャム（タイ）、ベトナムの格好の餌食となり、国土は浸食された。18世紀後半、シャムは3王国を属国とし、一部を併合した。19世紀に入ると、ベトナムのグエン（阮）朝が、北部ラオスのジャール高原地方を自国領に編入した。

19世紀後半になるとフランスは、ベトナム、カンボジアの安定した植民地支配を継続するため、戦略的な位置を占めるラオスに触手を伸ばし始めた。グエン朝の北部ラオスの宗主権を口実に、フランスは1886年領事のラオス駐在を認めさせ、99年にラオスはフランス領インドシナに編入された。

フランス植民地下では、各民族が互いに敵愾心や憎悪をもつように仕向けられ、民族分断の統治が行われた。過酷な税金や労働が住民に強制されると、自然発生的に反仏蜂起が起こった。

フランスの植民地時代の特徴は徹底した「愚民政策」と「放置主義」であり、そのため人材養成が欠落し、植民地経営に奉仕する経済体制が作られた。

1945年4月に日本軍の後押しでラオスの独立を発表したが、日本の敗戦後すぐに、フランスは降下部隊を使って反仏の芽をつんだ。これに対し、日本の敗戦直後に結成された「自由ラオス」は、ビエンチャンに臨時政府を樹立した。この政府はフランス軍に押されて46年4月にタイに移り、亡命政府となった。

一方、フランス側についたルアン普拉バン王国は、46年8月にフランスと協定を結び、ラオス内政の自治を与えられた。こうして成立したラオス王国は47年に憲法を制定し、フランス連合内での協同国として独立した。しかし、いろいろの制限が付けられ、完全な主権国家ではなかった。

タイにあった亡命政府は、この独立によって解散を発表したが、王国政府と妥協しなかった左派は50年8月、自由ラオス戦線（56年にはラオス愛国戦線と改称、この戦闘部隊をパテト・ラオと呼ぶ）を結成し、ラオス東北部のサムヌア省に臨時抗戦政府を樹立した。

1953年10月に王国政府はフランスとの間で「友好連合条約」を結び、ラオスは完全独立を達成した。54年のジュネーブ協定では、休戦、外国軍の撤退、休戦監視委員会の設置、国内統一のための総選挙、パテト・ラオの北部2省への集結などを定めた。

しかしアメリカは、東南アジア機構（SEATO）を発足させ、王国政府へ軍事援助を始めた。しかし王国政府と左派のパテト・ラオ及び右派勢力の相互不信から国内は混乱し、政治は空転状態が続いた。そして57年11月に王国政府と各勢力の合意により第1次連合政府が成立した。

危機感を深めた右派は58年にパイ・サナニコーン内閣を成立させ、親米政策とパテト・ラオ閣僚の逮捕、投獄などを強行したため、内戦が再び始まった。この内戦には東西両陣営の対立が影を落とし、東南アジア条約機構の主力やベトナム統一問題がからみ、代理戦争の様相を呈した。

60年8月、コン・レ大尉のクーデタが起こり、平和・厳正中立を掲げたプーマ内閣が成立した。これに対して右派の軍はコン・レ大尉の軍を破ってプーマ内閣を倒し、右派内閣を成立させた。

コン・レ大尉の軍とプーマ中立派はジャール平原に逃れて本拠を構え、パテト・ラオ勢力は北部2省を拠点とした。

国内は混乱を重ねたが、61年から62年にかけての3派間の停戦調印、ジュネーブでのラオスに関する14ヶ国会議、ジャール平原会談を経て、62年6月、第2次連合政府が誕生し、ラオスの中立を定めたジュネーブ協定が国際的に承認された。

しかし、3派の対立と不信は増幅するばかりで、第2次連合政府も63年1月、わずか10ヶ月間で事実上崩壊した。

64年に右派と中立派の統合、アメリカ軍の偵察飛行と解放区への爆撃開始、右派のクーデタ失敗、65年にはパテト・ラオと中立左派の政治協議会議などの混乱が続く中で、右傾化したプーマ政権とパテト・ラオ勢力とが国内を二分し、一進一退の攻防戦が展開された。

ベトナム戦争の激化とカンボジアの内戦の拡大する中で、パリにおけるベトナム和平会談の進展とともに、ラオスでも72年10月から和平会談がビエンチャンで開始された。その結果、74年4月に第3次連合政府が難産のすえ誕生した。

この和平協定の特色は、ビエンチャン、ルアンプラバン両市の中立化、両派による合同軍、警察の発足、大使館内の偽装軍事要員の排除などであった。この協定ではパテト・ラオの主張が大幅に取り入れられ、この新政府は1年8ヶ月後に新発足するラオス人民民主共和国への一里塚となるのであった。

75年春からのカンボジア、ベトナムにおける解放勢力の攻勢と、プノンペン、サイゴンの陥落は、パテト・ラオの奪権闘争を勇気づけた。パテト・ラオは75年6月にはラオス全土を制圧し、王国政府の自壊はもはや時間の問題であった。

同年12月、新生ラオス人民民主共和国が成立し、大統領にスパヌウォン、首相にカイソンが就任した。

王制から人民共和制への移行は、ラオス特有の平和的な手段で行われ、退位したワッタナ王は大統領顧問、プーマ前首相は政府顧問として新政府に名を連ねた。

ベトナム、カンボジアのような武力解放の形をとらず、一滴の血も流さない政権交代であり、ラオス型社会主義が動き始めたのであった。

この新体制を推進したのはラオス人民革命党である。同党はインドシナ共産党のラオス委員会からつくられ、ラオス愛国戦線を中心勢力をなしたと言われている。

新国旗には上下両端が赤（人民）、中央が青（国土）地で、白い丸（清潔）が中心にあり、愛国戦線が以前から使用していた旗を採用した。

右の写真は
ラオスの山岳民族



ビエンチャンとビエンチャンの歴史

「ビエンチャンの歴史」

ラオスの首都ビエンチャンの「ビエン」とは城壁で囲まれた町ということである。「チャンダナ」とは梅檀(ヒナノ)の花のことである。「ダナ」はラオ語では発音されないから、ビエンチャンと呼んだ。即ち、「梅檀の木の城壁で囲まれた町」という意味であり、別称を「森の町」と云われている。(右はビエンチャンの位置図)

ビエンチャン特別市の市部人口は約50万でメコン川中流域の河岸平野の中央部に河口から1584km遡った左岸に位置し、対岸はタイ領である。

河川及び道路により国内各地へ通じ、政治、経済、文化の中心地となっている。ラオ族のほかには華僑、ベトナム人が多く住み、この地は早くから開け、碑文などの史料によると、大きな集落があったと云う。

16世紀半ばに中国やベトナムの史書に、万象国の名で記されているランサン王国の首都となり、同王国が1707年に分裂してからは、ビエンチャン王国の首都となった。

1827年、チャオ・アヌ王がシャム(タイ)に破れ、王国はタイに併合された。99年からはフランス領インドシナの理事長官が常駐し、ラオス全土を掌握した。

1953年のラオス完全独立によりその首都となった。市内はメコン川に沿って細長く、中心部にはフランス領時代の官庁の建物が建ち、森の都といわれるほど樹林が多い。

独立後、市街地は東部に拡がり、政府の建物が目立っているほか、仏教国り首都だけあって、市内各地に約20の名刹がある。

ビエンチャン市内にあり、ラオスで最も良く知られている仏教寺院タート・ルアンは、ランサン王国の第18代目の王セーターティラートによって1566年に造営された。内部には仏舎利が秘蔵されていると伝えられ、建築全体が古代インドの宇宙観にみる須弥山(シュミセン)を具現し、ラオス建築独特の形をみせている。外周の回廊は一辺が85mもある。



「ビエンチャン王国の歴史」

ラオスのランサン王国が1707年に分裂して以来、ビエンチャンVientianeを都とした王国のことを「ビエンチャン王国」と云う。

ランサン王国は14世紀半ばに北部のルアンプラバンを都として誕生したが、16世紀半ばのセーターティラート王の時、ビルマ軍の侵入から難をさけるために都を南のビエンチャンに移した。

ビエンチャンにはラオスの建築美を誇る仏塔タート・ルアンや王宮が建立され、タイのチェンマイから招来したエメラルド仏像がワット・プラケオに安置された。1574年にはビルマ軍が侵入して数年間、ビルマの支配下に置かれた。

1694年のスリニャウォンサー王の死後、王位継承争いが生じ、1707年、旧都ルアンプラバンで、王孫キンキットラートがビエンチャンからの分離独立を宣言し、ランサン王国は、北のルアンプラバンと南のビエンチャンの2王国に分裂した。そしてビエンチャンでは、ベトナム生まれで王の甥サーイ・オン・フエが1711年に即位した。

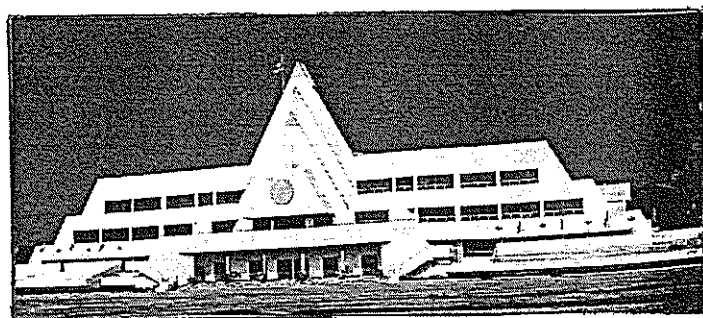
ビエンチャンは隣国タイのアユタヤ朝が67年にビルマに滅ぼされた時、ビルマ側に加勢したとして、78年タイ軍に占領され、以後タイに服属した。

この占領の際、ルアンプラバンの守護仏「プラバン仏」とともに、ビエンチャンの守護仏「エメラルド仏像」もタイに持ち去られた。

1804年に即位したチャオ・アヌは、南部ラオスのチャンバサック王国との連合によるラオス独立のために、タイ攻略を行ったが、タイ側の反撃にあって捕らえられ、29年タイのバンコクで辱めを受けて憤死した。

ビエンチャン王国は滅ぼされてタイの直轄領となり、住民はタイに強制移住させられた。

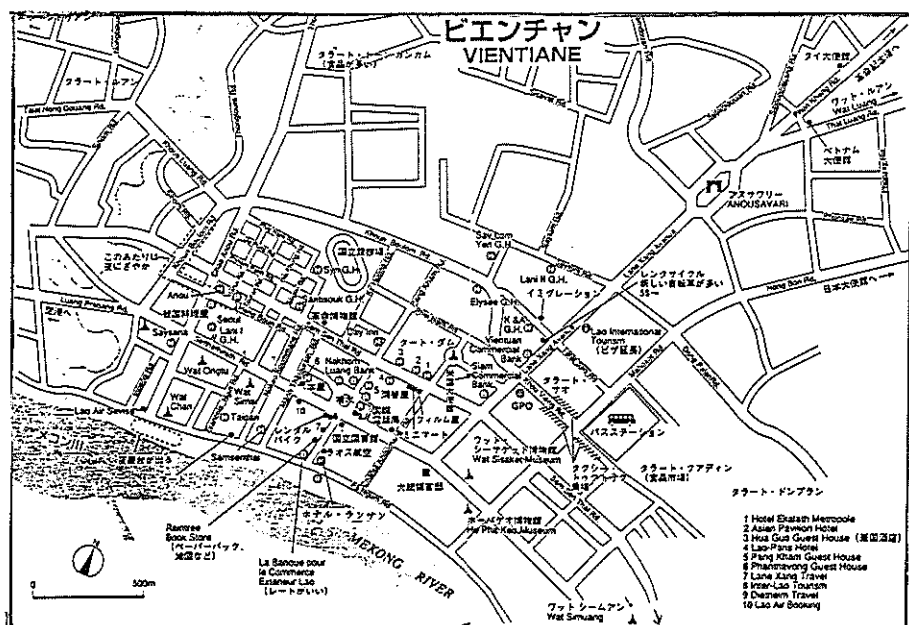
下の写真はビエンチャンにある現在の国会議事堂



ビエンチャン観光 (6頁に続く)

搭乗機のTG690便は9:30にビエンチャン空港に着陸。人間の運命などとは何時も小さな偶然に支配されていると思いながら天を仰ぐと、空は薄い霧模様であった。これは大河メコンから発生する水蒸気が影響しており、午前中は曇天のようだ。小さな田舎風の空港ビルを出て出迎えたマイクロバスに乗車し、川沿いに東に広がった市の中心部へと進んでいった。

人口50万人の首都の街は疑うほど素朴で静寂で、栄耀栄華の時代があったことは考えられず、平和で時間が止まっているような気配であった。



ラオスに関してはガイドブックすらなく、すべてが処女地に行くようようであった。ラオスの人々はメコンにはナーガ(蛇神)が住んでいると信じており、そのメコンと共に生きる敬虔な仏教国の世界を凝視していると、間もなくバスはビエンチャン第一の「ホテル・ランサン」に到着した。

ラオス史の中でラオスが栄えたときが一度だけあった。それは前記したように1353年に建国したランサン王国(百万頭の象の意)であった。ラオス人は栄光の当時を現在も夢に抱き、国旗に白象を描いてビエンチャンの目抜き通りをランサン通りと命名している。

我々一行が投宿するホテルも「ランサン・ホテル」で、昔は政府関係のホテルだったと云われるが、我々から見れば片田舎の木賃宿であった。

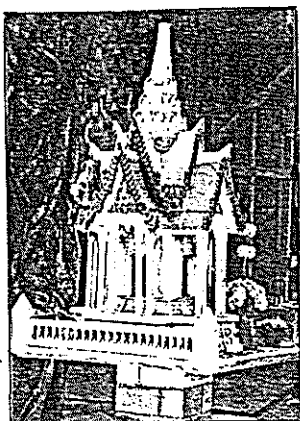
旅装を解いて暫く休憩する暇もなく、昼食を摂るために市内のレストランへとバスは出発した。時間が止まっているような国で慌てる必要があるのか

と疑問を抱いていると、私の網膜を刺激してきたのは、ホテルと道路をはさんだ真向かいの商店の前に立っていた、「精霊」を祀った「祠」であった。二本の大木の間に祀った精霊祠は小型の寺院のように黄金色に輝き、ラオスの人々の生活の一面を表現していた。（右は精霊祠）

（精霊については項を改めて後記する）

真冬の街路樹は熱帯とはいえ緑は幾分色はあせており、低い太陽の光はその影を長く伸ばしていた。昔の日本でも流行していたミゼット型オート三輪車（トウクトウクと呼ばれている）タクシーが行き通う街路は車と人の混雑はないようである。

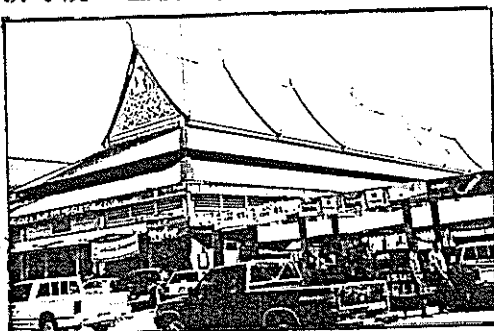
光に吸い込まれるように窓際から車窓を眺めていると、やがてバスは沢山の車が駐車していた広場に入ってしまった。そこがラオス独特の大きな屋根が目立つ「タラート・サオ」（朝市）であった。



タラート・サオ （前頁地図の中央右下）

朝市の大きな三層の屋根はラオスの仏教寺院の屋根を真似たもので、その三角破風には曼陀羅模様が描かれ、さすがに仏教国であることが一目瞭然であった。しかも不思議なことに、日本の神社の千木に似たものが見えていた。

ビエンチャンで一日中活気づいている所が、タラート・サオと呼ばれる朝市で、午後4時まで開いている庶民の台所である。両替所まで設けられている市場に諸民族の足が集まり、お祭り騒ぎのような人集りであった。（右上は朝市の全景）



大きな市場はどこに何があるのか見当もつかず、ルアンプラバンからの帰路にも、半日の自由行動が予定されているからと、買い物は諦めてカメラを向けながら歩き回った。（右は貴金属売場）



一瞥して垣間見たところ、物価が極端に安いことに度肝を抜かれてしまった。

物価の予備知識は必要でなく、品物のある場所を覚えることが問題であった。

この市場までの大通りには店舗らしき商店は見当たらず、そのために凡て

のものがタラート・サオに集中して大繁盛している。国営の百貨店も入っているらしく、食料品をはじめ衣料品から電化製品まで、生活に必要なものは全部そろっている。

ラオスに足跡して初めの観光地が朝市であったから、彼等にとっては自慢の場所であろう。しかし大混雑はしているものの貴金属売場（前頁下の写真）だけは閑散としていた。本物かどうかは判らないが、社会主義の国家でも、一応は揃えておかなければならないのであろう。国民が身につけような経済状態ではないことだけは確かである。

ミャンマーの首都ヤンゴン（ラングーン）の大市場・アウン・サン・マーケットによく似ていると感じながら、広々とした売場の中を見て回った。その結果、1時間程度の時間では物色できないことが判明した。ミャンマーでは日本語を話す人が案内してくれ、外貨獲得の一手段だと感心した。ラオスが観光に力を入れるなら、先ず外国語の勉強から始めなければならない。

伝統的な少数民族山岳民族の織物や竹、木工細工などの手工芸品の売場には、外国人観光客が寄り集まり、世界経済の不況は何処吹く風とばかり殷賑を極めていた。これも物価が格安であるからである。

TAM NAK LAO レストラン

タラート・サオの自由行動の時間も終わり、昼食は市内のTAM NAK LAOレストランで摂ることになり、ラオス最初の食事に期待してバスから降り立った。

ローマ字のLAO・Restaurantは判るが、ラオス語の文字は判らないのが当然だと、適当な広さの庭園に視線を移した。

ピンク色の熱帯植物の大輪の花が鮮やかに、一際目立って我々を引き付けた。日本の厚物の大菊に似た黄色い鉢植えも飾られ、矢張り東洋人の庭だと目を見張っていると、昔の日本の小学校にあった二宮尊徳のような陶像が据え置かれていた。薪を背負った陶像はラオス素朴な姿で、ラオスの真心を発見したという感じであった。

（右上は薪が入った駕籠を背負う女性陶像）

一樹の陰、一河の流れも他生の縁だと瞳を建物に向けると、そこに絶世のラオス娘が笑顔を振り向けて迎えてくれた。

（右下の写真は笑顔で出迎えてくれたラオス娘）



ラオスの薄紫の民族衣装に、茶褐色のたすきを左肩から右腰に吊したこの姿を「沈魚落雁閉月羞花」（チンギョラクガンヘイゲツシュウカ）と形容するのだろうか。あまりの美しさに魚は沈み、雁は落ち、月はかくれ、花もしぼんでしまうような美人であった。男性は老若を問わず美しい女の姿には憧れるもので、それは嫌らしいものではないのである。

ラオス料理もまた美人同様に、珍味佳肴のご馳走だろうと涎を垂らすような思いで室内に入った。

初めてお目にかかったラオス料理は、盛り皿に4人分ずつが出されており、それを各自が分けて食べる中国式の食べ方と同じであった。（右はラオス料理）

日本や中国料理と同じように花飾りの野菜があり、鶏肉と玉子にキュウリ、トマトの他、豆腐のスープ、ソーセージ、エビフライ、野菜サラダ等の料理が主で、牛や豚肉類のないのがラオス料理のようである。

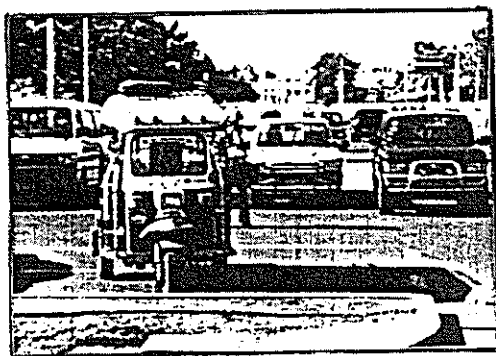
飲み物はビール、ジュース、ワインなど、概ね凡てのものが揃っていたようである。主食はタイのチェンマイやミャンマーの山岳民族のように、餅米のご飯だと聞いていたが、このレストランでは普通の白米であった。この店は特に我々に白米を提供したのかも知れないが、その後の食事は殆ど餅米であった。

味覚の欠乏した私には料理の評価までは出来ないが、普通並の食欲があったことは、合格点が付けられたのかも知れない。しかし以降の食事は不味いと感じた方が多く、南方の料理に旨いもの無しである。

ラオス全般に通ずることだが、レストランの中で蠅が飛び回っていたことは不合格である。素晴らしい観光名所もあるラオスは、衛生上の点に於いてもっと考え努力すべきである。



（下の写真はオート三輪車が走る市街風景）



革命記念館（15頁地図の中央左側）

ラオスで最初の食事を味わったのち、バスは市の中心部を貫くサム・セン・タイ通りを東に進んだ。停車したところに建っていた建物の真正面に労働者、農民、軍人の三体の像が、社会主義国を象徴するように黄金色に輝いていた。これがラオス革命記念館で、戦争博物館と呼んだ方が適切ようである。

建物の正面には幾本かの国旗が両側に翻舞（へんまわ）とひるがえり、中央玄関の上には国旗を円く描いて☆のマークが付けられ、どこまでも社会主義の国の例に倣った景観を呈していた。

（下は革命博物館の正面）

内部の見学は時間的に許されなかったが、前庭に据え置かれていた戦車は捕獲した米軍の戦車だろう。

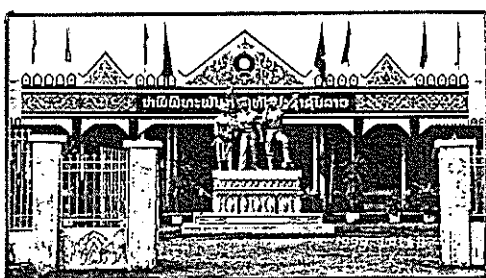
ラオスの革命は無血革命であったが、対米（ベトナム戦争当時）戦争から戦後を通じ、建国までの間は米国とソ連・中国との代理戦争として国民同志が、右派・中間派・左派として抗争に明け暮れ、悲しい惨状を呈したのは誠に同情の至りであり、このことはラオス国民の本意ではなかった筈である。

一方、国破れて山河在りの日本は、米国による押し付け革命を文句も言えずに甘受した。だから革命記念館や戦争博物館と称するものは無い。ただ少々の兵器は靖国神社に奉納されているが、殆ど全部は連合国の武装解除によって、巻き上げられてしまった。

私の指揮した大隊はビルマ・シャン高原の首都タウンジー付近で終戦を迎え、タイ国境を流れるサルウィン川のジャングルの中へ、自発的に兵器弾薬を集積して置き去りにしてきた。連合軍は我々を日本一強い北九州部隊だと叩いていたのか、何の指示もしなかった。戦いに疲労困憊していた我々は敵の顔も見ることなく、自ら武装解除したことが想起される。恐らく残置してきた兵器弾薬は少数民族のシャン族が使用していることだろう。

我々が闘った戦闘の記念となるものは戦史だけである。しかし、防衛研究所戦史室出版の戦史叢書は、軍以上のことしか記載しておらず、それも極く簡単に要領を得ないと私は思っている。最も我々が希望している師団や聯隊の戦史は、激戦地になればなるほど戦死者が多く、残念ながら編纂できない云うのが現実である。

記念館を取り囲んだフェンス外側の道路上には、木陰に車を停車して麺類を売っている三輪車が店を開いていた。しかし人影もないばかりか呼び声すらなく、何事も慌てず競わず、実にのんびりとして時間が緩慢に流れているようであった。

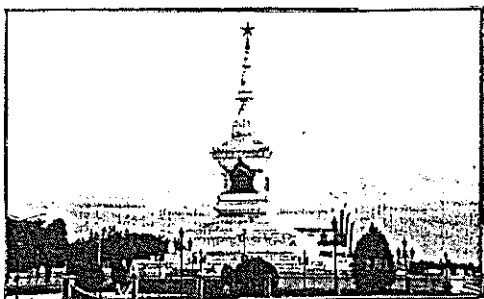


革命記念塔（無名戦士の墓）（15頁地図の右上枠外）

革命記念塔は市街地の東北方の広大な敷地の中に聳え、仏塔（パゴダ）のように造られた白亜の塔の天辺には金色の☆を頂き、国民の崇高の的となっていた。（右下の写真は革命記念塔）

国家の匂いがする革命記念塔は、無名戦士の墓としてラオス人から崇敬され、外国の要人がビエンチャンを訪問した際には必ず参拝するところである。

ビルマのパゴダに似ている塔の中断には、ラオス語の金モールで書かれた慰霊文が見えていた。この光景を日本の場合と照らし合わせてみると、背筋に冷水を浴びせられたような気がした。残念至極である。



明治以来、身命を賭して国に殉じる精神教育を受けた我々年代の者は、生き方の目標として、靖国神社で再会することを誇りにして闘った。その当時の思潮を反古にして、戦後の思想でもってする靖国神社観は、英霊の心を無視するもので至当ではない。ともに闘った戦友の立場から、命令した最高責任者も総理も閣僚も、率先して参拝すべきだと訴えたい。

世界で最も貧しい国の一つである多民族国家のラオスが、このように犠牲者に対して敬虔な祈りと感謝を捧げる姿は、極く自然と思われてならない。塔を見上げながら祖国日本を慨嘆していると、自分の心の中に火がかき立てられてくる思いであった。

この無名戦士の墓の前に立った私の胸騒ぎは、第2次世界大戦に於けるラオスに対する日本軍の爪痕、即ち戦禍が残っているのではないかと云うことであった。次にその概要を記しておきたい。

第二次太戦当時のラオスに於ける日本軍の行動

（次頁地図参照）

フランスは1893年から第2次世界大戦にかけて、ラオスを植民地として永年にわたって統治した。これに対し日本軍がラオスに進駐したのは、敗戦の年、1945年3月から8月までの僅か半年たらずであった。

実際には1945年3月に日本軍は、サヴァナケット、ビエンチャン、ルアンプラバンに駐屯していた歩兵一個大隊規模の仏印軍を攻撃、掃討した。

これは同年四月に国王がラオスの独立を宣言したことを、事実上支援するかたちとなった。従って日本軍あるいは日本人に対するイメージは極めてうすく、極く一部のラオス人が日本軍のことを知るだけである。

これに対して、アメリカ軍のインドシナ戦争に於ける空爆のイメージは強烈であり、それによつて家族や親族を失った者は多く、その憎しみは強い。ラオス駐在のアメリカ前大使は、ラオス人からの危害を警戒し、地方旅行は差し控えていたほどである。

フランスに対しては、フランス統治時代が遠い昔のことで、人々の記憶から遠のいてしまっている。その上、その統治が過重な税金や賦役を住民に課したにもかかわらず、山岳民族間の対立を巧みに利用したせい、フランスに対する感情は複雑である。一部のインテリ層はフランス文化に憧れをもちながらも、フランス植民地政策に批判的である。

特に教育面で愚民政策が行われ、教育制度が確立しなかったことは、その後の抗仏闘争、抗米闘争中の教育制度の荒廃の原因となって、現在に至るまで人材不足による後遺症が続いている。これを思うと日本の朝鮮・台湾の植民地時代の教育制度は良好で、特に台湾人から感謝されている。

パテト・ラオの理論家であるプーミー元大統領は、「ラオスの歴史的出来事と我が生涯覚書」を要約すると、当時の日本軍の様子は次のようである。

日本軍は1945年4月、プーミー氏が県知事していた県内のサムヌオに進駐してきた。最初に進駐してきた日本軍の規模は歩兵第85聯隊の第3中隊であった。

日本軍が進駐してくる間に仏軍は逃亡していた。プーミー知事は日本軍を迎え、フランス人を駆逐しラオスを解放してくれた日本軍を歓迎した。

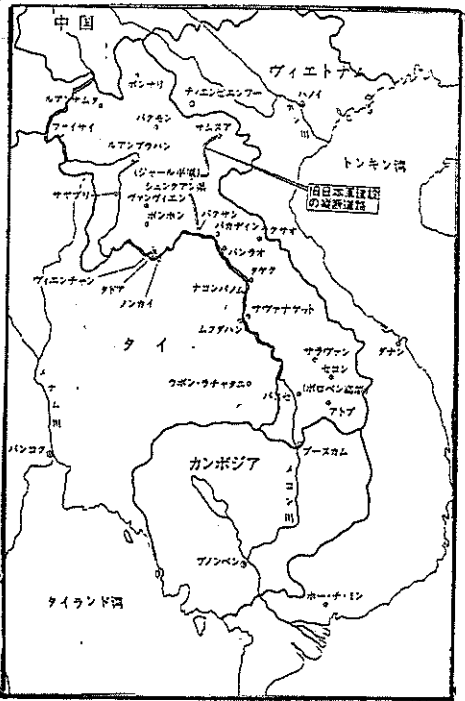
これに対し日本軍は、ラオスを独立国として行政に介入しない事を条件に、市場での食糧の調達と、「サムヌア〜シェンクオン」間の道路建設への協力を要請した。

(右の地図を参照)

「道路建設の必要性は次の通り」

1945年初め日本軍の敗色は、インパール作戦の失敗によって濃厚となった。ビルマから撤退する日本軍を追う英印軍はタイ国境に迫っていた。

一方、アメリカ軍はフィリピンに上陸してインドシナ半島に迫る勢いであった。すでに南シナ海からインドシナ半島にかけて、制海権、制空権は連合軍の手にあった。いづれインドシナ半島が戦場となり、日本の本土上陸と南支に展開している日本軍が分断される危険があった。



このため日本軍は、朝鮮半島からシンガポールに至る陸上の補給路を確保するため、縦断道路の建設を進めており、完成までサムヌオ〜シェンクアンからバクサン（地図参照）間を残すのみとなっていた。

この区間は250 km余りであったが、険阻な山を貫く山岳道路であったため、厳しい労働が予想された。そのため歩兵第85聯隊と第2工兵聯隊は区間を分担して、住民の協力を得て同年8月に道路は完成した。

道路はジャングルを切り開き赤土に砂利を敷き、岩肌を削っただけの道路であった。日本軍は道路建設に従事している間、毎日トラックでサイゴン米を大量に運んできてはラオス人にも配給し、労働者には労賃を支払った。

つるはし、シャベル、もっこと天秤を使い、ダイナマイトで岩山を削り取る道路工事は、相当の難作業であったと思われる。

しかしプーミー県知事の指示のお陰で数百人の住民が協力し、道路は確実に南に少しずつ延びていった。ジャングルの中には小部落が点在し、自給自足の生活を営んでいたが、毎日住民たちから何処からともなく野菜、鶏、玉子が届けられ、日本軍は食糧に不自由することがなかった。

日本軍はプーミー県知事の勢威ある協力ぶりに感謝し、プーミー知事も仏印軍に比べて礼儀正しく秩序ある日本軍に好意を持った。

道路建設の視察に訪れた大隊長は、行く先々の集落で温かいもてなしを受け、首長の家での客としてのご馳走にあずかった。これはどの国でも経験したことのない、住民の善意と協力の証であった。

第2次世界大戦末期、ラオス東北部のサムヌアに進駐してきた日本軍は、朝鮮半島からシンガポールにかけて縦断道路建設の一環として、ラオス人とともに簡易舗装道路の建設に従事した。

その時のラオス人の印象を当時の八巻部隊長が、後に小高元駐ラオス大使に次のように語っている。

「ラオスで道路建設の任に当たった歩兵第85聯隊は、中支戦線以来の歴戦の勇士たちであったが、ラオスで初めて戦火から離れて道路作業をしながら、平穏な生活を送った。兵隊たちは平和なラオスの山中でラオス人とともに労務作業に携わって、ラオス人が人情、人柄から民族の資質の点で、支那やベトナムやタイ人よのも優れていることを知った」と。

以上のような状況から判断すると、日本軍は戦闘行動をとったことはなく、戦禍をラオス国民に与えたことも無いようである。しかし他国に武装部隊が足を踏み入れること事態が許されず、申し訳がないと革命記念塔を見上げて立ち去った。

アヌサワリー（凱旋門 15頁地図の右上）

バスは市内方向に逆戻りするように進路を西に向けて走った。戦闘は錯誤の連続で、錯誤を速やかに発見し、速やかに修正した者が勝利するのだと思いつきながら、車窓に映っては消え、消えては映り出すビエンチャンの街並みを見ていると、日本の大正時代にタイムスリップしたような感じを受け、小さな古ぼけた街は閑散としていた。

自転車に乗っている女性は、「シン」と呼ばれる地味な刺繍をした巻きスカートをはき、ほとんど化粧をしていないようで、外国人にも余り関心がないのか振り向きもしなかった。その時ふと、ビルマ娘のロンジ姿を思い出し、興味を抱いて市街風景を眺め続けた。

首都といいながら街のあちこちの道路では牛が草をはみ、鶏も走り回って餌を探し、至極のんびりとした雰囲気包まれていた。

突然視界が開けて広大な広場が展開し、接近してくる視野の中に、パリーの凱旋門を模した凱旋門が聳えていた。これがアヌサワリーであった。

（右の写真はラオスの凱旋門）

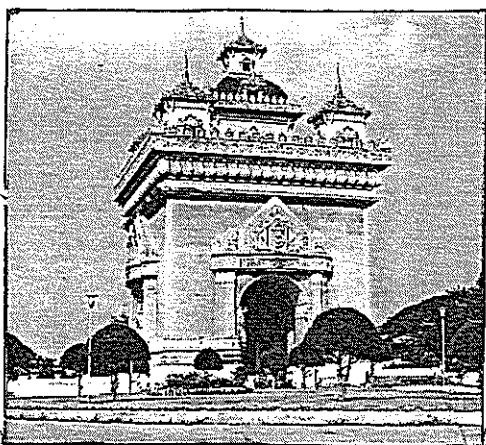
ラオスの凱旋門は戦争に勝利して凱旋したという、ヨーロッパで見られるものと異なり、独立記念館と呼ぶべきものである。

1960年代から建築が始まったと伝えられるから、戦没者慰霊塔でもあった。

凱旋門の四本の柱から天井のアーチまで、内側の壁には仏教国らしく曼陀羅のモザイクが彫り込まれていた。高層建築物の少ないビエンチャンの市街では、この塔自体の高さが魅力なことは勿論だが、市街を一望の下に展望できることであった。

頂上まで登れる螺旋階段があった。両膝関節痛に悩む私は遅疑逡巡することなく、魅了されるままに狭い階段を杖をたよりに登った。途中にあつた窓に刻まれていた仏像は、背中合わせに二体が組み合わされたもので、その巧緻の美を驚嘆の眼で見上げて登った。

漸く頂上に上り着いた。そこにも多くの仏像が刻まれていてアンコール・フットが思い出される。（上の小さい写真は頂上からの展望市街風景）



広場の中央に聳え立つ凱旋門の頂上は、一気に四方の眺望が開けて旅情を誘った。空と地と山々と平原が冬の大気の中ですっきりと区別され、陽の輝くメコンの河面は帯のように明るく光っていた。

視界の遠くに悠然として流れる泥色のメコンは、チベットの一筋の雪解け水が源流である。中国・雲南省では瀾滄江と呼び、ミャンマー、ラオス、タイの三つの国境となっているメコンこそ大動脈の大河の街道で、ラオスの生命線とも云えるだろう。

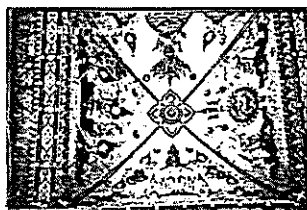
その長い道のりで数え切れない少数民族をはぐくみ、気がつかないほど緩慢に音も立てずに流れている。私の初めてのメコンとの出会いは、戦時中の昭和19年の秋であった。場所は当時のサイゴン（現ホーチミン市）である。次はカンボジアのアンコール・ワットを訪れたときである（カンボジアでは「トアン・トム」と呼ぶ）。いつかメコンの流れのような旅をしたいと願っていたが、今回漸く実現できた喜びは格別で、凱旋門の上から陶然として眺めていた。

眼を凱旋門の東側に移すと三本の舗装道路が延々と延び、その大通りがランサン通りであった。この界限には各国大使館が並び立ち、牛をおおい隠すほどの蔽牛の街路樹が茂みをなしていた。その冬の並木は美しい緑もあれば、枯葉が落ちて枯死しているものもあり、詳細に観察して静寂な首都の光景を眼底に刻み込んでいた。

頂上に立ち続けていた私は自由に想像の羽根を伸ばしてみた。現在のラオスの権力は人民革命党委員会が掌握している。それはインドシナ共産党のラオス支部であろうか。政府は、一党支配が如何に国の政治的な安定に資するか、を説明するのに精力を注いでいるようである。

ラオスの憲法では国民の移動は許可制を採用し、自由を求める住民もなかなか住居を変更することは出来ない。それが経済的にも発展を阻害していると同時に、この制度が人口の都市集中を防ぐ役割を果たしているのであろう。だから首都ビエンチャンも実に活気に乏しい街でなかろうか。

（下の写真の左はアーチの曼陀羅、右は遠くの白い帯がメコン川）



タート・ダム（黒塔 15頁地図の中央）

凱旋門の天辺からの展望に満足した後、市内最大のランサン大通りを南下し、櫓の塔が特徴である軍事博物館の前を通過して、サム・セン・タイ通りへと右折した。

バスのフロントガラスを覆い被さるように、眼前に姿を現してきたパゴダ（仏塔）がタート・ダムであった。

茫々として雑草が生えている小さな広場の真ん中に、古色蒼然として立っている仏塔は黒ずんでいた。だから「黒塔」とも呼ぶのであろうか。

ビルマのパガン遺跡（世界遺産）の古いパゴダそっくりの黒塔は、崩れかけた外面に苔むした雑草が繁茂していた。

花芽を付けている茂ったネムの木や、丸い蕾を枝先に一杯もった不明の樹が塔を囲み、パパイヤやバナナの木も混じっていた。

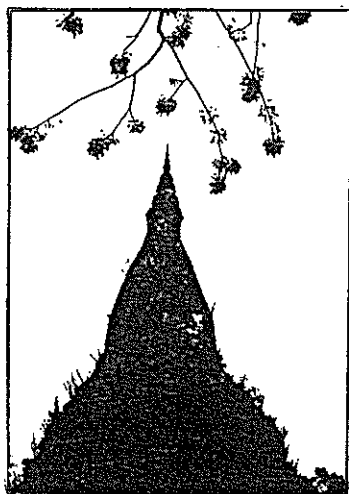
（右は苔むした塔と枝先に蕾をもった不明の木）

バランスの崩れかけた仏塔を見て自分の心まで不安になっていたのか、今朝の惚け症状は完全に醒めていない。自分にはバスから下車した記憶はないが、妻のカメラの中に黒塔を背景にした我が身が映っているのであった。

難聴のためにガイドの説明は一切聞こえず、ただ、ぼっとしながら自分のカメラだけはシャッターを切っていたようだ。大きな樹陰で休んでいたラオスの老人よりも哀れな、耄碌爺さんの我が姿であった。

妖精が住んでいるような感じの黒塔は17世紀の建立で、塔内に蛇が閉じこめられていると云われている。ラオスでは蛇は守護神にも邪悪神にも化身し、いろんな物語にも登場するらしい。ここから仏像の頭部が発見されていると云うから、寺院が存在したことは事実らしい。

再建中の黒塔の寂寥とした影を脳細胞に刻みながら移動した。そこにはブーゲンビリアやハイビスカスが咲き乱れた旧フランス大使館が見えていた。ラオスでは未だに白人による愚民政策が糸を曳いていると思うと、我が頭の中は、暗夜に灯火を失った敗戦の報を受けた日を、思い出すのであった。



右はタート・ダムの全景



ワット・シームアン（15頁地図の右下）

難聴のために判らないから、むやみやたらに人の話を聞きたがる「ツンボの立ち聞き」を続けながら、空に浮かぶ雲を一心に見つめて、車窓に現れては消えていく景色に應對していると、バスは石積みの古墳のような所で停車した。

フェンスに囲まれている石積みには赤い布のテープが張られ、柵内の樹にも赤・緑・青の三色の布が垂れ下がり、入口の門の上の塔には合掌した仏像が立っていた。この不思議な組み合わせがワット・シームアンというアンコール・ワット形式の石積みの寺院の跡であった。

（右写真の左側は石積み、右側は門）



13世紀のものといわれる石積みは、カンボジアのアンコール王朝時代の遺跡である。アンコール・ワットを足跡した私にとっては懐かしいものがあり、アンコール王朝の栄えた当時が偲ばれるのであった。

人間は万物の霊長で、凡ての生物の中で最も知的だと云っても、歴史を顧みると所詮は動物に過ぎず、弱肉強食を重ねて今日に至ったのである。その一つの例がワット・シームアンだと眺めていた。

石積みのある境内には二層の屋根の新しい寺院が建っていた。その建物の外壁には曼陀羅を描いた彫刻が施され、周りに大きな黄色い花を咲かせた木や、ネムの木が取り囲み、新旧ともども寺院らしい荘厳さを帯びていた。

1955年に新築された新しい寺院は、うら若い乙女が生け簪となって建立されたと聞いている。戦後のこの時期に、貴い人命を犠牲にしたことは、千思百慮しても納得がいかない。人命は道端の塵のような「陌上の塵の如し」であろうか。

寺院の建物を取り巻くベンチに、「シン」と呼ばれる巻きスカートの制服を着た小学生が腰を掛け、我々日本人を珍しそうに眺めていた。ラオスの公務員や小・中学生はシンの着用を義務づけられているから、この寺院にも寺子屋式の学校があるのかも知れない。

寺の内陣を覗いてみると、正面中央にある石棺は赤い布で覆われ、その左右に釈迦像などが祀られていた。これらは凡てタイ式の仏像で、象の大きな彫刻も飾られていた。

寺院の正面に最後の王の父親であるシーサワンウオン王の像が立っていた。しかしラオスに関するガイドブック等の資料は全くなく、今までの海外旅行と異なって予備知識のないままの旅であった。「盲の垣のぞき」である。

ブッダ公園（15頁地図の右側枠外）

現代にそぐわない生け贄の話を聞くと、人間の生命も危うきこと累卵の如しであった。安に居て危を思うような感じを受けたワット・シームアンを離れ、バスは一路市街の東南へと田舎道を走り続けた。

途切れ途切れに点在する貧村や寒村をいくつか通過し、人海戦術の田植えの真っ最中の光景を目にすると、去年の今頃見たビルマの田植えを思い出した。日本の米作りを見せてやりたい心は同情ではなく、指導であった。

悪路を全速力で突っ走るオートバイや、小型三輪トラックに見捨てられているように、トボトボと歩いている農民の姿は、戦時中の中国農民そっくりであった。文明から遠ざかった田舎の街道に大きな建物が接近してきた。それはタバコ工場で、その界隈の路端にテントを張って客を待つ物売りも亦、中国戦線を想起させるのであった。

高床式の住居が並ぶ中にラオス国旗を掲揚した建物があつた。恐らく何かの役所だと思つてみると、草をはむ牛の群がゆっくりと道路を横断して、バスを停車させた。その先にビール工場と煉瓦工場が続いていた。

光と緑を楽しむことに就いてはラオスはビルマと同然だと見てみると、同じように路傍の竹藪の中で、野放しの鶏が餌を探していた。しかしビルマの方が経済的に数段上だと考えていた時、突然メコンの流れが眼に映ってきた。

ややまとまったトタン葺きの集落は門前町とでも言うのだろうか、仏に供える花や果物、缶ジュースなどの品を戸板に並べていたが、全く客の姿はなかった。

門前町を通過していったバスは村はずれを右折し鬱蒼として茂った大樹の中で停車した。ビエンチャン市街から小一時間近く走って着いたところが、「ブッダ公園」であった。

日本を出発時の予定にはブッダ公園の見学はなかった。公園の入口には釈迦像が祀られ、そこから一歩足を踏み込んだ途端、薄暗い陰鬱な森の中に千数百体にもぶ仏像が露天に立ち並んで、別世界が展げていた。（右の写真の上は門前町、下は公園入口の釈迦像）

薄気味の悪い雰囲気は充満した仏の像は、人生の先を見通してしまった人間世界を現しているのだろうか。私はこのような世界を考へないことにしている。来世などはある筈はなく、今現在を如何に有義に暮らすかが問題である。それが死を賭けて闘ってきた戦闘経験者としての結論で、供養や慰霊とは別問題と考えている。



一体一体が違った姿の百面姿態の仏像が、雲霞が沸き上がったように群立して眼前に迫り、西陽を浴びた半分だけが輝いて奇妙な光景を醸し出していた。一行は金魚の糞のようにぞろぞろとガイドの後に付いて廻った。

深閑としたしじまの空間は、敵と激突した戦闘直後のシーンとした死の世界を垣間見ているような気分させてきた。

ラオスの人達はこの仏の世界というか死の世界というのか、このような光景を眺めてラオスこそ安宅（安心して棲めるところ）だと思っているのだろうか。

私は生死が重くのしかかった激戦場の戦闘指揮官として、4年間に亘って敵弾下の陣頭に立ち、負傷3回に及ぶ歴戦をした一人である。その決死の戦場で頼れるものは自分一人だけであり、神仏に祈願して助けを求めたことは全くない。祈る心境にも全くなれず、責任の重圧に耐えて任務の遂行したのであった。この信念は年老いた今日でも簡単に消え去るものではない。

幼少の頃から我々は、日本は神国で天皇は現人神（アラヒトガミ）だから、必ず天佑神助があると信じ込まされた。しかし、いざ激戦場に立つと戦闘指揮の重圧のみがのしかかり、天佑神助や仏の慈悲などは有る訳がない、との信念となっていた。

それからは宗教にも疑問が生じた。外国旅行をするようになって各宗教を学ぶと、更に疑問が深まってきた。但し、戦死した戦友を祀る靖国神社や、我が家の仏壇だけは、形式は兎も角として宗教を超えた別格の存在である。それが戦友道であり、先祖に対する道である。

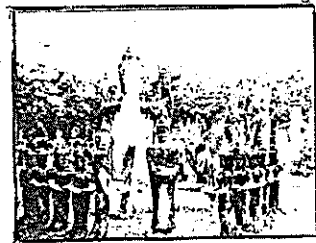
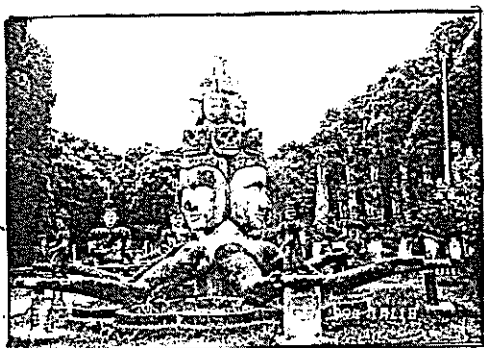
先にインド・ネパールの仏教遺跡を訪ね、パキスタンで初めて仏像が造られた博物館を見学するなど、仏教に関しては造詣を深めてきた積もりである。

釈迦は釈迦族の王家に生まれたから「釈尊」と呼ばれたが、釈尊の涅槃後500年経過してからガンダーラで仏教が誕生したと聞く。初めの釈迦像は青い眼をした鼻の高い縮れた頭髪のものもあったが、ラオスの仏像はタイと同じ形式であった。日本のものは中国からの伝来から、全く中国や朝鮮半島と同じで、信仰する対象の仏像は各国では完全に異なっている。

このブッダ公園のようなものは初めての経験だったが、公園の歴史が浅いためか、ガイドの説明は何もなかった。しかしラオス人が敬虔な心で喜んで信じていることには敬意を表したい。

（上の写真は四面像の仏像）

（下は寝釈迦と踊りの仏像）



ラオス・タイ友好大橋 (ビエンチャン東南方)

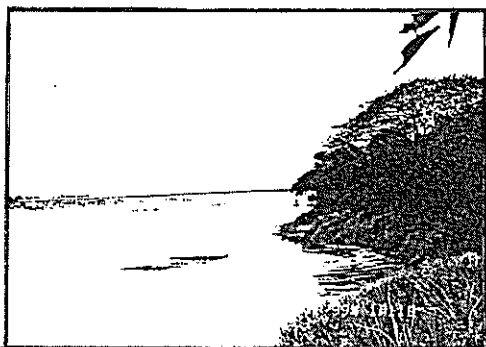
ブッダ公園の南側にメコン川が時間が止まったように見えていた。川岸に立つと、五生願い（ゴショウネガイ・仏教信者）の我が両親は、小学生の頃から私をお寺の仏教日曜学校に通わせて、お経を覚えさせたことが思い出された。

「如是我聞」（ニョゼガモン）というお経の初めの文句は、お釈迦様がこのように述べられたと言う意味で、論語の「子曰」（シノタマフ）と同じであった。

ラオス・タイ友好大橋を見せたいガイドは、一行を公園の河畔を上流に案内しすると、大橋は樹間からよく見えていた。

1994年4月8日、ラオス大統領とタイ国王が出席して友好大橋の開通式が行われた。（右は友好大橋の遠望）

全長1170mの友好橋は、オーストラリアの資金供与により、メコン川に架けられた橋である。両国外相によって調印された橋の運営管理の協定では、維持費及び所有権は平等に折半することになっている。



1975年にラオスが社会主義の国になった時、米国側に付いていた反共側の人達はメコンを渡ってタイに逃れ、難民キャンプの苦難の生活を強いられていた。しかし、この橋の完成によって祖国の土を踏むことが出来たのであった。喜ばしいことである。

友好大橋が完成したラオスは、外国人や自国民の旅行制限を撤廃したため、これからのラオスの開放化は一段と進展するだろうと期待している。この橋こそ国民の厭戦憎戦気分を助長して、メコンは抜け殻のように映っていた。

真っ赤なブーゲンビリアの咲く河岸から、タイ領のノンカイ市を眺めながら日脚の伸びを感じていると、高い鉄塔の影が川面に投げられていた。

冬の陽はすでに輝きを失い、西の空が色付き始めた街道をビエンチャンに向かった。バスの中でラオスの初日を振り返ってみると、本当に疲れたという一言であった。我々は精神は肉体に勝ると青年時代を過ごしたが、人によって多少の違いはあるものの、精神より肉体が人間の思考や性格、感受性に影響すると、年老いて精力が衰えた現在ではそう思うのであった。

いつ何が起こるか分からないのが人生である。体力気力が落ち込んで、行き場の無い虚しさだけが残る昨今では、一時でも楽しい思い出に浸れたことに感謝している。本当に良い夢を見せて貰ったと思っている。

疲れ果てて席に着いた夕食は中華料理で、五感喪失の私には甘くない。しかし、最近「諦めは心の養生」だと悟り、くよくよせず眠りに就いた。

1月12日 ワット・シーサケット (15頁地図の中央下)

小さなホテルの朝は静まり返っていた。「老いてますます壮なるべし」、といった意気込みは全くなってしまったが、私の脚は極く自然に動いていた。そしてホテルの前を流れるメコンの河岸に立っていた。やはりビルマの真冬と同じく熱帯とはいえ朝は寒かった。

昨日、遠望した友好大橋が完成してから、少々は車の量も多くなって活気が出てきたらしいが、そのような感じは感じられなかった。小乗仏教が人々の生活に根ざっているラオスでは、首都ビエンチャンでも僧侶の托鉢から一日が始まっていた。

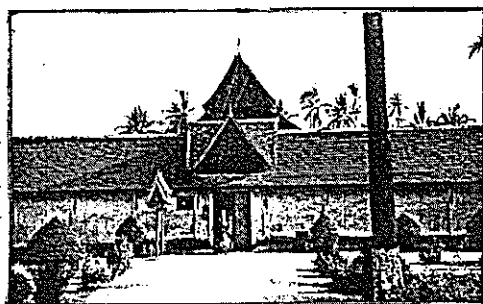
メコンの大河は流線部の反対側に大きな州をつくり、そこには草まで生えていた。川は生きているように、州の一部には農耕地として作物が植えられ、乾期のメコンは道となり、畑となり、広場となるのであった。

これらの自然の風景は持ち主がある訳でもなく、この景観を眺めて楽しむ人が所有者だと思えば、自分も自然の一部に過ぎないことが分かってきた。

もともと川は開かれた窓のはずだが、その川が障壁となって、ラオスは未開の国に甘んじなければならなかった。それを考えると、自然ほど怖いものはないことに気付いた。これからの我が余生は、好きなことをして暮らすのだと立ち止まっていると、畑の中の牛までメコンを眺め、物思いに耽っているように見えていた。

8時半にホテルを出発した。今朝の最初の見学はホテルの直ぐ東のワット・シーサケットで、5分足らずの距離であった。ワットは寺院、シーサケットは古いという意味である。

この寺院にはラオスで最も古い伽藍の一部が残っている。正面の平屋建ての建築物は、見るからに古くさい感じがあふれていた。しかし建立は1824年と比較的に新しく、シャム(タイ)との戦争でビエンチャンは大被害に遭いながら、貴重な彫り物などが原型を留めていた。



(右上の写真はワット・シーサケット正面の建物)

正面の建物の屋根は銅板でもなく、木肌葺きでもない薄いタイル板で、その美しさには古風な潤いが滲んでいた。

寺院らしくない門を入ると古い回廊が伸びていて、大小無数の仏像が並んでいた。これが古い寺を証明する仏像群で、同じ小乗仏教のシャムの軍隊も破壊することは出来なかったのである。

これらの仏像の創建当時は凡て金箔が施されていたが、今日では一部の

仏像だけが金箔の名残をとどめているのみで、首や手のない仏さまも混じっていた。そしてラオスの仏像の特徴は、右手の指先が大地を指差していることであった。これは五穀豊穡を祈っているのである。（右の写真参考）



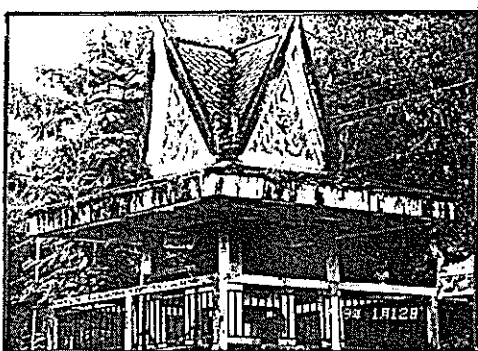
タイ様式のラオスの寺院は凡て西向きの石造りであるのも特徴だ。仏像は男女の差がない混合の姿で彫られており、釈迦の仏像は耳と指が長い特徴を持っていた。（上は回廊に安置されて仏像群）

回廊の一隅には廃仏が乱雑に山積みされ、人目に付いていたのは、戒律の厳しい小乗仏教国ではいただけない光景である。壊れてしまえば仏でなくなるのであろうか。

それなら、死んだ人間は人間でなくなる訳で、来世を説いている仏教は疑問ではないのか。怖いのは生きている人間で、死んだ者は怖くもなんでもない存在ではないのか、と疑問をもった。

古い寺の回廊を一巡して境内の広場に出た。そこには新しく造られた黄金色の釈迦像が立ち、珍しいことにも太鼓を吊した新しい楼まで建っていた。

中国では時を報せる鼓楼・鐘楼はどの都市にも見られ、住民に親しまれる存在だった。しかし小乗仏教のタイやビルマには鼓楼の記憶はなく、ラオスの寺院で初めて拝見した鼓楼は強い印象として残っている。（右は鼓楼）



まだラオスは一日にも満たない時間を過ごただけだが、「皮膚の見」というのか、うわべだけを見た感じでは、ラオス人は人間の面白さを持っているように思われた。

それはラオス人は道徳に支配され、法律にも支配され、それでもなお足りないように、先祖代々からの戒律の厳しい小乗仏教や精霊信仰にもひれ伏し、丘々まで民族同士が激しく争ってきた。だから私はラオスがビルマのようにならないことを、心から祈っている。

ラオスは内陸国のために世界との開けた玄関口がない。そのためだろうか、二階借りをしているような感じを強く受け、立地条件や歴史・風土というものが人間を作るのだ、と思いながらワット・シーサケツトテを去っていった。

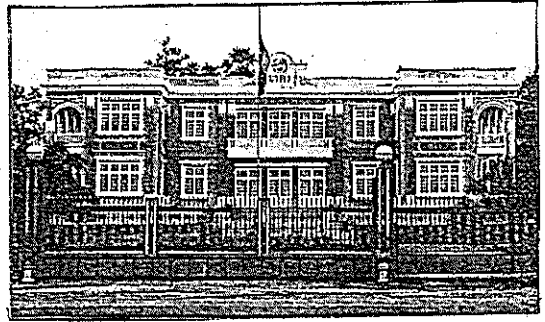
ワット・ホー・パケーオ（ 15 頁地図の中央下）

ワット・シーサケット（博物館）の道路をはさんだ南側は旧王宮の跡で、現在は大統領官邸となっていた。

その東側がホー・パケーオで一行は徒歩でパケーオに入った。

（右は王宮跡の大統領官邸）

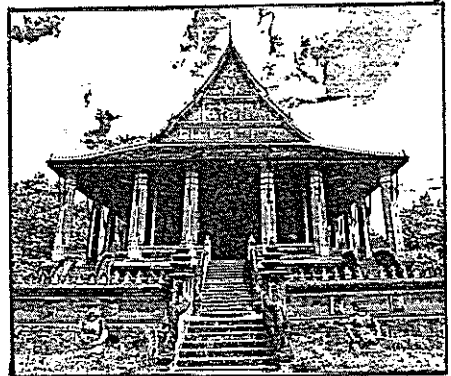
パケーオは1563年、ラオス王のセーターティラート王が建立したもので、本当はエメラルド仏像（これをパケーオという）を安置するための寺院であった。



しかし18、19世紀にシャム（タイ）の侵入によってパケーオは持ち去られ、寺院も破壊されてしまった。今は寺院だけは修復されている。

旧王宮の東側にあるエメラルド（パケーオ）寺院は王室専用寺院であったが、共和国になってからはパケーオ博物館として公開されている。

ラオス独特の四層の三角屋根を始めとして、整然と並び立つ数十本の柱は黒ずみ、一口に寺院全体を表現すると古色蒼然という言葉が適切で、王室専用寺院らしい匂いが漂っていた。



アンコール様式で両脇が蛇の恰好をした石段を上って内陣に進んだ。小さな灯に照らし出された釈迦像が、エメラルド仏に替わって安置されていた。いつ帰還するか当てもないエメラルド仏の座を、しっかりと守っているようである。（上の写真はパケーオ寺院）

平家物語ではないが盛者必衰の理（コトワリ）の通りだと感じながら回廊を廻った。回廊の仏像は両方の手のひらを開いて前に向け、他では見られない姿であった。

又、ラオスの国花である「チャンバー」の花が満開で我々を迎えてくれた。チャンバーとは親、師、万物への「三拝」の意味があり、学名は「アルメリア」、日本名は「はまかんざし」（いえ松科）、花は淡紅色の小傘形状で、寺院を囲むように咲いていた。



実に清潔な感じの花に、心の奥底までも清められるようで、早速カメラを向けて記念に納めていた。（右上の写真はチャンバーの花）

エメラルド仏像の軌跡

現在バンコクのエメラルド寺院に安置されているエメラルド仏像の由来は次の通りである。(右は経過図と仏像)

紀元前43年、北インドのバトリブートで、仏教教団の長老ナーガセーナはヒマラヤのエメラルドで仏像を作った。この地に約300年の間安置され、仏教徒の信仰の対象となった。

しかし内乱が起こり、仏像が破壊されるのをおそれた仏教徒は海を渡ってスリランカに持ち出した。

紀元後457年、仏教の保護者であるビルマのバガン王はスリランカに使節を送り、エメラルド仏像を譲り受けた。しかし仏像を運搬途中、船は嵐に巻き込まれて転覆した。不思議にも仏像だけはカンボジアの海岸に打ち上げられ、付近の住民に見えられた。暫くの間仏像はカンボジアの王に保護されていたが、その治世に反対する仏教徒によって国外に持ち出された。以後、エメラルド仏像はタイのアユタヤを経て、北部タイのチェンライまで流転の歴史をたどることになる。

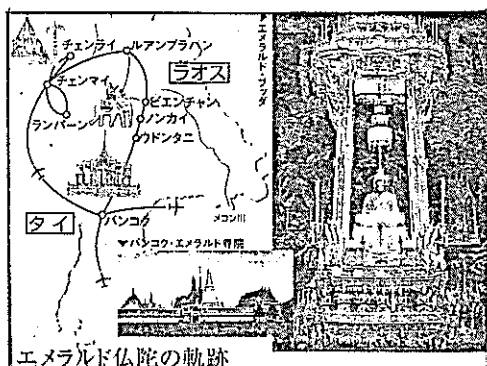
チェンライでは盗難を避けるため、仏像に石膏をかぶせて仏塔に納めた。1434年突然、仏塔に雷が落ちて仏塔は崩れ落ち、その中から石膏の剥がれたエメラルド仏像が再び姿を現した。こうして仏像は不思議な力をもつものと信じられ、仏教徒の篤い信仰の対象となった。

この噂を聞いたタイのサム・ファン・カーン王は、仏像を王都であったチェンマイに運ぼうとした。しかし仏像を乗せた象はチェンマイに行かず、ランバーンに行ってしまった。王はこれを仏像の意志と考え、この地に寺院を建立して仏像を安置した。

しかし次のティオカラート王の時代に、仏像はチェンマイに移された。仏像はパケーオ寺院に安置されていたが、セタティラート王がランナー・タイ王国の国王に就任した後、ルアンプラバンに移された。

その後セタティラート王は、1560年に現在のルアンプラバンからビエンチャンに遷都した際、金仏像は旧王都のルアンプラバンに残したものの、エメラルド仏像だけビエンチャンに移し、パケーオ寺院を建立して安置した。

長い間、ビエンチャンの人々の信仰の対象となっていたエメラルド仏像は、1778年、シャム(タイ)軍がビエンチャンを占領した時、戦利品の一部としてシャムに持ち帰ってしまった。それが今のバンコクのエメラルド仏である。今回初めてエメラルド仏像の由来を知り、まさに温故知新であった。

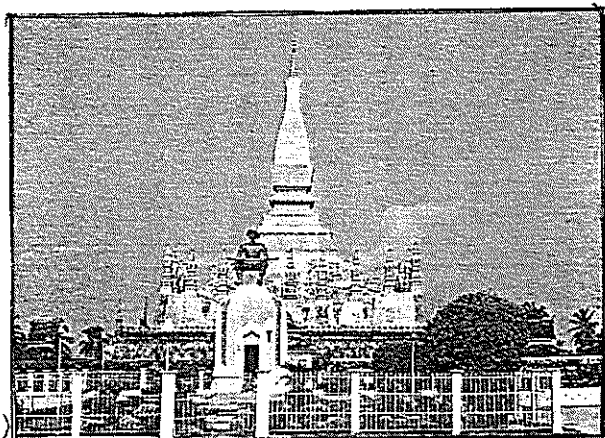


タット・ルアン (15頁地図の左上)

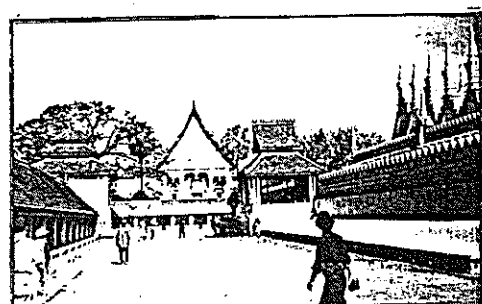
エメラルド仏像の軌跡と同様に仏教、キリスト教、イスラム教等の各宗教の歴史は戦争の繰り返しで、何を以て慈悲や愛などと云えるのだろうか。只勢力の拡大の一手段として利用しただけだと、阿鼻叫喚の戦闘の苦しみを身を以て体験した私は、戦闘間から疑問を持っていた。

そのような思いを抱いて乗車したバスは、市の西北に位置したタット・ルアンへと目抜き通りを走った。突然、SUZUKIと書いた店舗が目に入った。血は争えず日本人の店だと思ふと胸が騒ぐのであった。スズキの軽自動車とオートバイの販売店であろう。

市の郊外の大広場に燦然と輝く黄金色の仏塔は遠くから見えていた。これがラオス最大の仏塔といわれるタット・ルアンであった。(右はタット・ルアン)



タット・ルアンの起源は紀元前307年に遡る。単なる仏舍利塔であるだけでなく、1560年に当時のセタティラート王によって建立されたが、その後、ビルマ・シャムの侵略によって破壊・建立の歴史が繰り返された。



広場はビエンチャン市民の聖地であるとともに、心の象徴となっていて、毎年11月にはこの広場に全国の僧侶が集まり、内側の聖地の広場で昼夜兼行の祈りが捧げられる。外側の広場はお祭り広場として市民の憩いの場となると言う。(上の写真はタット・ルアンの仏塔の周りにある回廊の一部)

革命以前は国王がタット・ルアンに祈りを捧げたことから、神聖な祭りとしてのイメージが強かったが、今では一般の日本の神社の祭りと変わらないらしい。

一方、タイの三大仏教遺跡であるタイ中部のプラプッタバート(仏足石寺院)や、タートパーム寺、タイ南部のワット・マハータートの境内にある仏塔の形式は、このタット・ルアンのラオス風建築様式を真似たもので、ラオスの仏教建築史に属する作品だと言われている。

熱帯のラオスの冬陽は明るいが眩しいと言うほどでなく、我々は仏塔に近

づいていった。仏塔の前で刀を持っている像（前頁の上の写真）はセタティラート王で、今日でも泰山北斗の如く尊敬されている。社会主義国でもレーニンや毛沢東の銅像は撤去されてしまったが、この王様の名は百世に流れ、竹帛に垂れているのであった。

誰であれ生涯を燃焼し尽くした人には私は心を惹かれる。生きていた期間の長短や世間的な名声とは別にして、己に忠実に一途に生きてきた人に愛着を覚える。恐らくセタティラート王はそれであつたと思っている。

像の顔は無表情に見えるようだが、近づくにつれて王の顔には威厳があつた。そして像の台座を覗くと、そこは仏像が祀られている堂となっていた。その堂の前が、国家のために命を捧げた英霊を祀る千人堂となっていた。ラオスの女性が千人堂にふれると、凡てのものが花になると言い伝えられている。それだけ尊敬されているのであった。

反対に日本は如何であろうか。日露戦争に大勝利したと勘違いして有頂天になり、大正・昭和の上層部は軍の改革や兵器の進歩を度外視して、ただ精神教育だけを鼓舞してきた。その結果、自らの生命を捧げる滅私奉公だけを部下に強要したのである。第一線の指揮官として板挟みの苦悩の中で闘った者は、愚痴の一つも言いたくなるのである。

自らの命を捧げることを最高の名誉とする思想は、現在でも新興国家に見られる現象で、我々の青年期の日本は未だ新興国家であつたのである。

予言者は「仏塔成って大国滅ぶ」と予言したと聞いているが、セタティラート王の炯々と輝く鋭い目を見ると、予言者の声が風に乗って聞こえてくるような感じがするのであった。

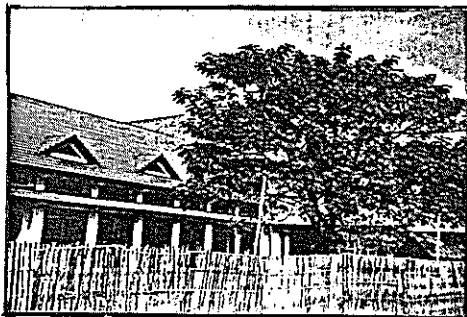
一行は天然水のサービスを受け、大仏塔を取り巻く回廊（前頁の下の写真）に飾ってあつた陳列品を觀賞し、予定通りルアンプラバンに飛び立つためにビエンチャン空港に向かった。

日本を発つ前から私は、ビエンチャンで消息を絶った「辻政信」氏が宿泊した「ホテル・セタ・パレー」を見たいと願望していた。郷里の大先輩の辻参謀とは1ヶ月間、ビルマ第33軍司令部で起居を共にした間柄で、戦後は氏の選挙運動にまで駆り出された。

添乗員にホテル名を告げて希望を告げると、現地のガイドは快く引き受けてくれた。（右は辻氏が宿泊したホテル）

車窓から国会議事堂を眺め、それが見えなくなった地点からバスは徐行し始めた。するとガイド氏は左手の改築中のホテルを指さし、辻さんが宿泊したホテルだと告げたのである。間髪を入れず、カメラのシャッターを切っていた。

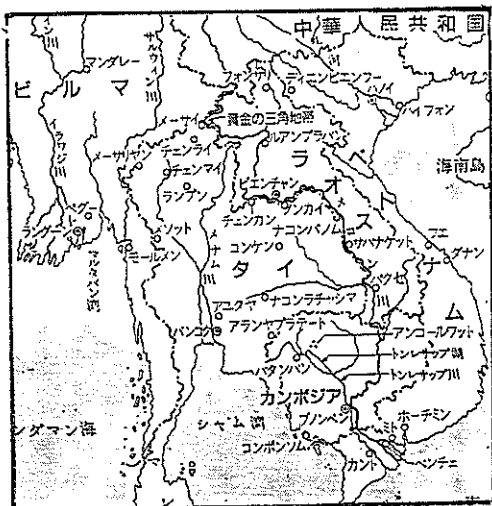
（辻氏に関しては一項を設けて後記する）



世界遺産の古都ルアン普拉バンへ翔ぶ

ビエンチャン空港のロビーは、優雅に織られた伝統的な民族衣装ミン（巻きスカート）を履いたラオス女性が多く、彼女たちの喋りまくっている甲高い声で騒々しい。その中に旧宗主国のフランスの白人観光客らしい人々も見られたが、服装は随分劣っているように見えた。

ビエンチャン発12:15 QV103（ラオス航空プロペラ機、50人乗り）は騒音を響かせて舞い上がった。真綿のような真っ白い雲の輝きは、私の眼には世界遺産の空想の楼閣のように写っていた。青空に浮かぶ雲海は何の変哲もない景観だったが、次第に気持ちが弾んできたのか、雲の動きを見ていると飽きないのであった。



（上の地図はルアン普拉バンの位置図）

中天の真冬の太陽はラオス高原を照らし出し、その中に茶色い帯のようにメコンが流れ、僅かに開けた平地に空港が見えた。プロペラ機は滑走路を正面にして降下し始め、激しいエンジン音を消しながら滑走に移った。

実に静謐な環境に包まれた空港は山懷に抱かれて山峰が接近し、何か夢見ているような感じがしていた。昨日の惚け状態が再発したのではないかと思ひながら、好奇心に溢れた眼で周りを見回していると、2年前に完成した空港ビルは古都に相応しい姿で対応してくれた。

山峽を流れるメコンの冬は霧が発生しやすく、ラオス国内航空は有視界飛行しかできないから、霧が晴れないと離着陸は出来ないものであった。本日はラッキーで霧はなく、予定通り50分後に着陸し漸くラオスの佳境に入った。

「世界遺産条約」

文化遺産や自然遺産を損傷、破壊の脅威から守るため世界遺産として登録し、国際的な協力、援助体制を確立するのが目的。1972年の国連教育科学文化機関（ユネスコ）総会で採択し、日本は92年に締結した。

現在の締結国は155ヶ国。遺産保護のため世界遺産基金を設置、資金協力や専門家の派遣などが行われている。文化遺産として418件、自然遺産として114件、両者に該当する複合遺産20件の計552件を登録。

国内の登録は、文化遺産に法隆寺地域の仏教建造物、姫路城、古都京都の文化財、白川郷・五箇山の合掌造りの集落、原爆ドーム、厳島神社、古都奈良の7件。自然遺産は屋久島と白神山地の2件である。

ルアンプラバン及びルアンプラバン王国の歴史

「ルアンプラバン」はラオス北部にある旧王都。現在は上ラオス地方の中心都市で、同名省の省都。人口は約5万、首都ビエンチャンの北北西約300km（前頁地図参照）、メコン川の河谷に開けた盆地に位置し、市街はメコン川とその支流ナム・カン川の合流点に面している。

河川交通の要衝でビエンチャンへは国道あるいはメコン川によって通じている。寒暖の差が大きく、霧の発生することが多い。市内随所に仏教寺院が建ち、漆や金銀細工による祭具、小物道具の製作で知られている。

1353年にランサン（百万頭の象）王国の都となったが、その後、この地をめぐつてビルマ、シャム、ベトナムの侵略と干渉が続き、18世紀後半からシャム（タイ、）の宗主権下に置かれ、19世紀後半にはフランスの保護領となった。

1947年にラオス王国が成立すると、ルアンプラバン王家がラオス王国の国王につき、その後の内戦で王家の人達は左派、右派、中立派に分かれたが、各派の交渉などで重要な役割を果たした。75年、ラオス人民民主共和国が誕生し、ルアンプラバン王家の政治的重要性は失われた。

「ルアンプラバン王国」は、ラオスの主要民族であるラオ族が14世紀に形成したラオス最初の王国。建国説話では、ムアン・テーンの王クン・ブーホムの長子クン・ローがメコン川を下ってムアン・スワーに辿り着き、クン・ローから25代目のファグム王が歴史上の最初の王とされている。

ファグムはカンボジアから帰国して1353年にランサン王国の初代王となり、カンボジアから高僧と「プラバン仏像」を招来し、仏像の名にちなんで都をルアンプラバンと呼んだ。

その後、ビエンチャンに遷都した王国は、17世紀末に王位継承をめぐつて王族間に争いが起き、ルアンプラバンはビエンチャンから独立を宣言し、ランサン王国は分裂した。

ルアンプラバンは52年にビルマ軍に占領され、78年にはシャム（タイ）の属国となった。1883年にフランスがベトナムを保護領にすると、ベトナムに朝貢していたルアンプラバンは、シャムとフランスとの争奪の的となった。93年フランスはシャムのバンコクに艦隊を派遣して威嚇し、メコン川左岸のラオスを保護領とした。

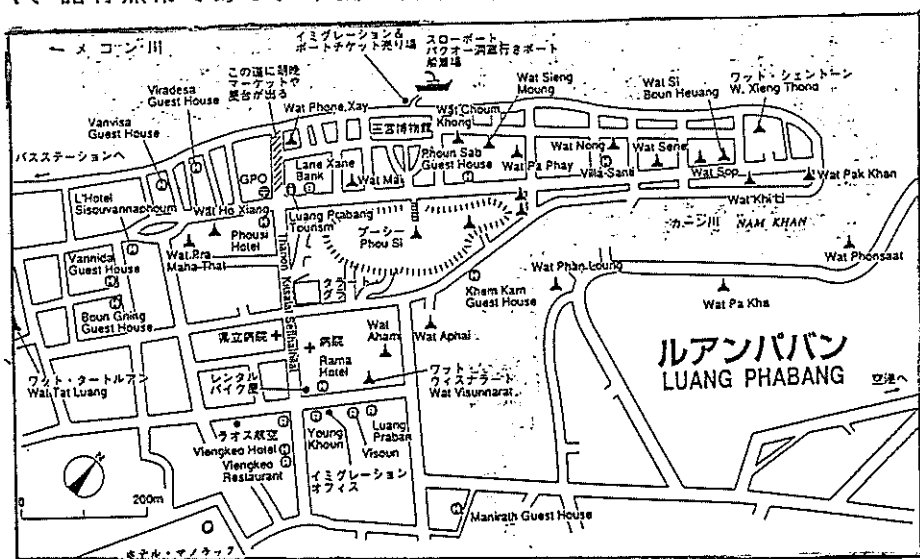
1949年にラオスのフランス連合内での独立が認められると、ルアンプラバン王家がラオス王国の国王となった。しかし75年5月から始まった「静かな革命」により、サワーンワッタナー国王が自ら退位し、600年余り続いたルアンプラバン王家は消滅して、ラオス人民民主共和国となった。

最後の王ワッタナーは退位後は新政権の顧問として郊外で農耕作業をしていた。皇太子らとともに東部の収容所に送られ、その後の消息は一切不明である。しかし仏教の守護者で退位後も「私はラオスの土になる」と言って亡命を拒んだ。だからワッタナー氏への市民の同情は厚いようだ。

ルアン普拉バン観光（下図参照）

ラン・サン王国の王都となったルアン普拉バンは、1975年の革命で王制が廃止されるまでの6年間は、栄華を誇った。しかし「栄華があれば必ず憔悴あり」の諺の通りになってしまった。宇宙の万物は常に流転して常住することではなく、諸行無常である。米国や日本も同じ運命を辿るかも知れない。

周囲を低い山並みに囲まれた旧都には、昔の殷賑を極めた跡があるだろうかと思いを馳せながら、王都の痕跡は一掃され



たように寂寥とした田舎町に落ちぶれていた。一行はカーン川沿いのプーシ丘の麓にあったレストランで昼食を摂り、ホテル・マノラツクに入った。

ルアン普拉バンという町は元はムアン・スアと呼ばれていたが、14世紀にラオス人がここを征服して「シェントン」に変えた。「ルアン」は「大きな」、「プラバン」は黄金の「プラバン仏像」のことで、ルアン普拉バンは「プラバン仏像のある町」の意味である。

1560年にプラバン仏像が招来されて改名された。この仏像はラオスで最も深く信仰されている由緒あるもので、スリランカで製作されて14世紀にカンボジアからラオスに渡り、ビエンチャンからルアン普拉バンに招来されてこの町の改名の契機を作った。

この仏像は1778年、シャム（タイ）遠征軍の手で持ち出され、その後、一旦は返還されたが1827年の動乱の時に再びシャムに取り戻された。しかし1867年、最終的にラオスに返還され旧王室博物館に保存されている。

ワット・シェントーン (38頁地図の右上)

「シェントーン」というのは「ルアン普拉バン」の旧名である。ラオスの小京都といった風情豊かなこの町には、80もの古い由緒ある寺院が建っている。文化遺産都市の数ある寺院の中で最初に選ばれたのが、メコンとカーン川の合流点にあるワット・シェントーンであった。

この寺は1561年、当時のセーターティラート王によって建立された最も由緒ある寺院であった。

バスを降りて境内広場に立つと、ラオス独特の三層の大屋根を中央にして、前後に二層の建物が重なるように建っていた。これが暇に焼き付けてきた世界文化遺産筆頭の建物で、直接眼にすることが出来た胸一杯の思いは「方寸を責む(ホウスンヲセム)」という心境であった。

世界から見放されたように訪れる人影はなく、村夫然として老人が独りたたずんでいる中を、足ばやに近づいていった。

古色蒼然とした文化遺産の建物の外壁には、ラオス式の黄金の曼陀羅図絵が画かれ、仏教で言う鳥の鳴かないあの世の光景であった。

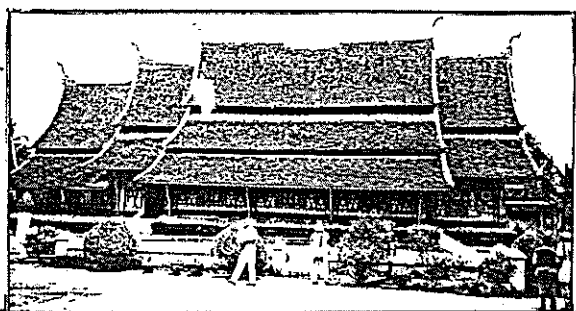
(右上の写真は外壁に画かれた豪華絢爛の黄金の曼陀羅絵図)

寺の正面入口に廻ると、正面の壁面は絢爛豪華な黄金の絵図で埋め尽くされ、薄暗い内陣には多釈迦の他に数体の立像が静かに祀られていた。

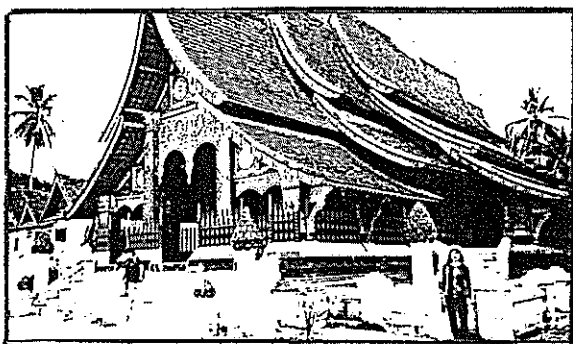
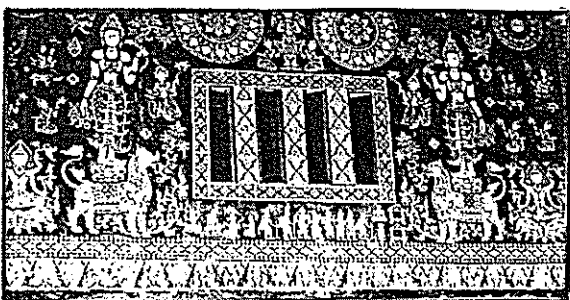
(右の写真は寺院の正面からの眺めで荘厳な感じの美観である)

裏手に廻ってみると、その壁面には大樹のモザイク模様が画かれていた。かつて本堂跡には高さ160ほもある、マイ・トーンという伝説の大樹があったと言われ、それがこのモザイクの大樹であった。

東南アジアの山岳地方では森林を伐採すると、樹木はそれを知って互いに

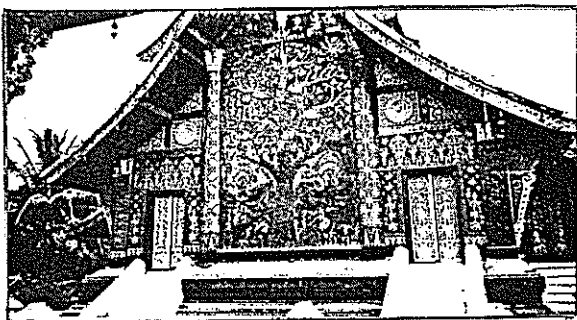


(上はシェントンの見事な屋根と全景)



木の葉と木の葉をゆすり合わせて、悲しげに騒ぎをたてたと聞いている。更に鋸が入って樹が切られ出されると、樹木は断末魔のような悲しいうめき声を上げるという。それで、樹の霊を弔うようにモザイク画は描かれていた。

(右は伝説の大樹のモザイク絵)



本堂の横手にある祠の壁面のモザイクには、一変してラオスの16世紀時代の生活習慣と仏教説話が画かれ、興味深く我々拝観者の眼を引き付けていたのである。

この生活習慣のモザイク壁画を詳しく観察すればするほど、ラオスのことが理解されてくる。

画面には色々な形態をした象、虎、牛、水牛、豚、蛇、鳥、山狩りで捕らえた兎や、川で釣ってきた魚類など、一方では田植えから稲刈りを始め南方特有のヤシ、パイヤ、バナナの木などが描かれている。又、竹造りの家の中で合掌して仏に祈りを捧げる者もおれば、鳥が仏に供えるために何かを嘴にくわえているもの、池の中の睡蓮が咲く王様の家は豪華で、金色の塔が聳え、王と王妃がご馳走を食べている光景まで描かれていた。



(上の写真は生活習慣を描いたモザイク壁画)

シェントーン寺院を見学するまでは、街の寂れきった姿に哀れみを感じていたが、この寺の「善を尽くし美を尽くす」数々の芸術品を拝見した途端に、辛気くさくなっていた我が心中も、驚嘆して晴れやかになってしまった。

あらゆる芸術に志す人々は人の世を長閑にしてくれるし、人の心を豊かにしてくれるものだと、ルアンブラバンを訪れてしみじみと感じたのである。

「少年僧」

ワット・シェントーンでは少年層の多いことに気付くだろう。小さい時から修行することは「乾いたタオルを絞る」ようで、厳しい練習が身のためである。境内のブーゲンビリアの咲く樹の下で数人の少年僧が休んでいた。話題は仏の話か学問の話だろうか。男児は生涯に一度は僧侶になって修行しなければならない。

早朝の薄暗い時から藍色のベールをかぶった少年僧も、托鉢に歩かなければならない。年齢は中学生ほどの少年である。村にある学校は小学2年生までで、小学3年以上は歩いて1時間以上もかかる学校に通わなければならない。学校がなかったり、家が貧しかったり、遠距離だったりして勉強できない子供が沢山いる。だから寺で寝起きして中間は近くの学校に少年僧は通学している。(右は少年僧)



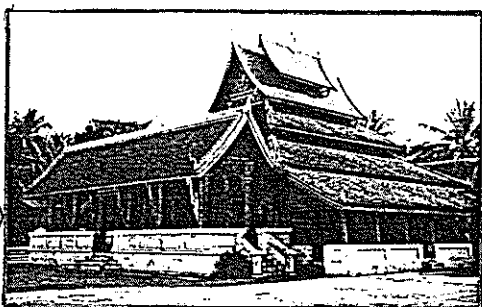
ワット・マイ (スワナブーマハム) (38頁地図の中央上)

シェントーンの見学では疲れて身体は鉛でも流し込まれたように重く感じ、バスに独り乗車して疲れを癒していると、運転手は突然エンジンを始動して発進した。ラオス人は穏健だと聞いていたから心配はしなかったが、停車してから30分経過しても一行の姿が現れない。微かな危惧を感じてきた。

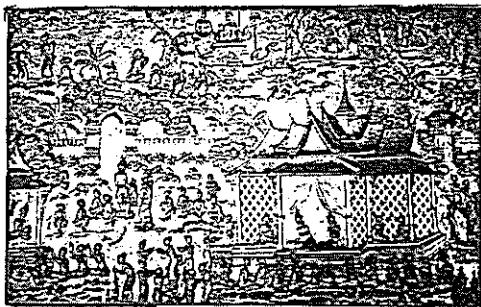
手真似、足真似で運転手に話し掛けたところ、我が意を感じたのか来た道を逆戻りし始めた。案の定、一行と「カノンマントン」という「芋とゴマ」を混ぜて油で揚げた菓子屋の前で出会い、心配は杞憂に終わった。

バスはメコン川沿いの細い道を通り過ぎていくと、主婦がメコン川から水の入った桶を手に下げて石段を登ってきた。何のための水か不明である。

網膜に映ってきたワット・マイの五層の屋根は、厳(い)めしく見えたがラオスらしい優雅さをもっていた。夕陽を浴びている屋根は赤く映え、背景のヤシの緑が濃く光って実によいコントラストであった。(右は五層屋根のワット・マイ)



長く伸びた日陰の下を痛む足を引きずりながら近づいていった。この寺の見所は「ラーマーヤナ物語」の黄金のレリーフであった。アンコール・ワットで見られたが、古代インドの大叙情詩で申の化身である王子ラーマと、その妃シターとの波乱の生涯や、魔王ラーバナとの戦いを描いたものである。



シェントーン MOZAIK 画よりも一段精緻にできあがった描写は、当時のランサン王国の繁栄を伝えており、20世紀末の現代美術家たちも驚異の目を見張らうだろう。偉大な芸術とは、芸術的な才能による純粋な魂の表現である、と誰かが云った言葉を思い出していた。(上はラーマーヤナ物語のレリーフ)

生死のさまざまなドラマが起きていることを、改めて気付きながら院内の参観に移った。正面には黄金の大仏が安置され、その周りに大小さまざまな仏像があり、院内の壁にもまた黄金の小さな仏像が飾られ、千仏堂のような感じがしていた。

この寺の本尊の顔を拝していると、「恕」を訴えているような印象を受けた。「恕」は「如」と「心」の合字であるように、思いやりであり、同情である。論語の「己の欲せざる所を人に施すこと勿れ」とは「恕」の道である。

この寺にも多くの僧侶の姿が見られた。ラオスの仏教寺院は信仰表現の場所であるばかりではなく、教育の場であり、人々の親睦と交流の場である。また図書館の役目も果たし、優れた芸術文化の蓄積されたところとして、先祖代々、何百年も存続されてきたところであった。

ラオスの仏教美術は決して派手ではないが、侘び寂びを感じさせる。それどころか心が安らぐ穏やかさ、静謐さ、美しさがある。それはこの国の人々の慎ましい生活、謙虚な心構えが反映されているかも知れないとの感想を懷いて寺を辞したのである。

ワット・ウィスナラート (38頁地図の中央左下)

小さな街ながらルアン普拉バンは古い街だけに、世界遺産都市らしく各寺院や個々の家々にも独特の歴史が刻み込まれていた。屋台が出ている露天市場を車窓から眺めて進路を南にとった。バスが到着したところには殺風景な二層の屋根が見えていた。これがシェントーンよりも古いワットウィスナラートであった。

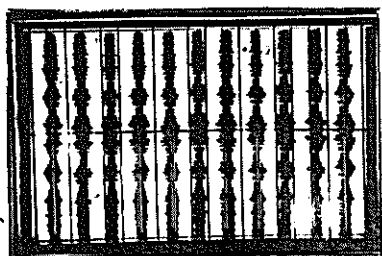


(右上の写真はワット・ウィスナラートの本堂の全景)

この景観を眼にただけで世界遺産の価値が歴然と分かるのであった。シェントーンにしろワット・マイにしろ、貧困きわまるラオスの国状では修理して管理することは至難のことで、ユネコス資金により立派に修復されていることは喜ばしいことである。この寺の古い壁は真っ白に塗り替えられ、古い寺の面影は遺っていなかった。

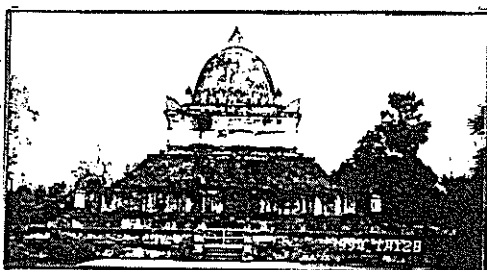
近づいて眺めると、窓枠の中がアンコール・ワットと全く同じであった。これを一つ取り上げても古い証拠であり、私個人としても強い親しみが湧いてきた。

実は私らがアンコール・ワットを訪れた時は、カンボジアのポルポト派が国内を徹底的に破壊していた。直接カンボジアを支配していたベトナムが、初めてアンコール・ワットの見学を許可した時であった。当時のアンコール・ワットは破壊されたものが寺院外に捨てられていた。その捨てられていた窓枠内の算盤玉のような一齣を、私は拾って持ち帰り、大切に保管している。同じものを見た私の歓喜は夢のようであった。(上の写真は寺の算盤玉のような窓枠)



黄金仏が安置されている白壁寺院の後方にある広場には、スイカの仏塔と

陈される古ぼけたパゴダが立っていた。まだ完全に修復されていないのか黒ずんだ色で、型式はビルマのパゴダによく似ていた。これを「タートマントモー」と呼んでいたが、ラオス語では西瓜の仏塔の意味であろうか。



世界遺産都市ルアンプラバンの名刹である三大寺院の見学は、予定通り終了した。(上はタートマントモー仏塔)

「財宝は地獄の家苞(イエット)」即ち財宝はいくら貯め込んでも、死んだときに地獄への土産になるに過ぎないと云われるが、これらの世界遺産の財宝は自分を助けるもので(これを瓜牙という)、確かに彗星のように独特の光芒を放っていたと心から絶賛したい。

また「千金の裘(キュー)は一狐の皮にあらず」と申したいのである。狐の夜の下の毛で作った高価な皮衣は一匹の狐ではできない。このような立派な遺産を作るのには、多くの優秀な知能技術を集めて初めて出来るのであった。

ラオスの人々に、年老いた我々のような日本人は明るさよりも陰鬱さを、豊穡よりも貧しさを、好んでいることを付け加えておきたい。その証拠には、このツアーの諸君は定年退職者が多いことであつた。

マノラック・ホテル (38頁地図の左下)

今日の観光予定が終わり、ルアンプラバンの目抜き通りにあったホンダの店に熱い眠差しを送り、二階建ての小規模な校を左にして進むと、間もなくマノラック・ホテルであつた。

今夜こそ温かい風呂に浸かって、ゆっくりと旅塵を払いたいと思っていたが、これも叶わぬ木賃宿であつた。



夕食は市内の「永信飯店」で摂ることになり、席を暖める暇もなく出発とつた。夜のメンストリートは点々と外灯があるだけで、煌々として場所やオンの輝き一つさえ見えない街であつた。これがラオス第二の町であるかの国勢は明瞭である。(上の写真はマノラック・ホテルの正面)

味覚を喪失した私には中華料理の味は記憶にないが、メモ帳を見ると非常に不味く最低だと書かれ、餅米が初めて出されたと記されていた。ラオス人目手の店では食通の日本人には通用しないのであつた。

「蟹は自分の甲羅に合わせて穴を掘る」と云うが、設備や食事の粗悪は国の経済力によるもので仕方がないと諦め、寝た間が極楽だと早く床に就いた。

ラオスの仏教

ここでラオスの仏教に就いて記しておきたい。

ラオスはタイ、カンボジア、ミャンマー、スリランカとともに小乗仏教の国である。正式には「南方上座部仏教」（ジョウザブ）という。

「上座部仏教」とは仏教部派の一つで、仏滅100年ごろ仏教教団は上座部と大衆部の二つに分裂した。これは根本分裂と呼ばれ、部派仏教時代の幕開けとなった。根本分裂の原因については南・北両伝で大きな相違がある。

南伝によれば、分裂の原因は十事問題である。十事とは従来の教団の規則（戒律）を緩和した10項目の除外例である。この中には金銀を蓄えても良いという条項も入っている。

この十事を認める進歩派は、多人数であったので大衆部と呼ばれ、除外を認めない厳格派は少人数で長老上座が多かったので、上座部と名付けられた。

一方、北伝によると、その原因は五事問題であったという。五事とは、修行者の達する究極の境地である「阿羅漢」（修行者の到達しうる最高位）の内容を低くみなす五つの見解のことである。この五事を認めたのが大衆部となり、反対したのが上座部となった。

上座部仏教が先ずスリランカに伝わったのは、前三世紀のアショーカ王の時代で、それから南アジア、東南アジアの諸国に伝わった。

ラオスに仏教が伝わったのは、十四世紀中頃のラン・サン王国建国時代といわれている。それはスリランカからカンボジア経由でもたらされた上座部仏教（小乗仏教）で、二つの宗派がある。一つはマハニカイ、もう一つはタイから入ってきたタマコート派であるが、前者の方が優勢である。

ラオスには2320の寺院、約2万の僧侶がおり、ラオ族の95%が仏教徒である。なお山岳少数民族の間ではアニミズムが支配的である。

ラオス人は仏教にたいし敬虔で信仰心の厚い国民であり、男子は一生に一度は僧籍に入る習慣がある。国家的行事、冠婚葬祭に至るまで仏式で行われることから、仏教を切り離した生活は考えられない。ラオス人の考え方の根底には仏教思想が流れているのである。

篤く仏教を信仰しているラオス人を見ると、この国のどこが社会主義なのか疑いたくなる。社会主義イデオロギーなどは生活のどこにも存在しない。日々の生活が満ち足りていれば、それでよいのである。それでもラオスには厳然と制度としての社会主義体制が存在している。

いかに人民革命党といえども、永年にわたる仏教によって培われてきたラオス人の精神的な特質まで損ない、社会主義制度を作り上げることは困難だと判断したようだ。「宗教はアヘンである」といったマルクスの言葉は、ラオスでは通用していないようである。

1月13日

昨夜は早く床に就いたから目覚めが早かったのではなく、年を取ると寝ている体力までも無くなり、それで目覚めたような感じがする。

一行の誰かが鶏の鳴き声に起こされたと云っていたが、耳ツンボの私には鳴き声も聞こえず、もう一度だけ聞いてみたい鶏の鳴き声であった。

昨夜は薄暗い電灯のためにホテルの模様も分からなかった。今朝起きてみると白壁の幾つかの棟が建ち並び、庭にはピンクや白いブーゲンビリアが咲いていた。肌寒い南国の朝の空気を腹いっぱい吸い込んでホテルを出てみた。

町外れのこの界隈の住居はトタン葺きで、街の中を白黒入り混じった十数羽の鶏が、餌を求めて散歩していた。

向こうから托鉢の僧たちが一列になって通り過ぎていった。ラオス人にとって僧侶は、生活の規範を示したり、人の生き方を示したり、葬儀などの人の死後の後始末をする高貴な人々で、なくてはならない存在である。

付近には熱帯らしく濃い緑のマングが茂り、高く聳えた椰子の木に混じって檳榔樹（ピンロウジュ）が黄赤色の実を付けていた。南方では未熟な檳榔樹の種子と石灰を葉に包んで噛む習慣がある。これは歯磨きの代用のようなもので、染料や健胃、糸虫駆除にもなり、戦争当時を思い出すと懐かしい。

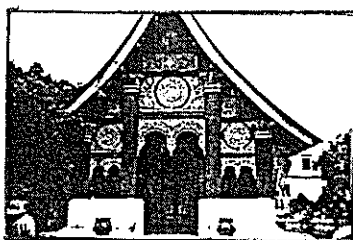


ワット・キリ （38頁地図の右上）

8時に出発したバスはカーン川に沿って走り、今日の最初の観光はワット・キリから始まった。この寺院は国や市が建立した寺でなく、一般の住民たちの喜捨によって建立した寺で、規模としてはさほど大きくはない。

「長者の万灯より貧者の一灯」と云われるが、たとえ僅かでも心のこもった方が良い。しかし反対に「阿弥陀も銭で光る」とか「地獄の沙汰も金次第」とも云われている。ともあれラオス人は仏教で活かされているのは確かだ。

ラオス特有の屋根をした本堂は小さいが絢爛豪華で、その横に鼓楼が建っていた。しかし本堂の扉は閉まったままで開かれていない。



不思議に思っていると次の建物の中に、昔の日本の葬式に使ったような輿（ヨシ）のようなものが見えた。この輿を見て本堂は葬式を営む式場で、輿は小霊柩車のようなものと理解した。（前頁下の写真の左は本堂）
（前頁下の写真の右は鼓楼）

鼓楼の太鼓はいつ叩くのであろうか。日本や中国のような大乘仏教の国では、煩惱を打ち消すために除夜の鐘を叩き鳴らすと聞いているが、ラオス仏教でも除夜に太鼓を叩くのであろうか。しかし、私は太鼓を叩くぐらいで煩惱が消えるとは思われず、宗教とは何と分からないものだろうかと思うのであった。

ラオスは火葬だが、火葬の場所も差別されているようである。もつとも火葬は貧富の差によっても差別があり、金のある人は由緒ある寺で火葬に付される。大統領などはビエンチャンのタット・ルアン広場に特別な火葬台が作られ、茶毘に付されたと云う。

（右上の写真は一般人の葬式の駕籠式の輿）

インドでは、死者の灰は聖なる河であるガンジス河に流されるように、ラオスでは、死者の灰は寺院の土に撒かれて自然に帰されるそうである。そして死者は輪廻転生して、何時かどこかに生まれ変わると信じられている。

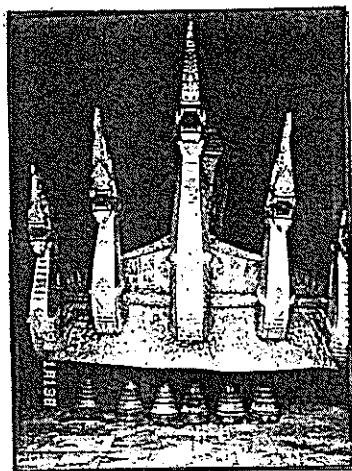
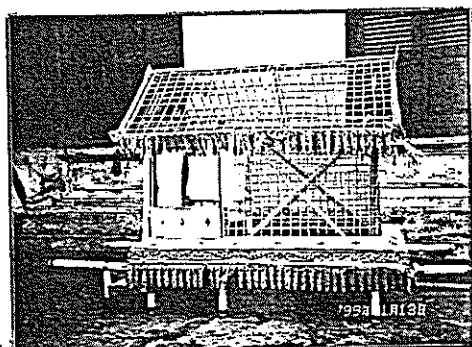
（右は大統領などの高官の棺で下に車がある）

このワット・キリは貧富の差をなくすための葬式場として、作ったものと想像していた。しかし死者を運ぶ輿だけは段階があるようだ。二人で運ぶ簡単なものから数人で運ぶもの、或いは昔、王様の輿に使ったような黄金色の豪華なものなど、幾つかの輿が並んでいた。

ラオスでは村には必ず寺院や精霊信仰の小祠があり、僧侶や小祠の霊媒たちは、村民の個人的な悩みごとから農耕、儀式まで受け持ち、一つの生活規範を与えられている。

村落はまた宗教行事や農作業などを共同で行う自律的な社会で、村民にとっては村が小宇宙、或いは世界そのもののようである。

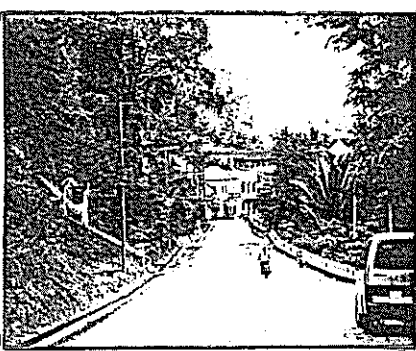
ラオス人の、何事にもものんびりしていて他人の生活に無関心な生活態度や、昔からの生活習慣を容易に変えようとしない保守性は、仏教や精霊信仰との永く深い関わりを抜きには、語ることは出来ないようであ



メコン川を遡上（下図参照）

ワット・キリからメコン川に沿った寂しい街道を走った。ラオス人は物質的には豊かではないが、今あるがままに受け入れ、それ以上を欲しない生活をしている。それらの人々の姿に懐かしさを覚えていると、バスは船着場の上を走る道路上で停車した。

（右は乗船場の上の街道）
乗船場の目印であろうか、白い色をして口だけが赤い狢犬（？）が据え置かれていた地点から、急な階段を降った。そこにメコンが静かに流れていた。



ビエンチャンの広々とした地形と違って、ルアンプラバンは山峡の間に位置し、メコンの川幅も狭まって対岸は手に取るように見えていた。

ラオス語では「象」は「サン」、「谷間」は「ラーン」で、「谷間」或いは「百万頭の象」という意味の「ラン・サン王国」が、メコンの中流域にそって16、17世紀に栄えた。これが初めてのラオス統一の王国で、ルアンプラバンが王都となった。中国ではメコンの上流を瀾滄江呼んでいる。



（右上はルアンプラバンより上流のメコン川流域の地図）

中国の史記によると8世紀頃、のちのラン・サン王国の地に「文单」（フン）または「陸真臘」（リクシンロウ）という国があり、象が何回か唐の都り長安に献上された、と記録されている。

ラオスはまた昔、「チャンパ」という名称であったという伝承がある。これはベトナム中部の古海洋国チャンパが、広大なメコン流域の産物を中国に送り出す、海港であったことに由来するらしい。

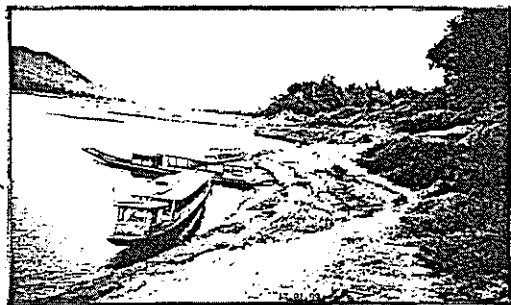
メコンとカーン川との合流点にある町がルアンプラバンで、もう少し上流にはもう一箇所「パークウ」（上図中央）というウー川との合流点があり、間の産出物を集めている。これらの地点はラオス北部全体を統率するには好の地である。我々はその「パークウ」に向かって遡上するのであった。

ラオスの低地で糯米（モチゴメ）を作るラオ族は、ケシを栽培してアヘンを作る高地のメオ、ヤオ族、そして先住民族のカム一族と交易していた。その最高の有力者が王となった。14世紀のラオ王国の建設は、若い王子ファ-グムが祖父王を自殺に追いやって建国したが、ここから始まったのである。

中国の明時代に雲南からホーという中国系の人に来て、小商いを牛耳るようになった。するとラオ族は商業から離れて地主や自作農におさまり、先住のクメール系の人達もその下で、自分の土地であるかのように耕した、と伝えられている。そして国土の所有者である王族は一代ごとに変わったらしい。

以上のような歴史を想起しながらメコンを遡上し始めた。乾期のために水深は浅く、到るところに砂場が現れ、雨季との差は断崖となっていた。その河原に黒トンボが飛んでいたが、果たして餌があるのかと心配であった。

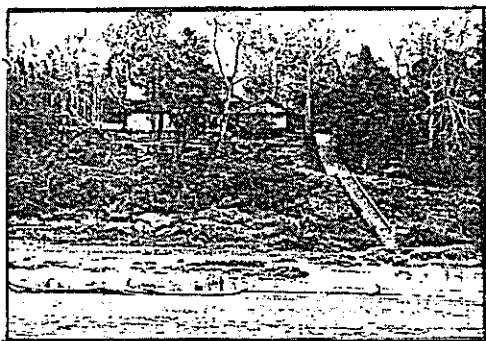
緩やかな流れだが、乗船が貧弱すぎるのか、救命胴衣を着用させられて約1時間10分の船旅に出発した。メコンの人々の素朴な暮らしや、平和への祈りは多少の浮き沈みはあつたものの、長い間変わることもなく今もこの大地に息づき、その風景を見ていると心が弾んでくるのであった。



(右の写真はルアンプラバンの乗船場に係留された観光船)

メコン上流の山岳地帯の河岸では、狭い台地を耕して僅かな作物作りに精を出し、或いは洗濯をしたり食器を洗っている女性の姿が目についていた。一方、男性は川に網を打って魚を捕り、川海苔(これは後刻判明)を採っていた。

時折、モーターを付けた舟が猛スピードで下っていった。ガイドはあれは日本製のエンジンで、中国製は評判が悪いという説明を忘れずに付け加えていた。



舟は屋根は付いているが前後は開放しで、山峡を吹き抜けてくる風は肌寒い。兩岸の山稜は起伏重畳として連なり、消えては現れる山嶺の景観は、日常の我々の生活とはかけ離れ過ぎており、これが現実なのか夢なのか、とはっとさせられる。

勿論この世は一つの夢には違いないが、この景観は無の世界に墜ちていくような感覚になってくる。古代の中国から伝えられている仙人の棲む、不老不死の理想郷「蓬萊」に向かっているような感じがする。

左手の河原にある岩石の上に赤く塗った水量標識が見えてきた。もうそろそろ部落があるという知らせのように見えていた。

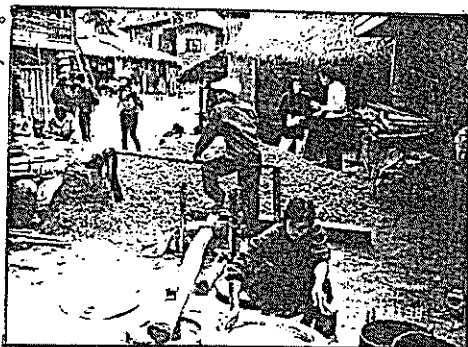
左右兩岸は見渡す限り遠くまで、椰子の木と竹藪ばかりの景観が続き、濃い緑の茂った枝葉に明るい陽が射していた。その椰子の樹間に寄り添うように、竹の家が二軒建っていて、仲睦まじいようである。又その上流にも数軒の家が寄り添って集落をつくっていた。(上の写真は山間の集落風景)

サンハイ村（47頁地図の中央）

メコン川とウー川が合流する地点にあるサンハイ村に上陸した。ラオ族の集落は河川の合流地点や縁辺部にあり、川に関連した地名を冠称するが多いようである。彼等には耕地に限りがあり、その土壌もまた必ずしも肥沃とは言い難い。

流れに面してやや開けたところを利用した畑が、細く連なって見えていた。そこには豊かではないが、生命力に溢れた景観を醸し出していた。「他人の国での喜びも己の村の苦しみに劣る」と云うとおりで、このような辺境でもやはり我が故郷が一番だと感じ、とった。

下船して茅葺きの家が並んだ道を歩き、先ず目に映ってきたのは砂金採集の光景であった。川から掘りあげて山積みにしてある砂利を石臼に入れ、男性が長い足踏みの杵で細かく採石する。その細石を女性がカゴに入れ、水に入れたり出したりして採金するのであった。



乾期の今は水面が低い。しかし雨季には水面も高くなるから、水車を利用して砕石するのかと想像していたが、日々の糊口にも窮している片鱗が窺えるのであった。

インドシナ半島は別名を「黄金半島」と呼ばれていたが、メコンは未だに黄金の夢を駆り立てている不思議な国である。この砂金採集の光景を見た私は、万人に平等に流れている筈の時間が、この界限は時間に取り残されているような感じがしていた。（上は川砂利から砂金を採集している光景）

一行は大自然の下で太古の昔から平穏に暮らしてきた、サンハイ村の中を静かに歩いた。このような深山幽谷の山峡の貧村でも、今日まで彼等は喜びと悲しみを踏み越えながら、「生」に息づいてきたのであった。

砂金採集の苦勞の姿を見学した後、ラオスの糯米で造っている蒸留酒工場に案内された。工場とは名ばかりで、トタン葺きの屋根にアンペラの囲いは、勿置小屋という感じであった。一行は試飲していたが下戸の私には興味はない。しかし人間社会では不思議にも、どのような山奥でも酒の文化だけは生きていた。

続いて老いも若きも問わず、女性たちが少数民族特有の衣装を織っている集落の見学に移った。彼女らは民族の区別を明瞭にするためだろうか、先祖々からの伝統の柄を守り、よそ見一つしないで手織の機織に励んでいた。

次いで各種民族のつくった民族織物を販売している集落を歩いて廻った。

実用的な各種の衣装は素晴らしいものばかりで、選ぶ能力がない私は凡ての店に足を運んでみた。値段は想像できないほど安い。世俗を離れて超然として暮らす彼女たちは、その値段で充分なのかも知れない。

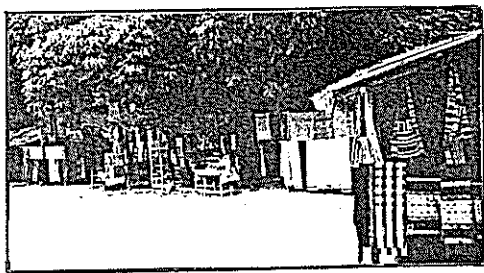
このことを「足を万里の流れに濯（ス）ぐ」というのだろうか。万里もある大河でじゃぶじゃぶ足を洗うことから、浮き世離れしたのんきなことをいう言葉である。（右は民族衣装を織る少数民族の女性）



ラオス人はよく「ボーペニヤン」という言葉を使う。その意味は「どうにかなるさ」といったものである。ラオス人のゆったりとした時間の流れと、牧歌的な生活の中に根付いた言葉で、何でものんびりやろうと云うことらしい。中国の「慢々的」（マンマンデ）と同じようである。

（右の写真は各山岳民族の民族衣装を売っている広場の店舗）

ここでラオスを知る上で重要な山岳民族に就いて若干記述しておきたい。



山岳民族と農業

ラオス政府は少数民族対策を実施しており、便宜上その居住地域によって、ラオス人を三つの民族に分類している。つまり居住地域を低地、山岳中部、山岳高地に分けて、低地ラオ族、中部ラオ族、高地ラオ族と呼んでいる。

ラオス経済の基盤は農業で、国民の約80%が農民であるが、耕地面積は国土の8%という僅かに過ぎない。

山岳民族の生計を支えているのは焼畑式の移動耕作である。毎年春さきに、山腹の斜面をおおう林を伐採して焼き払い、そのあとに陸稻、トウモロコシ、アワその他の雑穀やアヘンの原料であるケシを栽培する。この農業は灌漑や施肥をとまなわれないが、数回収穫すると地味が衰えるので、長期間休耕しなければならない。そこで新しい耕地を求めて頻繁に移住を繰り返すのである。

このようにしてメオ族（中国では苗）やヤオ族は遠く中国の中・南部から、アカ族やリス族などのチベット・ビルマ語族は北方のヒマラヤ東端からアジア照葉樹林帯の外縁にそって、何世紀もの時間をかけて徐々に南下し、現在の居住地に到達したのである。

山岳民族は尾根筋や山腹台地に十数戸の集落を営んでいるが、しばしば移動するため、村落以上の大きな政治組織はもっていない。だから国籍や国境も意に介さずに、中央の統治の及ばない「山の道」を自由に往来している。

タムティン洞窟（47頁地図の中央）

我々の青年期までは日本人の故郷といえど、小川にメダカが行列をつくって泳いでいた、メダカの学校の歌詞の通りであった。一方、畦道にはスマイルの花が咲いて、自然が可処分にもあったのは懐かしい。

それを思い出させてくれたサイハン村とも別れの時期が来た。人里を遠く離れた山の中に棲み、「石に枕して流れに漱（クチソツ）ぐ」というふうこ、自然を友とした生活を垣間見て、「世は気の毒な入れものなり」と感じながら去っていった。

乗船場から再びメコンを遡上したが、ラオスほどメコンとゆかりの深い国ないのであった。全長4000kmのうち2000kmちかくがラオス国内に流れ、鉄道も海もないこの国では川こそ交通の大動脈で、大半の町は古くからメコン沿いに開けてきた。

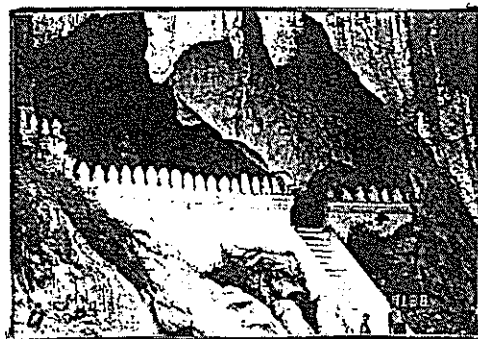


ラオスの人々はメコンには「ナーガ」（蛇神）が棲んでいると信じている。乾期にはメコンの支流に棲んでいた「ナーガ」が、雨季になると増水した川を遡上してくると云われる。雨季が明けると五穀豊穡を祈願してメコン流域の各地では、ナーガの姿をかたどったボートレースが行われるそうだ。代々の王が即位した際、この川の水で清めの儀式をされたのであった。（上はメコン上流のタムティン入口にある仏像とメコン）

乗船して暫くすると山容が峻険さを増してきて、タムティン洞窟の真下にうる河岸に下船した。ルアンプラバンから25km地点にあるタムティン洞窟寺院は、ルアンプラバンが世界遺産に選ばれてから一躍、観光名所になったのであった。

メコンに沿っていた溪谷の小径を川上に向かって進むと、右側の断崖に大鍾乳石の岩が垂れ下がっているのが見えてきた。そこ辺の土地にしては新しい、立派なほどの白いコンクリートの囲いと階段が設けられていた。

ルアンプラバンが世界遺産都市に選ばれた関係から、メコン上流のこの地まで、援助資金が廻り、新たに観光名所となったのであろう。（上の写真は下の鍾乳洞の白い階段で、左端に仏像が見えている）



太陽の光に照らされていた中で樹の葉だけが揺れていたが、人影らしいものは何も見えない。その深閑とした空間の大きな鍾乳石に覆われた下に、数体の石仏が祀られていた。それらの仏像を透して見える悠久の流れのメコンは、対岸に日陰になった岩山が見えていた。見渡す限り空気も自然も奇麗で趣があり、幽遠の自然公園をつくり出している感じがしていた。

夢の境地に誘い込まれるように洞窟に入った。懐中電灯を持参するように旅行社からの指示はあったが、施設が整った現在の洞窟は電灯が煌々としており、中国程度には整備されていた。

子供の頃の記憶では、鍾乳洞の穴を見ただけで、肌毛が立つような悪寒を覚えたが、人間は経験の動物と云うから怖さはない。鈍感になってしまったボケ老人は感覚も麻痺し、神聖な洞窟寺院も、昼間の行灯ほどの威力も感じないのであった。

生の息吹が途絶えて気が遠くなるほどの静けさの鍾乳洞に、階段状になって数え切れない仏像が安置されていた。これらはルアンプラバンの信者が古い仏像を持参してきたもので、「仏像の墓場」であった。

この習慣は500年以前から続いており、信者は四月のラオス正月にはこの洞窟に詣でるのである。メコンは仏教とともに信仰の対象であったのだ。（上の写真はタムティン洞窟の、下の洞窟寺院内にある階段状の仏像群）

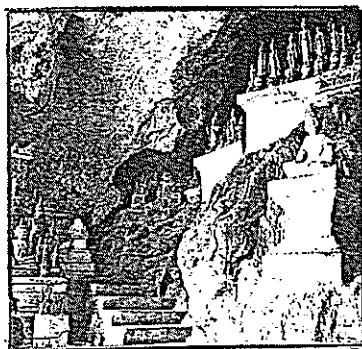
又一方の伝説によると、この洞窟は、もともと修行僧が瞑想のために籠もった洞窟であったが、16世紀にセーターティラート王が仏像を一体安置した後、次々と巡礼者が仏像を納め、1960年には3万7千体もの仏像で埋め尽くされたという。しかし革命の混乱期に盗難が相次ぎ、現在は4000体ほどの仏像が遺っているという。

タムティン洞窟には下と上の二つの洞窟がある。今見学してきたのは下の洞窟寺院であり、これから上の洞窟寺院の見学となった。

余り興味はないが一步一步と地面を踏みつけ、渾身の力を振り絞って階段を上り更に進んだ。

そこには古色蒼然とした巨木が天に向かって枝を広げ、大きな巨幹の下に鍾乳洞の入口が設けられ、眼が眩むような暗黒な洞穴が見えていた。（上はタムティンの上の洞窟）

幸いにも上の洞窟寺院は時間の関係から道内に入らず、外観だけを見学してタムティン観光は終了した。



パークウの岸壁を見てルアン普拉バンへ

タムティンの洞窟でも私は、仏心に染まって夢の境地に誘い込まれるような、魔力は全く感じなかった。年老いてくると「朝に紅顔ありて夕べに白骨となる」、というように人の命を憐れむようだが、若いときに死の世界で死とともに生きてきた激戦敢闘の私は、遠い昔に卒業していた。

旅行社から旅の後に渡された旅行記には、昼食はタムティン洞窟付近で、ルアン普拉バンから舟で料理人と一緒に運んできたランチを食べたと書いてあった。ここでも私は老碌状態になっていたのか、全く記憶にない。

しかしながら、カメラのシャッターを切り、沢山の写真をこまめに撮っており、メモ帳にも「知者は水を楽しむ」と書いてある。知恵の深い者は物事をよく分かっているから、問題が起きても次々と処置していくという、中国の辞である。それらを見ると、半分は正常で判断力のある正気のように、不思議でたまらない。

乗船したボートは「パークウ」（オー川の河口で47頁地図の中央上部）の岸壁を觀賞するため、遡上し始めた。

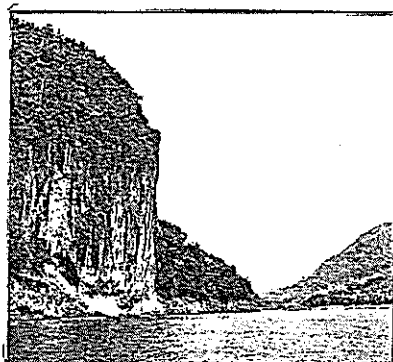
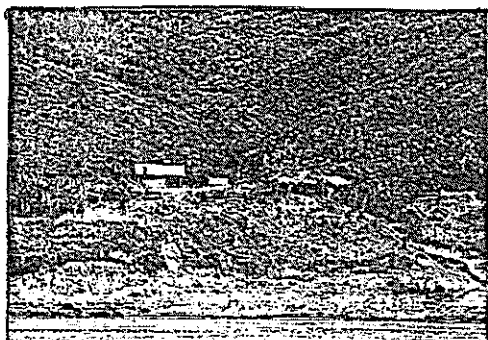
次第に兩岸の山峰が高くなるにつれてメコンは狭くなってくる。陽が翳って暗くなってきた山肌を眺めていると、忽然、僅かな河原に黄色い5個のテントが目映ってきた。これは日本人とアメリカ人のロックフライミングの基地のテントであった。その上流に山岳民族の荒屋（アバヤ）が焼畑の中に建っていた。（上は焼畑農業の荒屋）

住めば都とは云うが、哀れさを覚えながら通った。前方に濃い緑の山肌が削り壁ちたように、大きな障壁の岸壁が見えてきた。これまでのメコンでは珍しい景観である。

ルアン普拉バンとしては、この断崖絶壁とタムティン洞窟寺院を一緒にして、観光名所とする魂胆のようである。

メコンとオー川との合流点で反転した乗船は、一路ルアン普拉バンに向かってスピードを上げて快走した。

船窓に写ってくる景観は死に絶えたように人影もない。悠然と流れる自然を見つめていると行雲流水の境地を感じ、「逝く者は斯くの如きかな昼夜を（オ）かず」という言葉を、実感として味わったのであった。



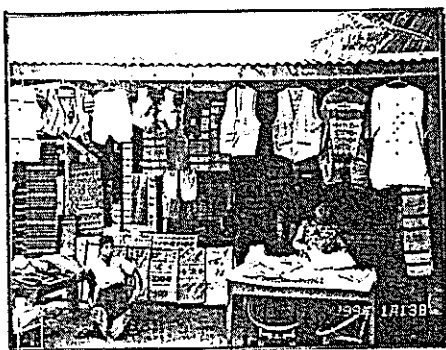
（上の写真はメコン河畔の断崖絶壁の景観）

伝統織物のバーン・パノン村 (ルアンプラバン近郊)

ルアンプラバンの船着場で下船した一行は迎えのバスに乗車して、直ぐに織物の村と宣伝されていたバーン・パノン村へと走行した。集落の店舗の建物はラオスの田舎としては珍しく、裕福そうで木造トタン葺きの壁は板張りであった。しかし農家の住居は高床式のアンペラ張りである。(右は部落の農家の住居)



ラオ族の若い女性が万能一心になって民族衣装を織っていた。ガイドはそこを暫く案内して、直ぐに織った商品を販売する店の方へと誘導した。あちらこちらの店先には民族特有の柄模様の布が吊り下がっていた。各店には数人の女性が出迎えていたが、客を呼び込むような掛け声はなく、欲しい物は買ってくれと言った静かな商売である。勿論、外国語は判らず、外人に観光が解放されてから日は浅く、商売の経験も不足して、競争原理が働いていないのは当然である。(上は店舗の景観)



品物の種類は多くて柄模様も違い、それぞれに特徴があって、各少数民族自慢の織物製品を並べていた。私の直感では、遠い少数民族山岳民族の各村までも観光客を誘致するのは困難なため、ここに分村して商売しているように感じとったのである。

その主導権は一体誰が掌握しているのだろうか。恐らくこれも華僑が経済界を握っているビルマと同様に、金持ちの華僑が主導権を握って、華僑だけが儲け、少数民族を苦しめているのではないだろうか。これを「豪民富賈」(ゴウミンフコ) というのである。だからこの村の華僑の家の豪華さは特別で、自家用車も外国製の高級車であった。

ビエンチャンの朝市(タラト・サオ)でも吃驚したが、バーン・パノン村でも物価は超安である。物価高の日本人から見れば羨ましい限りだ。しかし我々が日本の旅行社に支払った金額は、自由圏諸国への旅行代金と何ら変わらない。社会主義のために旅行代金が高いのであって、一般庶民にまでお裾分けはないのである。

中国の史記列伝伍に「下を見たら何かを拾え、上を見たら何かを取れ」と書いてある。つまり金持ちや外国人(金持ちと見なされている)は上流階級

だから、彼等からは法外な利益を奪っても構わないという考え方である。即ち中国と同様に、ラオスでもホテル代、航空機・列車・バス・船等の運賃や交通費は、ラオス人の数倍の代金を支払いさせられているから、我々の旅行代金が高くなっている。

私にとってバーン・パノン村で忘れられないのは、華僑の家の精霊祠に供えてあった花であった。その花の名は学名を「ミラクルリーフ」(Leaf of miracle)と称している。私が愚息に連れられて小笠原諸島に旅した時に、初めて見た植物である。小笠原諸島では「ハカラメ」と呼んでいた。(右上の写真は精霊祠。左側に供えた花がハカラメである)

これは大変縁起の良い植物で、分厚い葉は、ちぎられ捨てられ足で踏みつけられても、絶対に負けずに葉の端から芽を出して根も生えてくる。その素晴らしい生命力は、家族の繁栄、商売繁盛の贈り物として重宝がられている。

プーシー丘(38頁地図の中央の丘)

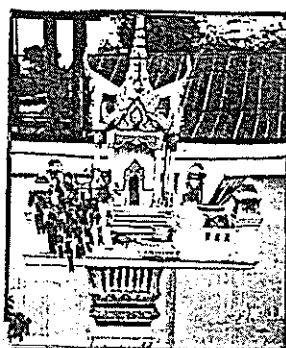
ルアンプラバンの最後を飾るのに最も相応しいのは、プーシー丘に登ってコン川を眼下に眺め、ラン・サン王国の都を一望のもとに瞰下することになった。

バーン・パノン村からルアンプラバンに帰った一行は、プーシー丘の麓で下車した。丘に上るのは自由行動である。両関節が痛み、今日一日の疲労も蓄積していた私は、遲疑逡巡することなく登山を決心した。これは日本を出発する時から心に決めていたことで、数少ない歴史の中のラン・サン王国に、心が惹かれていたからであった。

丘の麓に立って見ると、葉を落とした裸木の間に急峻な山肌を切り開いた129段の石段が、真っ直ぐに頂上に向かって伸びていた。一瞬、立ち止まって見上げたが、初志貫徹だと我が足は動いていた。このプーシーに登らずしてルアンプラバンに来たと云えるか、であった。

大きな枯葉が積もっていた階段の脇に、白い花を付けた2ほ以上もあるハナキリ(日本名)が咲いていた。反対側では若い女の子が小さな露天を開いて飲料水と並べていた。そしてここにもハカラメの赤い花が咲き誇り、登山者に幸運を呼んでいるように見えていた。

(右はプーシー丘に上る裸木の間の石段)



石段の途中で何回休憩したか記憶にない。時々腰を下ろして梢の先を眺めながら、深呼吸をしなければ体力が続かない。人間は恒常不変ではあり得ないが、自然には恒常不変性があると感じながら、年寄りの冷や水の姿をさらけ出して登っていった。

国花のチャンパーは頂上の木の枝先に少しばかり花を付けていた。実に気高い感じの花であり、古都を一望の下におさめられる絶好の景勝地に花を添えていた。
(右上はメコンとワット・シェントーン)

孤立して貴品高く聳えている丘の頂上から山水を眺望し、それが箱庭のように小さく見える「尺山寸水」(セキザンスンスイ)の景観の中に、二条の流れが帯のように写っていた。そしてフランスの愚民政策による動乱で、ラオスが混濁としていたように、メコンの大河もカーン川もまた黄濁し、塗炭の苦しい歳月を経てきたように流れていた。

(右の中央の写真はカーン川と市街)

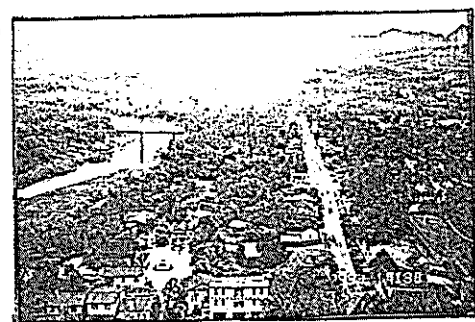
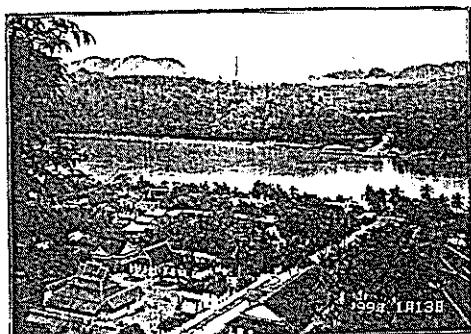
丘の上に立ち止まって世界遺産の町を見下ろしていると、我が心は満足感で浮き浮きであった。丘の麓に見える五層の赤い屋根はワット・マイで、その右手の川淵に見えるのは王宮の跡だと、記憶していた地図を判断しながら、ラーマヤーナ物語りの黄金のレリーフを思い出していた。(上は頂上に立つ親子三人)

右に視線を移すとワット・シェントーンが手に取るように見える一方、草木の蔭になって見えなかった、頂上の寺院の屋根や仏塔も姿を映し出してきた。そして高い所の寺に祈りを捧げにくる信者は、後を絶たずに続いていた。

文明が遅れた人口も少ないこの山奥に、これだけ多くの寺院が建立されていることは、日本の京都以上に価値のある文化遺産である。添乗員は小京都と説明していたが、私の感覚では小奈良と呼びたい感じであった。

いよいよ丘を下りる時間が切迫してきた。素晴らしかった景観を心の中で絶賛しながら階段を下りたが、各人各様に深い思い出となったことだろう。

しかし旅の終わりのクライマックスは、必ず虚しさが残るものである。別れない旅はないものかと、車窓を覗きながら思いに耽っていた。

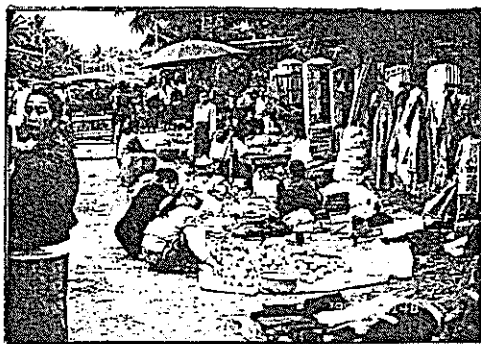


1月14日 ダラ市場（38頁地図の中央左側）

昨夜、夕食を摂ったSINXAYレストランで、この年になるまで味わうことがなかった「川海苔」を食べた。初物を食べたから75日は生き延びるかも知れないが、本当に珍味で、ラオスに来て食事が口に合ったのは初めてである。この川海苔の採集光景は昨日のメコン川遡上の時、望遠できた。

今朝は8時に出発してプーシー丘西側の大通りに開かれている朝市見物から始まった。

市場には野菜を初めとした生活必需品は殆どの品が露天に並んでいた。ゲテモノとしては鼠の熏製などがあり、中国は広州の市場を小型化した感じである。電化が遅れているため燃料の薪が山積みされ、近郊の山岳地帯からも少数民族が顔を見せて、殷賑を極めていた。



（上の写真は朝市場の景観）

露天市場の周辺はいわゆる繁華街で、街路周辺にはホテル、旅行代理店、銀行、郵便局などが集まり、世界遺産都市の中心をなしていた。

ラオスの庶民生活を知るため、市場となっている通りを一通り歩いてみた。魚介類や肉類は少ないが、野菜の豊富なことは地理的に当然なことである。その露天商の中に川海苔を見つけ、珍しさにかられて早速買ってみた。昨夜のレストランでの味は、味覚喪失の私も甘いと判を押したからであった。しかし、帰国してから味わったが不味くて喉を通らず、味付けが問題のようだ。

ラオス第2の都市ながら田舎の市場に過ぎず、カゴに入れた鶏を商いしている光景は戦時中と変わらず、足早に通り抜けてプーシー丘の麓に着いた。

麓の通りの街路樹は巨木で四方に枝を張り、暖かい冬の太陽の光を受けて花を咲かせ、我々日本人を歓迎しているように見えていた。花の知識に乏しい私でも、昨年1月にビルマのシャン桜を見て心が華やいだから、大体、緯度も同じで時期も同じだと、枝先を注目して眺めていた。

数は少ないが裸木に咲いている赤い花は、ビルマのシャン桜と同じで、沖縄の緋寒桜によく似ていた。三年連続して正月に桜が見られるとは、「死に花を咲かせた」ように見上げていると、ルアンパバン桜は花に一生懸命であった。



（右上の写真は濃い赤色のラオス桜）

一枝とりたいたと思ったが「花は折りたし梢は高し」の通りで、我が思いのようにはならず、カメラをアップにして記念に撮影した。しかしラオス人に

としては「花の下より鼻の下」ではないだろうかと思像していた。食糧の乏しい山岳の界隈では美しい花を眺めるよりは、腹一杯になるまで食べることが先決である。

我々年代の者にとっては、櫻の花に心を託したことは疑いのないことである。それは櫻の花の清潔さと、その散りぎわの潔（イサギヨサ）に日本人の美意識と倫理観を託したに相違ないだろう。

私どもが軍人であったころ、「花は櫻木人は武士」と持てはやされたが、花には盛りがあり、魚や野菜にも旬があるのと同様に、人間にも華やぐ時が一時はあったのだ。それは遠い遠い過去のことだと思えば、今までの心の張りや充足感は急速に消え去り、貝のように口を閉じてしまった。

人生を回顧するほどの私ではないが、「花一時人一盛」、花の美しい盛りは数日しかないように、人も栄えるのは一生のうちでほんの少力で、凋落の時の方が永いのだと思いつつ、プーシー丘の前の王室博物館へと移動した。

王室博物館（38頁地図の中央上）

14世紀以来ラン・サン王国の都として栄え、昔から装飾の豊かな寺院が多く建っているルアンプラバンでは、プラバンという黄金仏とプラケオというエメラルド仏の二つの宝物があった。

前記したように18世紀のシャム軍の侵入時に共に奪われたが、19世紀になって黄金仏だけが返還され、今はこの旧王宮跡の王室博物館で見ることができる。

この王宮は1909年に完成した王宮で、1975年の革命により王制が廃止されてからは、博物館として公開されている。

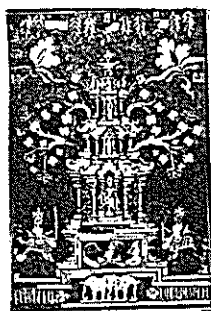


（上の写真は王室博物館の正面）

館内の写真撮影は禁止されており、私の微かな記憶では最後の王シーサワン・ワッタナンの肖像画の下に、ソ聯やアメリカからの贈呈品が並べられていた。それが印象的である。東西冷戦の狭間で苦心の外交を続けた王に、哀れみを覚えるのであった。

重度の難聴の私には一切、添乗員の通訳した説明も聞こえず、何が何だか判らずに館内を歩いたが、博物館の売店で一枚の写真を購入した。（右がその写真でエメラルド仏？）

正面玄関に描かれていたのは王室の紋章である。紋章の象はタイ式、蛇は中国式で、民族の構成を考えての考案のようである。翻翻（ハンボン）として掲揚されていた国旗は、上下



両端が赤（人民）、中央が青（国土）、中央の白い丸い部分は清潔を現しているのがあった。

正面玄関の右側にラオス式の服装を着用した銅像が立っていた。説明を聞かない私は、私なりに、この王宮を建設したシーサワン・ウォン王ではないかと、右の腰にさげた山刀を興味深く眺めていた。ビルマのカチン族も山刀を下げていたから、山岳民族なのであろう。

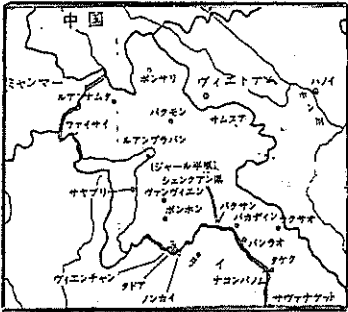
又、正面の建物の右端に一個の「石壺」が置かれていた。これはジャール平原の石壺であることは明瞭である。私もラオスに旅するときには、ジャール平原まで行ってみたいと希望していたが、娘は長い旅行は会社経営の関係から反対し、残念ながら中止した。「ジャール平原」に就いては下記する。

ジャール高原（右の地図参照）

位置はルアンプラバンの東南方約100kmの高原。ベトナム国境のアンナン山脈から延びる標高1000m前後の石灰石質の高原がジャール高原で、ラオスの屋根の一つを形成している。

その高原から巨大な石壺が多数発見されたことから、ジャール高原と命名された。ジャールとはフランス語で石壺の意味である。ラオスの人々は「何千年も昔の謎の石壺」と呼び、新石器時代の大小298基の石壺があると言われている。

（右はジャール平原の位置図）



石壺については大きく分けて三つの説が出されている。第一は石棺説。第二は二世紀頃の部族「チュアン」が祝勝の酒盛りを挙げたという説。第三は現地の人々の間に伝わる伝説で、「空の神・テーン」が空から降りてきて、この石壺で酒を飲んだという説である。

石壺の他に鉄製品や種々の石器、青銅器なども出土しており、狩猟地としても知られており、シャオ（苗）族などの多くの山岳民族が住んでいる。

（右はジャール平原の石壺の群）

この地域はかつてベトナムとタイの争奪の地となつたように、政台・戦略上の要衝で、ベトナムからルアンプラバン、ビエンチャンへ通じる幹線道路が通じている。ベトナム戦争当時は勿論のこと、ラオスの内戦時代にもこの平原をめぐり、左右兩派の攻防戦が繰り返された地でもあり、パテトラオの根拠地であった平原である。

ラオスで消息を絶った辻政信先輩も、このジャール高原で行方不明になったという噂も飛んでいるが、詳細は不明である。



空路ルアンプラバン～ビエンチャンへ

難聴の私には王宮博物館の黄金仏・プラバンが不明のまま、立ち去らなければならなかったことが、心残りであった。館を出て、王宮前にあった新しい絢爛豪華な寺院を眺めてバスに乗車し、一行はサンコン村(XANG KHONG)の「紙すき」が最後の見学となったのである。

紙作りで思い出されるのは敗戦後、何年現地に残留させられるか不明の時期のことであった。ビルマから山越えしてタイに駐留した我々は、長期間の滞在を覚悟した。連日多数の兵員を動員して山から「こうぞ」「みつまた」を採集し、ちり紙づくりに汗を流した50数年前を思い出す。サンコン村の見学は懐かしい思い出だけで、見学そのものは興味はなかった。

サンコン村からルアンプラバンに戻って、一昨日と同じレストランで昼食を摂り、フランスが建設したカーン川に架かる古い鉄橋を一瞥したのち、ルアンプラバン空港に着いた。

ルアンプラバンの思い出は多い。日本の世界遺産都市と比較すると月とスッポンかも知れないが、私の心を引っ込んで和まし、深い愛着を覚えさせてくれたのであった。憧れていたルアンプラバンともいよいよ離別するときが迫ってきた。

懐かしさ一杯の記憶を反芻しながら空港周辺の山々を眺め、その光景までも眸に刻んでいた。ラオスは陰に陽に差別され、お互いの国の若者が血を流し合ってきたことが信じられない。純真無垢で殺傷を最も忌み嫌う小乗仏教徒のラオス人は、過去の経験から心は平和一筋だと信じている。

「鼠壁を忘る、壁鼠を忘れず」と言うとおりの、一度受けた痛手は受けた人にとっては忘れることはできない。しかし、害を加えた人は直ぐ忘れてしまうものである。私は遠い昔の戦闘の専門家であったかも知れないが、明日の専門家ではないのである。だからルアンプラバンは私に師表のような感じを抱かせていた。

荘厳な空気が漂う古都の匂いと、伝統の優れた王都とも別離の時がきて、我々はQV645便のプムペラ機に搭乗し、ビエンチャンへと飛翔した。

機上の人となっても形影相弔うように私は、80年近い昔の田舎の風光に酔っているような、夢を見ている感じがしていた。そしてルアンプラバンで初めて人間というものが、どんなものか、を知ったような気がしていた。

機窓から見える空に浮かんだ雲は刻々と姿を変えて、筋になったり、綿になったりして、形が定まらないだけに、雲の描くさまざまな模様は天の啓示のように想像力を刺激し、雲無心になってビエンチャンに向かった。

本当に「死んで花実の咲くものか」である。生きていればこそ素晴らしいルアンプラバンが見られたのであった。

ビエンチャンの革命博物館とタラート・サオ（朝市）

ルアンプラバンに2泊してビエンチャンの土を踏むのは三日振りであった。先日ビエンチャンに到着した時には気付かなかったが、ルアンプラバンと違って山影は遠くてメコンの川幅も広く、平野が広がる地形に驚いた。

13:20に到着した一行はラン・サン・ホテルに直行した。再び眼にするビエンチャンの街はメコンにへばりつくように東西に広がり、ルアンプラバンと同様に至極のどかな街だと認識を新たにした。

しかし、この街もベトナム戦争に連動して内戦が激化していた頃、駐留米軍が落とすドルで街は虚飾の繁栄を遂げ、妖しく咲いた夜の街と化していた。この夜の街の様相を戦後の日本と照らし合わせて、瞼の裏に想像していた。

左派のパテト・ラオ（愛国戦線）による解放から独立を達成し、その首都となったビエンチャンは、かつての国際都市の面影を一掃したように、平凡な田舎町に変貌して、「世界で一番不思議な国」と書かれ、「アジアの隠花植物」と呼ばれた面影を残していないようである。

ホテルに到着してから暫くの休息の時間が与えられ、以降は自由行動の時間となった。しかし観光すべき箇所は既に観光が終わっていた関係から、OPとして革命博物館と市場（これに代わって希望者はサウナ風呂）でのショッピングの時間が設けられた。

革命博物館は内部の撮影は禁止で、疲労困憊の私は意識が朦朧としていて館内の記憶は全くない。それとも興味がなかったのかも知れない。社会主義と雖も、「天下は天下の天下である」。天下は万民のもので、一人の君主や一党のものではないのである、と想いながら館内を廻った。

館の中央玄関の上にある丸い図案は、中央の上に仏塔のタート・ルアン、左右に稲穂、中央に田圃、下方に動力源の水車が描かれ、農業国家を象徴した図案であった。

サウナ風呂の希望者は3、4名であった。何分にもラオスを訪れて以来、風呂もシャワーも浴びることは出来なかったから、その気持ちは理解できる。毎日温泉に親しんでいる私にとっては、風呂は何よりも大好きで欠かせない存在であった。しかし、掘った手小屋のような汚らしいサウナ風呂は、見ただけで「まわれ右」して退却したかもしれない。

再び訪れたタラート・サオは依然として大混雑の状態であった。品物の値段を聞くと、どんな小さい店でも直ぐ電卓を取り出して数字を標示し、言葉が通じなくともドルで売買が成立していた。しかし彼等は2倍も3倍もの掛け値を吹っかけ、正価の商いが習慣である日本人には驚きで、買うのに暗い気分になるのは当然であった。みんな華僑式な商法である。

それにしても市場に関する限り品物は豊富で値段は安く、ラオスは貧しい

国だという感じは受けない。これはビルマ・ラングーンのアウン・サン市場と同じだが、実際は市民生活は質素で貧困あり、贅沢品は一切買わないようである。

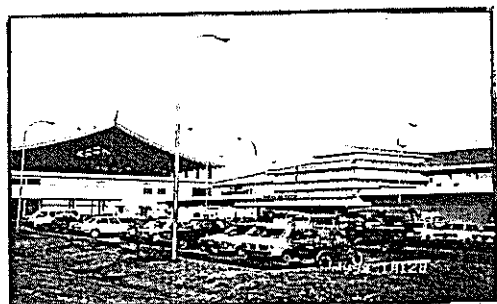
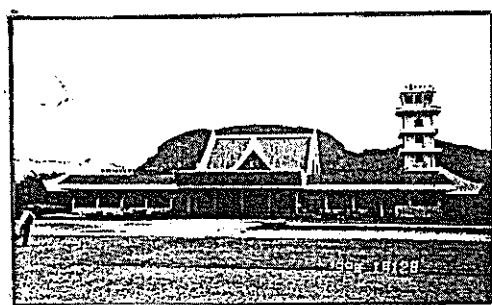
ビエンチャンではテレビのアンテナさえ立てれば、タイのテレビ放送が楽しめる。しかし、タイのテレビのコマーシャルで、物質欲をかき立てられるラオス人は余り多くないらしい。女性もタイ女性のように派手な化粧は好まない。こうしたラオス人の保守性、物質欲の淡泊さは、精神性を重んじる仏教が、永年にわたって生活の中に浸透してきたからであろう。

前記したように、ラオス人の国民性を端的に示す言葉として、「ボーベニアン（どうにかなるさ）」があるが、近代化からほど遠く、質素でのどかで、万事がのんびりムードのこの国は、別世界であった。

最貧国で農業以外はさしたる産業もなく、過疎に悩むラオスがなぜ社会主義化する必要性があったのか、という疑問が湧いてくる。もとよりラオス農民は元来原始的な自作農が大半であり、土地改良をする必要もなければ、経済、人口構造からみて、資本・労働力の集中投下による計画経済に適しているとはいえない。

しかし、考えてみれば穀倉地帯のビエンチャン平野の農民は、本来は独立自営農民であり、革命を行う必要性は薄かったのではなかろうか。それがインドシナ半島ではドミノ式に革命が起こり、半島三国の一体化が計られている背景に、各国国民の願望を超越したベトナムの強力な指導力と、軍事力を指摘しない訳には行かなかったのではなかろうか。

（下の写真は左側はルアン普拉バン、右側はビエンチャン空港ビル）



メコンの夕陽

日本国内では落日を観賞することは非常に稀有なことであるが、東南アジアでは盛んである。昨年はビルマの世界遺産都市であるパガンのパゴダの上から眺めた。10年ほど前にはサイゴン（ホーチミン市）で、文字通り七色に変わって暮れていく、メコンの落日を堪能したことが思い出される。

今夕は不思議な国ラオスの落日を観賞するため、ビエンチャンの郊外へ移動することになった。ブーゲンビリアや火炎樹などの熱帯の花が咲き競い、ブナの大木に覆われている街道を走っていくと、閑散とした並木道に黄衣をまとった僧侶がゆっくりと通り過ぎていった。

乾期のメコンは半分は干し上がって川底をのぞかせ、その河床を渡ってタイ側に渡っていけるような錯覚を覚える。メコンの沿道には茜色に染まっていく夕陽の下で、束の間の美景に酔いたいと集まってくる人達を当てに、果物や飲料水を売る屋台が並んでいた。

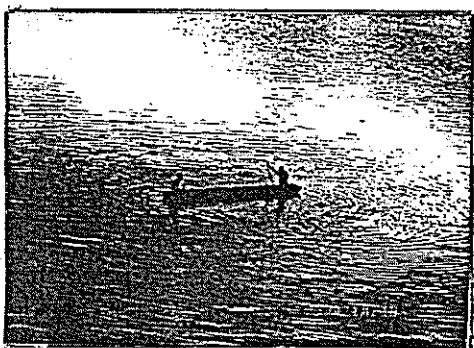
我々は川淵に設備された木造のベランダのある「サンセット・カフェ」に陣取り、コーヒーを飲みながら落日までの時間を待っていた。人出は案外多いようで、メコンに沈む夕陽の景観はビエンチャン最高の見所なのである。

世の中のことは総てに終わりがあることを初めから知っていながら、人間は終わりが無いものと思ひこみ、終わりを忘れて遊びに耽って楽しんでいる姿は、私を筆頭にして滑稽に見えていた。爽やかな中国やビルマの戦場で見た夕陽は安堵感が溢れていた。それは敵機や戦車、銃砲火の洗礼から免れるからである。

夕暮れの陽が西のタイ領に傾きはじめ、雲間から斜光が光の線のように洩れて河面を照らし出した。その中に一艘の釣り船が急いで櫓を漕ぎ始め、静謐な川岸に懸命に向かっている光景は一服の絵のようであった。（上は夕闇に櫓を漕ぐ釣船）

果てしなく広がった空に乾ききった大気と、眼もくらむほど大きな夕陽は熟し市のように甘美に見えていた。一刻も留まることなく変化していく落日の光芒は、漆黒のメコンを赤く染め、沈んでいく壮大な夕焼けのパノラマを、息を呑んで追っていた。

（右はメコンに沈んでいく夕暮れの景観）



冬の夕陽が長い影を映して沈んでいく景観を見つめていると、太陽の寿命もあと50億年で爆発し、新星となるということが脳裡に浮かんできた。この世のことは全て「かりそめ」であるのだ。だから歴史に対する恨みを、何時までも忘れないと云うのは実に不幸だ、と言わなければならない。中国の首脳のみならず、ラオスの人々も理解して欲しいのである。

我が身が目に見えない糸で太陽と結ばれていると感じながら、世界第13位の国際河川メコンの深紅の落日と共に、今日のスケジュールは終わった。

1月15日 52kmのモン族の村

昨夕は落日を觀賞したのち夕食は「広東酒家」で中華料理を食べた。この店で初めて白身の魚が出たことを記憶しているが、美味しかった訳ではない。



今朝、出発までの時間の余裕をみてホテルに隣接した街を散策した。丁度そのとき一家5人が朝食をとっていた。カメラを取り出してOKをとってレンズを向けると、一才ぐらいの男の子は大きな口を開けて覗き込んできた。朝食はご飯に青菜の炒めものと煮豆の簡素なもので、中国風に街頭にテーブルを出しての食事風景であった。フランスの植民地だった影響からパン食ではないかと思ったが、矢張り小麦がないようである。

(上の写真の左はラオス人の朝食風景。右は国道13号線の図)

今日の観光は先ず、ビエンチャンからルアンプラバンに通じる国道13号線上で、ビエンチャンから52km地点にあるモン族村の見学から始まった。

モン族は中国では苗族(ミャオ)と称して中国西南部や海南島に棲み、インドシナ半島北部やビルマなどにも分布している。これらの地域には私も行った経験があり懐かしく、楽しみながら今日の観光を期待した。

中国の歴史の中においてモン族は、数々の王朝に抵抗し、反乱を起こし、弾圧を受けた記録がある。モン族には文字がないから自らが書き残した歴史がない。初めはモン族も文字を持っていたが、その文字を使うと、モン族だということが判って迫害されるから、自然に消滅したのである。

モン族の歴史は先祖代々から語り継がれてきた。女の語り手もいるが、一家の歴史を語り継ぐのは男である。女に受け継がれているのは刺繍や染めな

どの手仕事であった。

中国での戦いと抑圧から自由を求め、逃れて辿りついた国ラオスも決して平和な生活を送れるわけではなかった。

フランスの植民地時代から第2次世界大戦をへてフランスが撤退すると、ラオスの共産化を恐れたアメリカは密かに介入してきた。ベトナム戦争ではラオスでの戦闘は余り知られていないが、ベトナム以上に大量の爆弾が投下された。

ラオスはアメリカの対ベトナム戦略上で重要な位置を占め、そのうえ山岳戦に強いモン族は兵士として使われた。ベトナム戦争後の内戦が始まると、共産側と反共側の両方の戦力に強制的に組み入れられ、モン族とモン族とが闘うことになった。

パテトラオ（愛国戦線）が有利になってアメリカ側が敗退すると、大勢のモン族の人々は戦火に追われ、難民を繰り返すことになった。その数は10万人以上に達したと言われている。

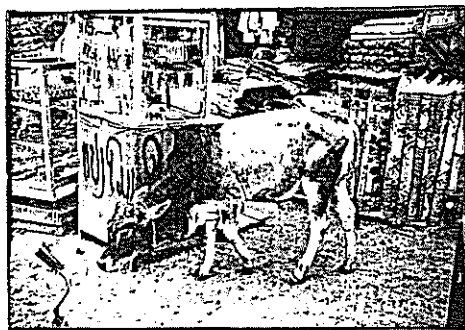
国道13号線をバスは北上していった。山間を貫く国道沿線の村々には、通過していく車両を相手に店舗が開かれ、トイレ休憩にも不自由はなく、出発して1時間半後の9時にモン族の村に到着した。

山岳の傾斜地を切り開いて作った52km地点のモン族村は、予想したよりも大きく高校もあり、一行はすぐ市場の見学となった。村の各家には立派な精霊祠が祀ってあるのが目に付いたが、これは山岳民族の特長の一つであった。

日本の各軽自動車メーカーが競っているように、古ぼけた各種の小型三輪自動車が市場のあちこちに並んでいた。恐らくタイから輸入したものであろう。

各店には日用雑貨を始め、山岳民族特有の民族衣装が店頭を飾り、山から出してきた砂糖黍まで並んでいた。

山間の都のような52km村にはパックに入った菓子もあり、ビスケット、各種のパン、カステラその他、インスタントラーメン等、品物は豊富である。この栗山幽谷の村の各所にペプシーコーラの看板まであったのは驚きである。（上の写真は市場の中を牛が散歩、下はモン族部落）



更に驚いたのはインドのように市場の中を牛が歩いていたことである。山の斜面の村には草地が少ないために、牛は人間の群がる市場まで餌を探しに出てきたのであった。モン族にとっては牛は貴重な財産で、村人たちは全体で保護しているのではないだろうか。（前頁の上の写真参照）

市場の裏はすぐ山であった。日本人にとっては買う品物もない市場に案内されるよりは、山岳民族の生活状態を見学する方が好ましく、特に焼畑農業の一端にでも接したかったと思いながら村を去ったのである。

ワンビェン村とタムジェン洞窟

52 km 村のモン族市場から国道14号線を離れ、東方のナムグム湖に通じる山間道に入ってリー川を渡った。すると地形は一変して山岳の峰々は鋸の歯のように峻険であった。その下の流れもまた清流で、これを山河襟帯というのかと瞬きながら美観に酔っていた。

山麓に広がった僅かな平地を耕して食糧を確保する彼等は、村中を総動員して田植の真っ最中であつた。田圃は休むことなく年中田植えが続き、人海戦術の光景を眺めただけでも、憐憫の情がこみ上げてくる。

立地条件が人間を作ると言うが全く気の毒で、

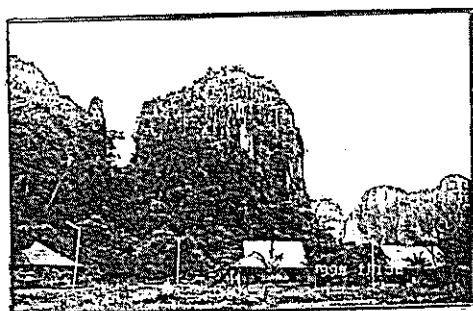
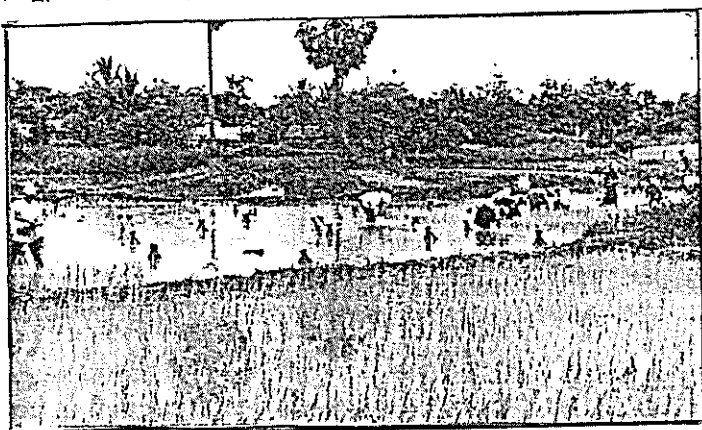
「測隠の心は仁の端なり」という言葉が私の胸を衝いていた。（上は田植え）

柱状節理の奇岩な峰の麓でバスは停車し、江山水陸の風光を楽しみながら平坦な小径を歩いた。ラオスにもこのような美しいリゾートがあるのかと思わせる瀟洒な建物が、目の前に見えてきた。

濃い緑の樹々に包まれる中に、一段と鮮やかな緑の屋根をのせた別荘には、名も知らない熱帯の花が周りの花壇を彩り、二羽の鴨が尻をふりふり散歩していた。

（上は柱状節理の奇岩の峰）

誰が棲むのか知らないが、何と長閑で優雅な佇まいだと見惚れていたところ、これがラオスでも名高いワンビェン・リゾートであつた。



二棟のリゾート住宅から小径は右に折れ、その先は断崖絶壁となった山肌に急坂の階段が連なり、その120段の階段は屈折して上っていた。

静寂な空気が漂う森閑としたしじまの中を一步一步踏んだ。階段から見渡す眺望は水光潋滟（レンエン、ゆらゆら）山色空濛（クウモウ、ぼんやり）「ひと目千両」といった素晴らしい景観であった。

登り詰めて行き着いたところは鍾乳洞で、これをタムジェン洞窟と呼んでいた。階段の下にあったリゾート住宅や鍾乳洞を、ワンビエンリゾートのポイントとする計画であろうか。一带は整然と奇麗に整備されていた。

全長3kmという洞窟の開放地域は350年にすぎないから、我々から見れば貧弱な規模ものであった。それでもラオスは最高の知恵をしぼって僧侶の立像、象、猿などの名称を付け、本物の仏像を一体祀って花や蠟燭、線香も供えてあった。しかしルアンプラバン上流にあった、タムティン洞窟寺院の仏像群とは比較にならない。

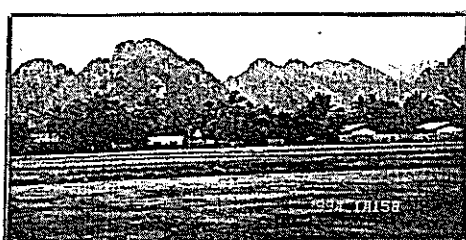
（上の写真の上はリゾート住宅の一棟、下はワンビエン洞窟に上る階段）

全てのものが眠っているような鍾乳洞の中に、一筋の水の流れが川をなしており、その透明度は抜群であった。精霊信仰の盛んなラオスの山々には、妖精が棲んでいるという無気味な穴蔵の感じがしていた。そして「水清ければ魚棲まず」言われているが、この流れには魚が泳いでいた。

タムジェン洞窟を出た高いところから見渡す眺望は、世俗を離れた桃源郷のようで、壺中の天（別天地）であった。自然が創り出した造形美は雲水飛動（巧妙な山水画）の一幅の絵となっていた。

バスに乗車してからも、車窓に帯のようになつて流れてくる景観は、中国の景勝地・桂林の美景に酷似していた。もう20年以上も前のことになるが、漓江を下った遠い昔のことが懐かしく思い出されてきた。（上の写真は中国の桂林の山峰に似ていると言う）

今日の私の脳裡に流れるのは、我が人生も非常に長くなったと言うことである。傘寿が接近してきた私には、樹齢100年の老大樹を見ても驚かず、50年の樹は息子のようにしか感じないのであった。



ナムグム湖（ダム）

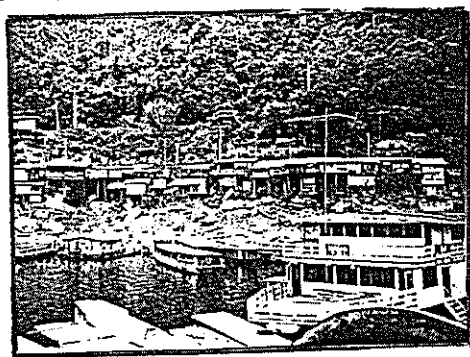
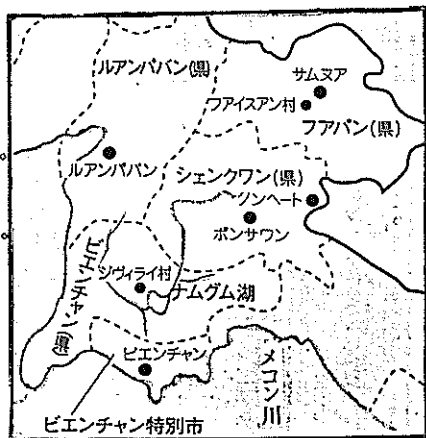
（右下図参照）

ワンビンリゾートのタムジェン洞窟を中心とした一帯は、人里を遠く離れて争いごともなく、素晴らしい武陵桃源の別天地であった。それから一行は渡仮村・ワンビェンのレストラン「PAN BOD」で遅い昼食を摂った。

特産のラオスコーヒを飲みながら、夢中に夢を夢みるように移りゆく光景を味わい、心が和む一時を過ごした。その自然の景観はもともと決まった持ち主はなく、その風景を楽しむことのできる人が所有者である。もちろん私もその一人で、人間も自然の一部だということに気がついた。

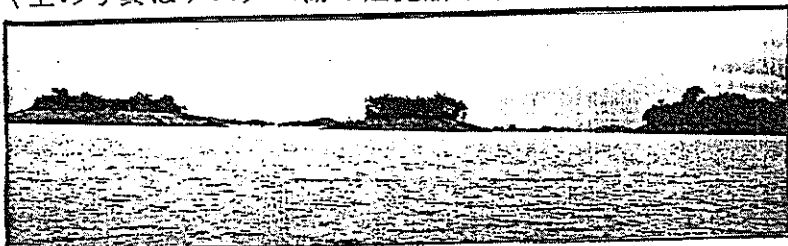
山と山の間にある谷は森林で覆われ、冷気を感じながらバスは街道を走った。左手の山側に山岳民族がバナナを並べた汚らしい数軒の店が見えてきた。その反対側にはナムグム湖の湖面が陽を受けて白く光っていた。

広々として水を満々と貯めたナムグム湖は、朦朧として視線をぼかし、湖中に点在する島は霞んで見えていた。



（上の写真はナムグム湖の遊覧船乗り場と山岳民族の店舗）

遊覧船に乗船して波一つ立たない鏡のような湖面を滑るようにして走った。



海を見たことも

ない内陸国のラオス人にとっては、本当に「滄海の変」であり、吃驚仰天したことだろう。（桑田が変じて滄海となる。世の中が急変すること）

ダムとなった湖中には沢山の島が見えた。それらの島は奇峰の多く連なる山間の流れを、堰き止めたから出来たもので、島は山の天辺であった。これらの眺めは世間の煩わしさから逃避し、のんびりと釣りなどをして暮らす「一竿の風月」の地で、自然を友としたい人には絶好の処である。

（上の写真はナムグム湖に浮かぶ島、島には色々な施設がつくられている）
ラオスにもこのような景勝地があることは夢想だにしなかった。この湖も

ワンピンリゾートの一環として期待している処で、湖面を走る船に吹き付ける冷たい風にふるえながら、将来の大発展を祈っていた。

昼食を摂った渡飯村・レストランのパンフレットには、ナムグム湖を中心にした遠大な開発計画が書かれていた。酒店（レストラン）、酒家（ホテル）、戸外娯楽公園、遊楽場、餐館、ゴルフ場、水上運動設備などである。これらの安居楽園の計画は中国語で印刷されていたから、華僑資本家の計画のようである。

モン族の村が3ヶ村と30軒ほど水没したナムグム・ダムは、日本などの9ヶ国の資金協力により、1967年から内乱のなかでも工事を続け、1985年まで工事期間を3期間に分けて完成した。発電量の80%はタイに売電され、貴重な外貨獲得の資源となっている。その設計と施工管理を請け負ったのが日本のNK・コンサルタント会社であった。

総額2860万ドルの建設費のうち、日本が拠出したのは496万ドルで全体の18%に過ぎない。しかし、ラオスでは日本の援助によるとの評価が高いようである。その理由は、ダム・サイトを発見したのは日本のコンサルタント会社だったことや、第1期の最も困難な工事の時期に、日本の技術者がラオス労働者と苦楽を共にしたからである。

ラオスは国土の80%が山岳地帯で、そこには多くの溪谷があり、世界でも有数のダム・サイトがいくつもある。ダム建設には膨大な資金が必要であるが、ラオス政府はタイやベトナムに売電することによつて得た外貨で、融資を返済できると見込んでいるようだ。

一日も早く水力発電が、ラオスの経済発展の牽引力になる日が来るのを期待したい。そして道路、通信などのインフラも整備され、人々の生活の向上を望んで已まない次第である。

ダムを一周する時間はなく、2、3の島を眺めて堰堤（高さ70m・幅180m）の写真を撮り、名残惜しく下船した。冬の湖にも山にも夕暮れが迫り、「桑榆日に迫らんとす」（ソウユマサニセマラントス）（桑榆とは夕陽が木の上にかかる夕暮れ時）という時を迎えた。

今日の観光予定も終わって「日暮れて道を急ぐ」ようにバスは走った。その時、アメリカ軍に教育されたモン族が、南下するのを待ち受けていたパテトラオは、3000人以上のモン族を大虐殺した事件を想い出した。多分この辺ではなかったかと、車窓から御冥福を祈っていた。

最後に「ラオスの人々よ、高原の山水とともに永遠に清く美しく」、という言葉を贈りたい気持ちで一杯であった。

夕暮れ時の空は未だ暮れていく明るさを残していたが、次第に夜に向かって刻一刻と塗り込まれていった。一瞬、真っ赤な太陽は草原の輪郭だけを映して、遂に没してしまった。

ラオス最後の晚餐

ラオスに入国してからの5日間はアッという間に過ぎ去った。ビルマ以上の未開な国・未知な国だけに思い出は多いものの、食事に関しては美味しかったという記憶は残念ながらない。それは私の味覚喪失のためだけではないらしい。

今夕のラオス最後の晚餐は、ビエンチャンの「KUALAO」レストランであった。ラオスで最高級のレストランだと説明されたが、肩がつかえるような狭苦しい感じで、テーブルには我々一行15名のほか白人若干名に過ぎず、約25名ぐらいで満席であった。日本の片田舎のレストラン程度である。

そもそもラオス人の食生活は、山岳民族を始めとして稲作民族的なもので、高地で盛んな陸稲栽培を背景にモチ米が多食されている。副食物の味付けは岩塩が豊富なせいか、塩味が濃厚でコクがあるのが特徴のようである。

内陸国のために海産物は非常に乏しく、それと反対に淡水からの魚介類は豊富である。鶏や豚の調理法は案外に多彩のようだが、日本人の好みではない。野菜の種類は数え切れないほど豊富で、私の旅行中は野菜だけで生きてきたようだ。

最後の晚餐とは名ばかりで品数が少々多いようだが、実質的にはこれと言うものはなく、記憶に留まるものは何もない。主食のモチ米もタイのチェンマイやビルマの各地で食べたものより硬く、食欲が出たことはなかった。

レストランの一隅に狭い舞台があって民族舞踊が始まった。両側にラオス式というのか、形の変わった木琴を奏でる二人の男性が座り、その間の狭い舞台を一人〜二人の若い女性が舞い踊るのである。

踊りの内容はマーヤ物語や悲恋物語でタイ、ビルマ、カンボジアと変わらず、被っていた冠も全く同じに見えていた。私の印象に残っているのは両脇に飾った素晴らしい二本の象牙と、明眸皓齒の可愛らしい踊り子である。

(写真の上は晚餐に出た食事風景。下は小さな舞台と踊り子たち)

極貧の国柄だが我々観光客には最大限の心配りをしている点は、ひしひしと感じられ、踊りが終わるたびに拍手を惜しみなく贈った。暖衣飽食の我々は酒池肉林の豪華な料理よりも、ありのままを見せてくれたことに感謝する。



1月16日 ラオス～ウドーン・ターニー～バンコク
 1月17日 バンコク～成田

幽邃なラオスの首都ビエンチャンと王都ルアン普拉バン、そして周辺の地区を廻り、不思議な国の実相をつぶさに見聞できた今次旅行の成果は、大体において満足しなければならない。

しかしながら一点だけ満足できないことがある。それは私自身の意識が一時ながら朦朧とした状態に陥り、一部の記憶が喪失していたことである。幸いビエンチャンやルアン普拉バンの重要な処だけは、完全に脳裡に刻まれている。

今日は憶れていたラオスとも、永遠の別離の日を迎えなければならなかった。住み慣れたビエンチャンのラン・サン・ホテルにさらばして、メコンの大河に架かったラオス・タイ友好大橋を渡り、タイ領の国境の町「ノンカイ」から「ウドーン・ターニー」、そして世界遺産である「バーンチェーン」の東南アジア最古の農耕文明遺産を見学し、空路バンコクに飛んだのである。

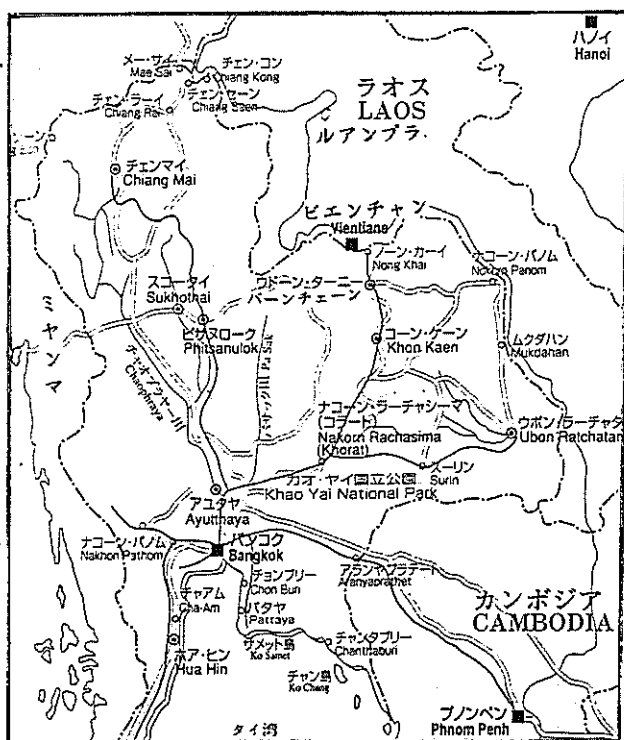
(上の地図は本日の経路図。ラオス・タイ友好大橋は29頁の記事参照)

運が悪いと言うべきか、今日の我が脳は霧につつまれたよう霞んでしまい、見学した場所の写真だけは写しているが、記憶は薄れてしまつて本日分の紀行文は書くことは出来ない。

17日は意識は明瞭で無事に帰国した。過去70回近い海外旅行のベテランの私も、今回は背筋に冷や汗が走るような衝撃を受け、今度こそ海外旅行は中止すべきだと、敢然と決意しなければならなかった。

人の世の儚さは将に「槿花一日の栄」(キンカイチジツノエイ。ムクゲの花は朝開いて、夕しほむから、はかない栄のたとえとして使われ、中国の詩人・白居易の「放言」の中に出ている言葉)の通りだと痛感したが、本当に「長生きすれば恥多し」であるようだ。

長いと思った旅も終わってみれば速いものであった。



精霊信仰

ゆったりとして静かに流れるメコン川のほとりの首都ビエンチャンや、古都のルアンプラバンは、緑豊かな森に守られるように寺院や住居が点在している。そこには僧侶が行き通り、人々は道端に腰を下ろし、物質的には豊かではないが今あるがままを受け入れて、それ以上を欲まずに生活していた。



このような環境の中にあって各家々には、精霊信仰の祠が立っていた。山岳民族のみならず、町の人々も同じく精霊を信じている不思議な国柄で、これに曳かれて私が写真に収めた数は30枚以上であった。



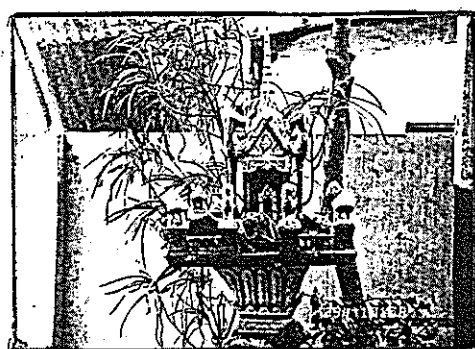
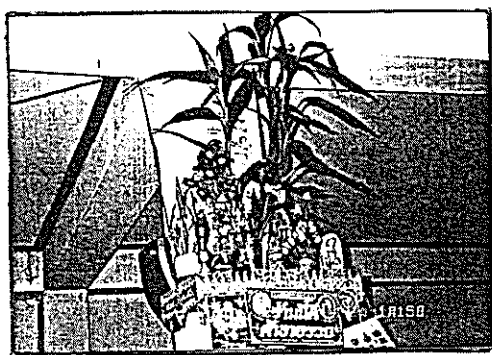
（右は家の前の樹木の下に祀った精霊祠で、普通は各家の玄関に祀っている）

仏教王国のミャンマー（ビルマ）でも精霊信仰が息づき、家々の柱にココヤシが吊り下げてあった。家を守ってくれると信じる彼等は、精霊の「ナツ神」を祀って花や水を捧げ、木や石、水などにも精霊が宿っていると信じていた。しかしビルマでは祠まで立てて信仰するほどではなく、ラオス人の精霊信仰は格別のようなものである。

私は過去の海外旅行で精霊信仰に出会ったのは、パプアニューギニアの山岳民族、中国・海南島の苗族、山西省の山岳民族、ビルマのポッパ山のナツ神であった。

ここに精霊に就いて一項を設けて記述するのは、ラオス人を理解する一端ともなれどと思ったからである。

（下の写真の左は家の中の精霊祠、右は玄関前の精霊祠）



「精霊と呪術のラオス」

東南アジアの平野部に早くから広められた仏教、ヒンドゥー教、イスラム教などの外来宗教は、山岳民族のもとには殆ど浸透しなかった。しかも、今なお文明世界の外にあって、大自然の中で生き続けるからには、素朴な精霊信仰をかたくなに守り、日常生活のあらゆる面に呪術や禁忌がつきまとう。

「精霊信仰」(アニミズム)は未開民族の中に残る原始宗教の一つで、動物、山、川、などの森羅万象のあらゆるものに、それぞれ霊魂があるという。例えば、メオ族やヤオ族は、すべての病は霊魂が肉体から離れることによって生じると信じており、病魔駆除のため鶏や豚を犠牲に捧げ、さらに祈禱師の呪力をかりて霊魂の復帰をはかるのである。

又、アカ族は、林や草むらには人間に災厄をもたらす悪霊がひそんでいると信じ、集落の周囲に柵を巡らし、村の入り口に鳥居に似た門を立て、それに様々な守護像を打ち付けて、邪霊の侵入を遮断する。犠牲にした犬の頭蓋骨を屋根に立てて魔除けにする風習がある。

更に我が国の古い民俗との関連で興味深いのは、「まれびと崇拜」である。遠い異郷から訪れる「まれびと」、つまり客人が多幸をもたらすという信仰は、かつて我が国の民間にも広く伝わっていたが、東南アジアでは、今なお山岳民族のあいだで、生きた習俗として命脈を保っているのである。例えば新生児が誕生したときに遠来の客があると、名付け親になってもらうなどである。

「アニミズム」

アニミズムは、夢や幻想の中で自分自身が体を離れて活動することを体験したり、死体が変形するのは、その人を生かしていた霊魂が去っていったためと、考えたことから生まれたとされる。

霊魂は目に見えない蒸気や影のようなものとされたり、人間の形で現れたり、血、息、内蔵と同一視されたりする。人間以外の生物や無生物についても、人間になぞらえて、それぞれの霊魂の存在が信じられた。

それは人間の体や物体の中に存在すると共に、時にはそれから離れて存在し、人間と同様に意志や感情、知覚を備えていて、人間や動植物に働きかけるとされた。人々は霊魂に働きかけてその恵みを求め、またその怒りを和らげようとした。

霊魂の観念は、人間や生物、無生物から次第に分離し、発展し、独立した個性を備え、人間や自然の力を超えた存在とされるようになって、原始的な神の観念が成立した。

アニミズムは、超自然的、超人間的存在を人間になぞらえて、神観念の原型とされる。動植物の崇拜、自然崇拜、死霊・祖霊の崇拜、シャマニズムなどの原始宗教の諸観念も、アニミズムに連なる宗教観念である。

「祈禱師」

ラオス人の心の中に深く根ざしている信仰として、仏教のほかに祈禱と精霊信仰がある。一般に僧侶が人の道を説いたり、悩んでいる人の相談を受けたり、冠婚葬祭などの儀式を執り行うのに対し、祈禱師は人の運命や運勢を占ったり、死者の霊を呼び出して、生者との会話の仲介役になったりする。

祈禱師の存在は、山岳民族の精霊信仰と密接に結びついている。正体の見えない精霊（ラオスではビーと称す）が、祈禱師の身体を通じて、その存在を一般の人々に伝えると信じられているからである。

祈禱師の役割は、日本の占い師と変わらない。日本の占い師と違うところは、占星術とかなんとか余り理屈や教理を言わないことである。

村には医療施設がなく、病気になったら祈禱師が医師の代役を務めるが、祈禱師の行動の一例として次のようなことが行われるようだ。

先ず、巫女（ミョ）がカバンの中から、一握みの米を取り出して赤い布に包み、それを手におろ下げて呪文を唱える。赤い米の包みが揺れ始めると、患者の身体に病気の精霊（ビー）が宿っている証拠だという。（包みが揺れないことはないらしい）

次は包みを解いて米を一つまみ手にのせる。そしてその中から二粒ずつ取っていく。もし、一粒残れば更に森のビーに供物が必要となり、翌日、男の祈禱師が登場する。

ビーへの供え物を前にして男の祈禱師は熱心に呪文を唱える。呪文がすむと今度は供物を患者の家に運び、患者の手首に白い木綿糸を巻きながら再び呪文を続ける。最後に一声高く叫ぶとき、患者の身体にいた病気のビーが追い出されるのだそうだ。

要するに貧しい山岳民族の村では、ろくな薬も買えず、手に入らないから、祈禱師が、村人の心の拠り所としての役割を担っているというわけである。

ラオスの精霊信仰は、本来、中部ラオ族や高地ラオ族の原始宗教が源流であるが、仏教を信仰している低地ラオ族の間にもかなり浸透している。だから市街地にも精霊祠が立っていた。

日本の神道が、森羅万象に神々が宿るとして、多神教的であるのと似たところがある。ラオスは山と森の世界が多く、それらの多くには精霊が宿っていると信じられている。しかし、日本の神道の神々が、幽玄で神秘性をたたえているのに対し、ラオスの精霊は、ギリシャ神話の神々に似て大変に人間的である。ある意味では、人間の善と悪の象徴と云うべきかも知れない。

ラオスの家々には必ずといっていいほど、ビーを祀る祠がどこかに置いている。村の入口にも祠がある。日本の神社の入口にある鳥居と似たところがある。鳥居が神聖な場所と俗界を隔てる意味があるのに対し、ラオスの祠は、村人に幸福をもたらす守護神としてのビーを呼び込むためである。一方、人間に悪戯をしたり、怖ろしい病気や災害をもたらすビーもいる。

「靈魂」

ビーの宗教觀念を支配しているのは、「靈魂」に対する信仰である。人間の運命に善惡の影響を与えるのは、死者の靈魂の仕業とされる。

靈魂は死後三、四日で身体から離れる。悪人の靈魂は虎に変わり、ジャングルの中で鹿や猪を追うことになる。死者の靈魂が猛獸に変形するという信仰はビー族の隣人たち、特にラオ族、ティン族、カムーク族の間にも存在する。靈魂は目に見えないが、人間の形をしていると考えられている。

精靈を表す絵とか偶像などはない。すべての精靈はジャングルに、ことにある特定の木に住んでいる。原始林の樹木のごとく太い幹の中には、しばしば幾つかの精靈が住んでいるといわれている。

このような精靈信仰は、インドシナの子山岳民族の殆どが持っている。民族によっては、水、山、川、谷、大きな岩などにも宿ると考えられている。

精靈信仰は前記したように、単に山岳民族だけでなく都市の住民にもある。それは原始林で生活していた山岳民族の精靈信仰が、平地の低地ラオ族との争いや、物々交換などの交易によってもたらされ、拡がったものである。

實際、一般のラオス人の間でもビーの存在を信じている者は非常に多い。それはラオス人のみならずタイ人も同様である。結局、理屈では理解できない不思議な現象や、尋常ならざるものなどをビーのせいにしてしまうようである。

ラオスでは、ビーは善靈、悪靈の二つのビーに分けられる。善靈のビーは餅や花を供えて畏敬の念をもって供養すると、願い事をかなえてくれると信じている。悪靈のビーには、男性の魔神や女性の妖鬼などが存在すると信じられている。悪靈は悪戯好きで攻撃的であり、ラオス人はこの悪靈の嫌がらせを大変恐れている。

このビーは、人間には正体が見えないとされているが、特殊な才能を持った「祈禱師」に、その存在をいろいろな手段を通じてしらせる、と考えられている。

したがって、変な死に方、たとえば自殺した者、溺死した者、疫病で死んだ者、猛獸に襲われて死んだ者、原因不明の死に方をした者などは、悪靈のビーがついていてと信じられ、みんな恐る恐る埋葬する。そしてラオスは火葬であるが、火葬の場所も差別されるようである。

ラオスの村人たちの中には、生まれてから死ぬまで、村を出ることもなく一生を送る者もいるに違いない。毎年1回の農作業を行い、家事をこなして子供を育て、外の世界がどうなっているかなど、全く知らずに生きて死んでいく。生も精靈とともにあり、死もまた精靈とともにある。悪い精靈に取りつかれないよう、精一杯の人生を歩んで行くのだろう。

ラオスでは、仏教と山岳民族の原始宗教である精靈信仰が、自然と一体化している。ラオス人は、信仰に対して不思議なくらい寛容な民族である。

「日本の民間信仰（精霊）」

ラオスだけでなく日本にも精霊信仰は厳然として存在している。だから少々記述しておかなければならない。

「地蔵さん」は民間で最も普及した菩薩で、もともとは大地の精霊を意味したものであった。日本に伝来すると地獄思想と結びつき、あの世へ行く境で救済してくれる存在として、また道祖神の信仰と結びついて、庶民の間で親しまれるようになった。しかし地蔵講は、既成宗教と全く無関係のものや関係したものもあり、特定できない。

日本には一般に「自然崇拜」（ナチュラリズム）と「精霊信仰」（アニミズム）の二つがあるようだ。前者は山水木石など自然そのものを崇拜の対象とし、後者は天然現象を引き起こさせる霊力の存在を、崇拜の対象としているようだ。

例えば山岳それ自体がその秀麗な山容のゆえに崇拜されるが、同時にそこに山神がいて、狩猟を守る神とか、田畑の作物を守護する神に転化する場合もある。

このように日本の精霊信仰はきわめて顕著で、その機能は守護神としての特徴が認められる。山中に住む山神は、山そのものを崇拜する場合と、地域住民の守護神の場合もある。

次に土地を守る土地神を考えてみると、一定の土地を守護する機能を持ち、名称も屋敷神、地神、地主神、鎮守神など多様である。

又、精霊信仰の特徴として、生産霊の崇拜がある。これは人間の生活と密着するもので、代表的なものは農業生産に結びついた「田の神信仰」である。私が住んでいる石川県では、能登半島の「アエノコト」が田神祭の代表的なものである。

妊娠婦・生児を守護する神として信仰されている「産神」は、ウブサマ・オブノカミなどと呼ばれている。そして山の神、箒神、廁神、子安神など、いろいろな神仏が産神とされている。子授け、安産祈願のものは子安神が多く、観音・地蔵信仰と結びつき、子安観音、子安地蔵の信仰となっている。

出産に際して妊婦の枕元に箒を逆さに立てること、箒で腹を撫でたりする習俗もあり、箒神を産神とする所も多いようである。

日本では火そのものを崇拜するというよりも、火を管理する神を祀ることが一般的である。家々の火所に祀られる竈神信仰、火を焚くことが祭の中心とする火祭り、火を統御する神の性格を反映した火伏せ信仰などがある。

生業を守護し福を招来する神霊として、また代表的な福神として漁業神、商業神、農業神と幅広く信仰されている恵比寿信仰は、海の人の中に端を発したもので、鯨、鮫、などをエビスと呼ぶほかに、海難者の死体や海中から拾い上げた石などもエビスと呼んでいた。

極く僅かな日本の精霊信仰を記述したが、神社仏閣の「おみくじ」が代表するように多種多彩で、神仏は尊ぶもので、頼ってはならないと信じている。

辻政信参議院議員失踪事件

元陸軍大佐（陸士36期）、参謀であった参議院議員の辻政信氏が消息を絶ったのは、1961年（昭和36年）4月のことであった。

辻政信氏は金沢歩兵第7聯隊出身で、昭和7年の第1次上海戦に中隊長として参加し、ノモハン戦では関東軍参謀として戦闘指導の任に当たり、大東亜戦争勃発時には参謀としてシンガポール攻略戦、続いてガダルカナル島、ビルマ方面の作戦を指導した、有名な陸軍参謀であった。

戦略家として著名な辻さん（我々の先輩であるので「さん」と呼びたい）は終戦の声を聞くと（終戦時は在タイの18方面軍参謀）、英軍の戦犯追及を逃れて地下に潜り（シンガポール事件関係から）、タイのバンコクから中国の重慶に至って数年とどまり、帰国後は潜行記録の「潜行三千里」を出版して話題を呼び、この話題を背景にして国会に乗り出すという異色中の異色の先輩であった。

辻さんの故郷は現在の私の居住地の東方約8kmの山間部落である。私が昭和19年秋にビルマ方面軍司令部付としてラングーンで教育を受けた後、東北ビルマの要衝ラシオに所在していた第33軍司令部に於いて、約1ヶ月間、辻さんと起居を共にして直接教育を受けたのである。

戦後、戦犯の追放が解除された辻さんは、石川1区から衆議院議員に立候補してトップ当選した。辻さんも初めての選挙であったが、組織づくりを命じられた私も亦選挙の経験はなく、思えば軍関係者の延長戦の感じで闘った。

異色の人だけに、ラオスに於ける行動と生死の問題がいろいろと取り沙汰され、以来アジアのミステリーとして話題を賑わせたが、未だにその謎は解けていない。

62才の辻さんは14年前に潰瘍の手術で胃を切り取っている上、戦時中に負傷した傷口が時おり痛んだと聞いていた。そして東南アジアは雨季が近づいて健康的には最も不安だと我々は心配していた。

辻さんの足取りは去る36年4月21日、潜行三千里の時と同じように僧侶に化け、ラオスの首都ビエンチャンにあるホテルから、ジャール平原に通じる一本道を北に向かったまま消息は途切れている。（次頁地図参照）

当時のジャール平原は、左派のパテト・ラオ軍の本拠地で、辻さんは、何らかの目的で単身平原に向かったのであろう。

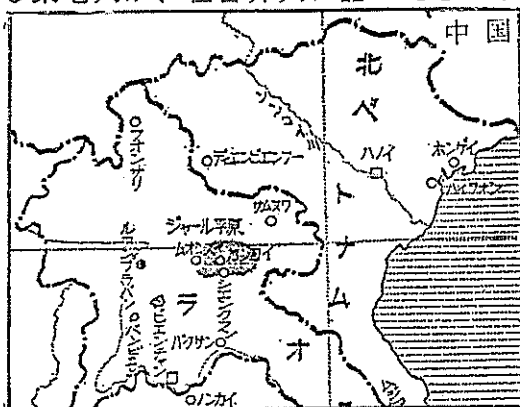
「東南アジア視察」という名目で40日の議員休暇をとり、エール・フランス機で羽田を発ったのは4月4日で、当時の南ベトナムのサイゴンに着き、南北ベトナムの情報を収集したのち、カンボジアのプノンペン、タイのバンコクを経て、14日、タイ航空機でラオスの首都ビエンチャンに到着した。ここで別府大使らの反対を押し切って、潜入計画を練ったという。

「事件の発端」

昭和36年4月21日午前、ラオス僧に変装した辻政信参議院議員は、一人の若いラオス僧をともなってビエンチャンを出発し、ルアンプラバンに向かう国道13号線を徒歩で北上したまま消息を絶った。(64頁地図参照)

ビエンチャンに最も長く滞在している某老人が、在留邦人に語ったという話は、およそ次のようなことらしい。

「辻先生がビエンチャンを出発する際、スワパーと呼ばれる明るいオレンジ色の僧衣や、身の廻り品の準備をしたのは、のちに日本大使館の現地職員となった赤坂氏だった。辻さんは国道13号線の要所で見張りをしていたパテト・ラオの兵隊に捕まり、正体不明の人物として当時パテト・ラオと、中立派の本拠地であったジャール平原のカンカイの捕虜収容所に収容された。



(上は関係地図)

彼をどう扱うかについてはパテト・ラオと、中立左派の間で意見が分かれた。しかし中国語の通訳を通じて辻さんの意見を質したがよく理解できず、当時、陰謀の渦巻く内乱の中では本人の身分も充分確かめることもせず、射殺された。某老人は辻さんを射殺した将軍から直接聞いたので、間違いのないと思うと語っている。邦人にこの話をするとマスコミなどに漏れ、自分の命に関わることにかなりかねないから、長い間黙っていたらしい。

某老人は高齢で近くバンコクの親戚に身を寄せることになったので、新任の日本大使館の参事官に置き土産として語ったと言う。

しかしそれ以外の情報もあり、詳細は不明だが、次に記載しておく。

- ☆秘密組織によるビルマ国境監視説。
- ☆中国・昆明での銃殺説。
- ☆北ベトナム生存説。
- ☆米軍謀略班の射殺説。
- ☆カンカイ(ジャール平原)における軟禁と処刑説などである。

「ジャール平原」はベトコンに対する共産側の重要な補給基地であった。辻さんがビエンチャンに到着した時は、ジャール平原を巡って右派と左派・中立派連合軍とが、激しい攻防戦を繰り広げていた最中であった。戦国時代のような状態は、日本国内では全く判断できなかったことである。

「辻政信氏の人物像」

辻さんは何故このような一般に理解できない奇妙な行動をとったのか。そして当時のラオスの情勢が陰謀の渦巻く内乱状態であり、外国人の個人行動、特に隠密行動が如何に危険なものであったか、考えてみなければならない。

終戦をタイ方面軍(18軍)参謀で迎えた辻さんは、これから日本国内に

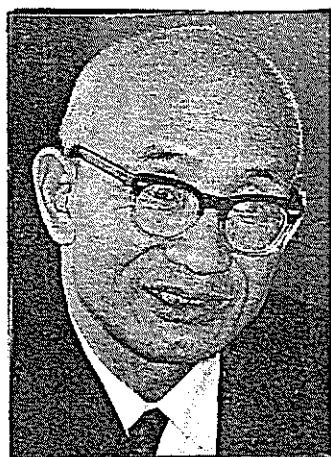
名声を轟かした「潜行三千里」が始まったのである。

イギリス軍の戦犯追及を逃れるため、タイの僧に変装してバンコクのリャブ寺の日本人納骨堂に潜伏した。そこでバンコクにあった国民党（蒋介石総統）地下工作本部と接触し、蒋介石に会って日華合作の道を開きたいと重慶行きを申し入れた。（右下は辻政信参議院議員）

許可されると直ぐバンコクを脱出し、メコン川を渡ってラオス、ベトナム領を走破し、フエ、ハノイを経由して中国の昆明、重慶に辿り着いた。さらに南京に出て国民政府国防省に勤務したが、政府の腐敗ぶりに憤慨して日本に帰国することを決意した。

1948年5月、大学教授の肩書きと変名で引揚船に乗って佐世保に入ったが、イギリス軍の追及の手はなお厳しく、全国にいる知人や東亜連盟の同志に頼る潜行生活が続いた。

（東亜連盟は、石原莞爾中将の構想にもとづいて、日本・中国・満州の一体化をめざして昭和14年に結成された団体）



1950年1月、ようやく戦犯容疑が解除され、家族が待つ東京世田谷の家に帰ることができた。その後、戦争体験や潜行生活の経験を基にした「潜行三千里」「ガダルカナル」「15対1」などの著作を発表したが、それらはベストセラーとなった。

この人気を背景にして、1952年秋の総選挙に石川一区から立候補して最高点で当選した。1953年3月、吉田総理の「馬鹿野郎」解散による2度目の選挙で2位で当選、1954年11月に鳩山一郎総裁のもとに結成されて日本民主党に参加し、1955年11月、保守合同により自由民主党に党籍が移行した。1958年5月の総選挙では3位で当選。1959年4月、総裁公選の買収問題などを批判して自由民主党から除名処分を受けた。

衆議院議員を辞して、同年6月の参議院選挙に全国区から立候補して第3位で当選を果たした。これらの経過が過剰な自信となったのかも知れない。

辻さんのラオス行の起因を分析すると、次のようになるだろう。

アメリカではケネディ政権が誕生したこの際、インドシナの戦火を消し、アジアの五族協和の理想を実現しなければならない。ここで北ベトナムのホー・チ・ミン大統領を訪ね、アメリカの巨大な軍事力を説明し、フランス、イギリスに芽生えているラオス和平交渉への動きを教えてやれば、ホー大統領も理解を示し、自分の意見を容れるに違いない。辻政信の名前を挙げる最後の機会だ、という判断もあったのではないだろうか。

辻さんの驚くべき行動力と意志は、六〇才になんなんとしていたことを考えると、驚嘆の至りである。しかし今回の旅行で当時のラオスの情勢を知り、先輩の行動が如何に危険であり、それを察知できなかったのかと悔やまれる。

「事件の時代的背景」

当時のラオスは陰謀逆巻く内乱の時代であった。1954年、フランス軍はベトナム北部のディエンビエンフーで、決定的な敗北を喫した後、ジュネーブ和平会議が開催された。そしてラオスでは左派のパテト・ラオを含む連合政府を樹立し、国内統一を成し遂げる必要がでてきた。

しかしアメリカは、連合政権がパテト・ラオによる左傾化することを恐れ、軍部と右派を密かに支援した。アメリカの軍事援助を受けていた右派軍は、ビエンチャンを攻撃して占領してしまった。

そのため中立派はパテト・ラオと手を握り、ジャール平原のカンカーイに本拠地を移した。ここでソ聯は公にパテト・ラオに軍事援助を開始し、北ベトナム、中国からも軍事物資が届き、ラオスの内戦は米ソ、東西の代理戦争の様相を呈してきた。

辻さんがビエンチャンを訪れたのは、ラオス内戦の最中であり、国際問題化しつつある時期であった。

ビエンチャンの街は平穏に見えたが、内実は一挙に流れ込んだ大量のドルを求めて、ラオス人は10倍にも膨れ上がっていた。それに乗じてパテト・ラオや右派のスパイが暗躍し、事実上無政府状態となっていた。一見平和で牧歌的に見えるラオス人の生活の裏で、陰謀の渦巻く無気味な都市に変貌していたのであった。

いつ北からパテト・ラオが攻めてくるか分からない状態であった。ビエンチャンが三派の内乱によって焦土と化すのは時間の問題で、各国の特派員も危険を感じて引き上げ始めていた。

こうした状況下で国道一三号線を北上することは、北部のパテト・ラオの支配地域に向かうことであり、外国人であることに気付かれるのは時間の問題であった。

事実、辻さんは1961年4月21日、出発日の午後にはパテト・ラオの警備兵にビエンチャン郊外で捕らえられ、スパイ容疑でジャール平原のカンカーイへ連行されたとも言われている。

（右上の写真はビエンチャンで辻さんが宿泊したホテル・セタ・パレー）

カンカーイでは辻さんの身元も確かめもせず、辻さんを利用しようとするパテト・ラオと中立派が対立し、結局、スパイ容疑で消されたのではないかと、推察される。

残念ながら、当時の在ラオス日本大使館とパテト・ラオとは連絡をとる手段はなく、パテト・ラオ側も辻さんの身元を確かめることもなく、中国語通訳を介した辻さんの主張も、パテト・ラオ側には理解できなかったものと推察される。



「失踪の原因と動機」

辻さんが終戦直後実施した「潜行三千里」の時代はすでに終わっていた。当時、辻さんが踏破したインドシナ情勢は、東西関係の狭間の中で複雑に変容していた。また、アメリカとベトナムの対立も和平交渉が困難なほど先鋭化していた。

「潜行三千里」では、辻さんはバンコクから鉄道と車でビエンチャンに入り、船と車でベトナムのフエに到着している。当時のラオス領内には中国国民党軍とフランス軍が混在していた。辻さんの潜行を助けたのは、中国国民党の特務機関・藍衣社のバンコク支部と、ビエンチャン支部の黨員たちであった。

なぜ中国国民党が辻さんの潜行を助けたかという点、辻さんが関東軍参謀時代に、南京政府・特務機関の地下工作員だった「張先生」なる人物が、日本軍憲兵に検挙されたのを助けたことが遠因となっている。

張先生は重慶特務機関の藍衣社の戴笠將軍を通じて、蒋介石につながっているという重要人物であった。これが縁となって、辻さんが僧侶に化けて藍衣社のバンコク支部に接触した際、戴笠將軍の命令で、辻さんの脱出を助けることになった。

しかし潜行三千里の時の辻さんの行動と、今回のビエンチャンにおける同氏の行動には根本的な差異がある。潜行三千里の時は国民党員の庇護のもとで重慶に辿り着き、蒋介石に接触する希望があった。しかし、今回の行動では庇護者と頼む人物も組織もなく、完全な単独行であった。

辻さんはビエンチャン駐在の別府大使の説得にも耳を貸さず、僧侶に変装した姿は、眉も剃らず黒縁の眼鏡をかけてラオス僧としては異形であったようだ。辻さんはそれらの忠告を無視した。タイの僧侶に変装して潜行三千里を実戦した辻さんが、このことに気がつかない筈はないと思う。

要するに辻さんは、北ベトナムのホー大統領に会えるという何の確証もなく、周到な準備を行うこともせず、ただ漫然とビエンチャンの郊外のホテルから、炎天下の国道13号線を北上したような気がする。日本大使館の関係者たちも、いずれ王国軍かパテト・ラオ軍に捕まり、ビエンチャンに送り返されてくると、楽観的に考えていた可能性もあるようだ。

結局、辻さんの行動は何を目的にしていたのであろうか。

当時のラオスの内乱を巡る右派、中立派、左派の複雑な対立構造や、パテト・ラオの民族運動の根深さ、それに底知れぬ反米感情を十分把握することなく、自己の過去の幸運と栄光にとらわれて、辻さん独特の実行力を過信して行動を起こしたのではないだろうか。

しかし潜行三千里にみられる辻さんの緻密で迅速な行動を考えると、前記の通りラオスでの失踪を巡る状況は奇異である。

辻さんは石原莞爾さんのアジアの五族共和という、東亜連盟の思想に心酔した理想家肌の旧軍人であった。こうした人物が清濁合わせ飲む政界に入り政治家になったが、現実の政治の世界と自己の理想との乖離が次第に酷くなり、最後に求めた場所が、戦乱の逆巻くインドシナではなかったのか。

周到な準備をするには時間もない。国会議員の肩書きがあれば何とかなる。幸いエジプトのナセル大統領や、中国の周恩来首相と撮った写真も持っている。パテト・ラオも手荒なことはしないだろう。運が良ければ国交のない北ベトナムのホー大統領に会え、自らの名前を挙げる最後のチャンスとなるだろうし、失敗しても思い残すことはない。こんな気持ちで、人生最後の大勝負を賭けたのでないだろうか。

陸士、陸大を通じて辻さんと同期生だった元陸軍大佐甲谷悦雄さんは、辻君は昔から、とことんまでやらないと気がすまないたちだった。ホー・チ・ミン大統領と話し合わなきゃ・・・というようなことも言っていたらしいし、中共の実態をいちど自分の目で見なければ、気がすまないという気持ちもあったのであろう。

民族主義者で、アジア人のアジアという立場から、何かを考えていたのに違いないが、共産側と繋がりがあったという説ははっきり否定できる。

出発前、同期生の一人に、「ラオスに行ってくる」。「池田さん（前首相）がアメリカ訪問に出掛ける前に帰ってくるよ」と洩らした事実があるので、池田さんへのお土産を計画していたのかも知れない。

甲谷さんは当時、「二年前までは生死五分五分と思っていたが、いずれにしても自由な状態にないことだけは確かだろう。彼独特のスタンドプレーがこの悲劇を招いたのだ」と言い切っていた。

私は前記したとおり、ビルマの第33軍司令部で辻さんと起居をともし、その後も隷下師団の大隊長として阿鼻叫喚の最前線で闘った。その間の辻さんを回顧すると、自分の目で確かめなければ承知できない性格であったと思っている。だから、下級の者にとっては頼れる上官だったが、上級者は使いにくい人物だったかも知れない。そして作戦の神様という評判は、あの劣悪な装備で闘った我々は負け戦の連続で、神様・仏様というのは論外である。

最後に「謹んで辻さんの御冥福をお祈り致します」。

あとがき

ラオスは世界で最も不思議な国の一つである。それは耳がよく聞こえず、案山子にものを言っているように、ツンボ座敷の身でありながら、私なりに見て回った率直な感じである。

多民族国家のラオスの人達は、最後まで自分の尊厳をもって生きており、最後まで自分のままで居られる民であろう。陸地の果てに棲むような暮らしは、平家の落人部落と言われた深山幽谷の山間僻地の感じが強く、本当の人間生活を垣間見たような気がしている。

率土の濱というのか、空と水と土を友として生き続けているラオス人の忘れられない光景は、1995年に世界遺産都市に選ばれたルアンプラバンを筆頭に、帯の流れのような茶色に染まったメコンの大河、その河畔に点在する小さな貧しい家々の塊、そして54年振りに見た焼畑農業などであった。

市街地といわず奥深い谷間の隅々まで、精霊を信仰している純朴な心もまた特筆すべきことである。いろいろな霊や妖怪を信じることは即ち、人情が厚く世間慣れしていない気風であろう。それだけ進化の波に汚染されていない証拠で、私は特に鄙びたところに魅了されてしまった。

メコンの夕景に何故か人の匂いを感じた。夕焼けの赤みが消え、次第に濃くなる薄闇のベールの中に、メコンの流れも人の姿も次第に輪郭をなくし、一瞬の落日が鮮やかな光芒を残して消滅した。我が人生もあのようにして消え去ることが出来れば、満足だと思って眺めていた。

老人は全く凄い。戦友や周りの人たちが、一人ずつ櫛の歯が抜けていくような寂寥感の中でも、平然として生きている。自らの未来が判らないから良いので、未来が判りすぎる悲しみほど孤独で荷の重いものはないだろう、と自分に言い聞かせている。それは負け犬の遠吠えに似ているかも知れない。

死の淵が口を開けて待っていた阿修羅の時から、我が人生は短命だと覚悟していた。それが九死に一生を得て知らず識らずのうちに永くなり、今日まで生き延びてしまった。今、酔生夢死に一生を終らんとしているのである。

今日まで私が学んだことがあったとすれば、それは何の価値もない自分を見付けたということである。そして、何の意味もない人生に生きることを、喜びとすることを学んだことだろう。

「日暮れて道遠し」というが、私にはそんな思いはさらにない。「病い上手に死に下手」、万病もちが反対に長生きすることを最も恐れている。これから日一日を末期の目で接していれば、閉じる時も悔いは遺らないだろう。

「鱧も一期、海老も一期」(ハモもイチゴ、エビもイチゴ)の譬えの通り、人間はいろいろな運命を辿るが、みな同じように一生を終るのである。「朝蠅暮蚊」のうるさいばかりの駄文だが、私にとっては人生最後の海外旅行記である。

